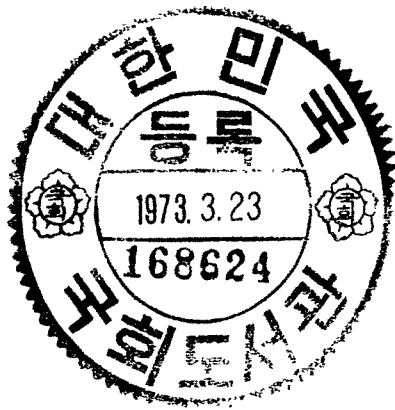


國土計畫資料第二輯
昭和十五年十一月

國土計畫に関する論文集

朝鮮總督府企画部第一課



國土計畫に關する論文集(其の二) 目次

第一篇 總論

一、企画院 國土計畫について……………(週報昭和十五年十月二日)……………一

二、滿洲評論 國土計畫の進歩性と條件……………(滿洲評論昭和十五年九月廿八日)……………九

三、同盟通信社 國土計畫登場の意義……………(國際經濟週報昭和十五年八月廿四日)……………一五

第二篇 工業

一、川西正鑑 國土計畫と工業立地……………(職前工業会誌昭和十五年四月)……………一

第三篇 農業

一、小野武夫 日本農村と國土計畫……………(改造昭和十四年十二月)……………一

第四篇 人口

第五篇 雜

一、エコノミスト 人口と国土計画……………（エコノミスト昭和十五年八月廿九日）……………一

一、科学主義工業 国土計画の進展（座談会）（科学主義工業昭和十五年十月）……………一

附 録

一、第二次近衛内閣基本国策要綱……………一

二、新体制準備会に於ける近衛首相の声明……………五

第一
篇
總
論

(一) 國土計畫について

週報第二〇七号
一五、一〇、三

企 畫 院

國土計畫とは何か

政府が八月一日に発表した基本国策要綱えうかくの中に、「日滿支を通ずる綜合国力きうごうりきの発展を目標とする国土開發計畫の確立」といふ一項があつた。この国土開發計畫を如何に定むべきかについては、殖業じりやう企画院が中心となつて研究を重ねてゐたが、九月二十四日国土計畫設置要綱として閣議決定を見るに至つた。この機会に、国土計畫とはいかなるものか、設置要綱を中心に簡単に説明することによらう。

国土計畫とは 国土の総合的な保全利用開發の計畫である。従つて国土計畫の必要は最近急に唱へられ始めたものではない。わが國でも既に、樺川時代に佐藤信淵さとうのぶみが「国土経緯」といふ名で国土計畫の重要性を説いてゐるのである。

しかしその国土計畫が、時局下の今日、特に緊急な問題として取りあげられ、基本国策中の主要な一項としてその設定を急がれてゐるのには、次のやうな理由がある。

国土計畫はなぜ必要か

支那事變の目的が東亜新秩序の建設にあり、東亜新秩序建設の理念が、肇国の理想たるハ茲一字の精神を基調とすることは改めて説くまでもないが、日滿支各々その分に應じその処に従つて、新らしい東亜の秩序を建設するためには、産業經濟に於ても、交通その他方面に於ても、日滿支を通ずる具體的且つ科學的の計畫が必要である。国土計畫が必要とされる第一の理由はこれである。

纏つて時局下の国内の状態を見ると生産力拡充の進展に伴つて、大都市を中心に工場が急激に増設された結果、都市と農村の人口と異常な變化を生じてゐる。即ち都市は過度の人口集中となり、保健、衛生、防空などの上に、或は交通問題、住宅問題の上に由々しい問題が惹起してをり、一方農村では先祖傳来の美田が潰滅し、山林が荒廢に導かれるなど、種々の問題が起つてをり、これらの問題に一定の計畫に基づく統制を與へる必要は極めて切實な問題となつてゐる。これが国土計畫を必要とする第二の理由である。

勿論、都市の分散配置の問題、工業の地方化の問題、農業生産の計畫化の問題などは部分的には研究もされ、実施もされてゐるのであるが、これらの計畫を有機的、綜合的に

運営する総合計画を使いてゐる結果、すべての計画の実行力が弱められてゐる。この缺陷に対処し、時局下の各種の政策に統一した計画目標を與へるのが国土計画である。

世界情勢を見れば、ヨーロッパでは独伊、南北アメリカでは北米合衆国、北方ではソ聯を中心とする三大プロツクを形成しようとしてゐる。東亞の諸国と民族が、これらの国家群に対応して存立を全つするためには、日滿支を中心とし南洋をも含む東亞の諸国が一丸となつて、一大共榮圈を完成しなくてはならない。世界新秩序の一環としての東亞新秩序の建設には、日滿支を通ずる国防国家態勢の強化が何をおいても緊要である。

従つて国土計画の目標は、日滿支を通ずる国防国家態勢の強化を図ると云ふところに置かねばならない。地域的には滿支を含み、時間的には国家百年の將來をも考へて、産業、交通、文化等各般の施設と人口の配分とを、国防国家建設の目的に副ふやうに総合的に計画し、国土の総合的利用崩発保全を図るのが国土計画である。時局下の各種の政策はこの国土計画の一貫した指導方針の下に、統制的に推進されなくてはならないのである。

いかに計畫を立てるか

国土計画の中心問題は産業配分計画と人口配分計画である。

工業配分計画についていへば、重工業、化学工業、軽工業の各業種別の配分計画が必要であり、日本にはどういふ工業をどの程度に起すべきか、滿洲には何工業を起すか、東北地方には、九州地方には、といふ具合に配分方針を定めてゆくのであり、これに従つて工業地帯をどし、設けるといふやうに進めようといふのである。

銚業の配分計画は、各国土に即した銚産資源の開發計画である。

農業についても、例へば内地に於ける食糧の自給限度は如何にすべきか、耕作物の種類を地域別に如何に合理化すべきか、といふやうに農業計画を立てるのである。水産計画や林野計画についても同様である。

すべて経済に關する計画の目的は、東亞共榮圈内の資源を開發し、涵養して、食糧、軍需その他必要物資の自給を出來得るだけ確保し、延いては國際經濟界に於て優勝者たるべく努めることをその目標とする。右も国土計画といつても、たゞ国土を物として利用開發するといふのではなく、常に我が国土を完成してゆくといふ国土愛の精神を基調として、計画を進めなくてはならないのである。

人口の配分計画については、先づ都市配置の問題があり、農業人口とその他の人口を如何に配分するか、の職能別人口配分計画、どの地域にはどの程度の人口を適當とするかの地

域別人口配分計画 更に日滿支を通じての総合的移民計画等がある。

人口の配分計画といつても、必ずしも強制移民や強制移住を意味するものではなく、人口の理想的分布計画を立て、その計画に副ふやうに産業を配分し、また文化、厚生の諸施設を配分して、人口が自然に理想の方向に流れて行くやうにするのである。

産業の配分 人口の配分に伴つて、否その前提条件として、総合的な計画 動力計画が必要なことはいふまでもない。交通計画には、東亜交通通信の整備計画と内外地の交通通信整備計画の二つがあり、陸運、海運、空運の一貫的综合計画が考へられる。動力計画には燃料問題も包含されねばならない。更に根本的には治山治水計画、利水計画も必要である。

以上の国土計画の立案に當つては、産業と人口の統制的配分に重点を置き、交通計画、動力計画と常に有機的な關聯を持たせなくてはならない。そして常に防空問題に重大な考慮を拂はなくてはならないのである。

計画の目標は日、滿、支、南洋を含む大東亜共榮圈の確立にあるが、計画の立案には、例へば五年と十年とか一定の目標時期を定める必要がある。国土計画には夢がなくはならないが、夢であつてはならないからである。

として国土計画の立案、研究、調査などは、すべてあらゆる情勢に即応し得る如く、動的、発展的なものでなくてはならない。固定的なものであつてはならないのである。

国土計畫の二つの種類

今回設定しようとしてゐる国土計画は、日滿支計画と中央計画の二つに分れる。

日滿支計画は日滿支三国を通ずる計画であつて、日滿支三国で行ふ国土計画の基準となるものである。即ち日本にとつては次に述べる中央計画の基準となり、滿洲国に対しては滿洲国綜合立地計画の基準となるべきものであり、支那に対しては支那に於て行はるべき諸種の開發計画の基準となるべきである。

中央計画は、日滿支計画を基準として策定する日本の計画であり、内地外地を一体としてこれを対象とする計画である。この中央計画の策定に當つては内地外地各地方の特性を發揮させるやう、國家的な見地からする国土の綜合的利用開發計画を立てねばならない。この中央計画は各省の行ふ事業計画の基準となり、内地各地方の地方計画や各外地の行ふ開發計画の策定の基準となるものである。中には各省の行ふ事業として直接実施されるものもある。

國土計畫の事務の機構

以上の國土計畫は内閣總理大臣の主管として、その事務は企画院が掌るが、計畫の策定と運用に關する諮問機關として、内閣に官制による國土計畫委員會を設置することになつてゐる。

各府は國土計畫の策定に參與し、その所管に従つて計畫の内容事項の調査、計畫 実施に當るのである。計畫の実施に當つては、内閣總理大臣は各府の行ふ事業について必要な統轄を行ふことが出来るやうにしなくてはならない。地方計畫についても内閣で統制して、全般の統一を図るのである

むすび

世界は今、歴史に著て見ないほどの急激な変転を見せようとしてゐるが、これは要するに、従來の唯物論的個人主義、自由主義、營利主義の行詰りである。これに代つて登場すべきものは、経済的にいへば、國家目的のために國家の資源と労力、資本と技術とを全面的に、しかも計画的に利用開發動員すべき計畫經濟であるべきことは當然である。自由主義

国家といはれるイギリスやアメリカでさへ、国土計画に類似した計画が研究されてゐるのである。

この国土計画が立てられた際には、産業、経済、交通文化等の諸施設と人口の配分はこの計画に従つて合理的に編成されることになるのであり、国家の諸種の政策も国土計画を基準として、計画的に統一的に推進されるやうになるのである。国土計画によつて我が国の経済建設の基本方式が確定すれば、最近問題となつてゐる産業経済界の不均衡、各種の行き違ひなどの問題も解決するものと確信する。

(一) 國土計畫の進歩性と條件

(滿洲 昭和十五年、九、廿八 評論)

広川 生

要	旨
<p>近日発表せられたる國土計畫には、多くの進歩性が認められるが、唯その要綱の示す範圍では、それ自身に於て有機的を用いてゐる点を指摘し、國土計畫が何が故に今日の課題とならねばならないか、またそれを必要とする今日の政治、經濟文化は如何なる矛盾を持つか、このことがまづ解決されねばならない。次の段階に必至に生み出されるものは、現段階の矛盾のうち潜んでゐるからであり、如何なる計畫の樹立もこの真を明瞭に把握することが何よりも必要であり、此処よりシスマチックに出発せねばならないと結ぶ本論文は、日本國土計畫設定要綱に對する總括的批評として多くの着眼性を持つものであると云へよう。今時に夫は朝鮮國土計畫策定上考慮すべき構想上の基本觀念 對し一つの命題を提示したものである。</p>	

日滿支国土計画は星野企畫院總裁の就任早々から、強調されるところがあつたが、その具體的な内容と客観的意義については、去る二十四日商議に於て正式決定を見、発表されたところである。その目標とするところは「日滿支を通ずる国防国家体制の強化を図るを目標」とするもので、地域的には日本を中心し滿支更に南洋をも加へたものであり、時間的には国家百年の將來を考慮したものである。即ち、国土計画の目標は、從來屢々懸へられて来た「日滿支ブロック経済」の課題を総合的に、かつ本質的に取り上げんと意図して居るものであり、従つて、その目標は東亞共榮圈に於ける国家永遠の調和的發展を考慮すると共に、今日の世界の危局に相應する国防体制の確立を達成しようとするものである。この點は星野總裁談のうちに明確に示されて居るところである。總裁は国土計画を必要とする理由を二つの點から説明されて居る。一つは、世界的転換期に於て東亞共榮圈の形成を完遂するためには「日滿支を通ずる総合的な科学的計画を樹立し」することが不可缺の要件となつて居り、第二、ブロック間の立地向題とか、或は都市の分散化の向題、工場の方化の向題、農業生産の計画化の向題等はそれら、部分的には研究されて来て居るが、今やこれらの諸計画の「有機的組合を四るべき適切な融合的計画」を樹立することが必要となつて来て居るといふのが總裁の主張である。

国土計画設定要綱及び星野總裁談に現れた主要點は以上の如きものであるが、これ等の主張についてみれば、新東亞の建設が日本の運命として課された今日、国土計画といふ異常な綜合性を持った計画の樹立は、たしかに進歩性を認めねばならないであらう。従来の日滿支にわたるプロツクの諸問題は必ずしも綜合的に把握されたとは云はれない。プロツク經濟の必要が強調され、日滿支に亘る生産の計画性、或ひは配給の計画性が主張されたことは一再ではないが、いづれも單なる資源追求主義を出でず、また資源追求主義が如何に主要なものであるとは云へ今日の東亞共榮圈の確立の中心課題の一つである文化、或ひは基本的な命題である民族政策等については何等の考慮も拂はれず、單に經濟第一主義で押し通さうとする試みに過ぎなかつた。社会生活の過程に於て經濟の占める地位が如何に重大なものであるかを決して否定する訳ではないのであるが、その場合ですら、現段階に於けるプロツク經濟の本質と現状、そしてこれが特に、支那事変といふ世界的な意義を持つ戦時過程から形成されつゝ、あることに對する無理解、従つて東亞共榮圈といはれるプロツク經濟は、オツタワ會議以來、今日の課題となつてゐるプロツク經濟の概念とは全く異つたものであること、このことばかりでなく、東亞プロツク經濟が既にその内に占める各個の經濟の特殊性と全体としての統一性といつたものすら忘られ勝であつた。そし

てそれが通例であつた。このやうな通例なるもの存在に比較すれば、日滿支国土計画は明らかに進歩的な役割を擔ふものと云はねばならない。例へば、其処では日滿支經濟配分計画が主唱されてゐると共に、綜合的治水治山及び利水計画、綜合的人口配分計画、文化構成施設の配分計画といったものまで加へられてゐるのである。このことは、計画要綱中の主要策定事項を見れば判然とする。

さて、このやうな国土計画のもつ進歩性を、吾々はその要綱のうちから讀み取ることが出来るのであるが、それだからといって、要綱の示すところのものが、完全に東亞共榮圏の本質と課題を衝いてゐるとは云へないのである。もつとも計画要綱はあくまで要綱の範圍を出さないもので、この背後にはより詳細な周到な細目が予定されてゐるものと考へて良いのである。従つて示された国土要綱の範圍内では、その進歩性を見取り得ても、この進歩性は一定の條件つきのものである。其処で、これらの條件について、二、三の點を兩題にせねばならない。要綱では日滿支經濟の生産配分の計画化が第一に取り上げられてゐるが、その内容は勿論、他方に高度國防國家体制の強化、一方に東亞諸民族の共榮といふともすれば二律背反的な要素を含んでゐるところのものであるが、問題は、この二律背反性を單に背反するものとして放棄するのでは如何にしてこの兩者を適當に融合せしめるか

といふ點に重點がある。この點については要綱は必ずしも明確ではない。この二つの要素は現在の東亞に於ける戦時経済の矛盾の集約されたる面なのである。この點の解決が、緊要の課題となつてゐるのであるから、特に明確化することが必要である。

要綱の主要策定事項には、特に総合的人口配分計画が取り上げられ、其次では(一)都市配置に關する計画、(二)職能別人口配分計画、(三)地域別人口配分計画に総合的移民計画が包含されてゐるが、この點は文化の問題と直接關聯を持つと共に、生産行程に不可欠な労働力調達の問題であり、従つて、経済の計画化と十分關聯して考慮されねばならない筈である、と共に、特に人口問題は、問題の性質が日滿支全体を遍する課題として存在する以上、民族問題即ち民族政策の在り方が第一に取り上げられねばならないであらう。云ふまでもなく、民族問題は實に西難無比な命題であるに相違ないが、今日の東亞がロツクが従来の植民主義と本質的に異なるものとして登場してゐる以上、この問題により立ち上つた進歩した解決が要求されねばならないであらう。同じ策定事項中に文化構成施設の配分計画が包まれてゐるが、この課題も亦、思想の問題として解決されねばならない。東亞共榮圏が、東亞に於ける帝國主義の排除、これにつらなる東亞に於ける人間の解放といふ最高の目標を持つ限り、文化は、その内容に於て、以前の如何なる思想にも秀れたものを生

み出さねばならない。それは新たな思想として、東洋の諸民族に共通するものを生み出さねばならない。文化構成の持つ内容がこのやうな意味合を持つものでなければ、文化機関の單なる施設も其機関にとつては無意味なものに過ぎないであらう。

さて、このやうな二、三の條件を持ち出さねばならない理由は何処にあるだらうか。これは外でもない、我々の點に於て進歩性を持つ国土計画も、その要綱の示す範圍では、これ自身に於て有機的な構成を缺いてゐることに歸する。従來の種々の計画案に於けるとは様に、此処でも計画の並列はあつても、その有機的組合せ、綜合性が使如してゐる。このことを由來せしめるものは、問題把握の方法のうちに在るといへよう。国土計画が何が故に今日の課題となりねばならないか、またそれを必要とする今日の政治、經濟、文化は何なる矛盾を持つか、このことが先づ解決されねばならない。次の段階に必至に生み出されるものは、現段階の矛盾のうち潜んでゐるからである。如何なる計画の樹立もこの點を明瞭に把握することが何よりも必要であり、此處よりシステマチックに出発せねばならない。国土計画の一層の細分化は当然此のやうな點の考慮が拂はれねばならないであらう。

(三) 国土計畫登場の意義 (抄)

同盟通信社

旨	要
<p>論調が所謂新高態を脱して居らないため、非論理的であるとの批難は免れないが、国土計畫の性格とその可能なる條件を簡明に把握してゐることは認めねばならない。</p>	<p>国土計畫とは高度国防国家体制確立を目標とし、国家的根據の上に、技術的、経済的、社会的、国防的見地からする総合的發展の念願を指導精神とし、国家の全機構に亘り、人と国土とを有機的体制に綜合計畫化するものとし、独ソの国土計畫に於ける特質を瞥見しつゝ、国土計畫は究極に於てその基本を人口政策に置くべきことを示唆して居る。</p>

國土計畫の新段階

大東亜共栄圏建設を目指して、国防国家体制完成を期する政府は基本国策大綱中に綜合国力の發展を目標とする國土開發計畫確立を闡明した。國土計畫については今春末企画院を中心に政府各機關の府で研究立案が進められ、十月頃には官廳をもちつて内閣に國土計畫中央委員會を設置、國土計畫法を制定し、明年度予算を計上して中期計畫の具體化に着手される機運となつた。

國土計畫とはいかなる内容をもつものか。まづ國土計畫の定義であるがその國情と時と處とによつて國土計畫の目標、範圍、内容が異なるごとく、例へばドイツでは「國土の綜合的目的構成しでありイギリスでは「土地利用の分配および負擔」とされ、アメリカでは「天然資源と人的資源の秩序ある發展および合理的利用」とされるなど区々である。これは後述の如くの具體例にみる通りである。要するに高度国防国家体制確立を目指して國家の根據の上に國土の利用開發を最高度に高めると共に産業、經濟、行政機構を整備統制し、これと密着して交通、運輸、給水の如き公共施設を合理的に配備して都市と農村の不均衡是正、國民の生活確保など、人と國土とを有機的体制に整へることでありそれが一定

の指導精神のもとに綜合計画化されるものを意味するといひ得よう。

利潤經濟の止揚

国土計画の出発點としては自由主義的資本主義經濟の諸關係からの離脱が要求される。従來の自由主義的資本主義の體制下に於ける經濟力の利用は、例へば産業活動においても低廉なる労働を求め、或は輸送費の少なきところを定め、全体としての私利利潤追求の計算に應じて産業活動がなされて来た。しかし、新たに向題となる国土計画は、利潤に準據することなく、自然的經濟力を國防經濟的意義と國民生活の充實とにおいて一國の經濟力を開發助長することである。そのためには従來資本主義經濟の見地からは価値を認められなかつた土地を生かし、また資本主義經濟の動機によつて集中した産業の分散をはかり以て前記ニ標準から全國土を最大限に利用せぬ、政治新体制確立への歩みとともに、逐次、統制の再検討、生産機權の再編成へと進みつ。ある最近のわが國經濟界の諸様相の中に、この国土計画樹立の曙光が見出される。利潤の極端な追求を抑制するといふ點に關しては、米内閣内閣時代、陸軍が強力な統制に乗り出し適正利潤算出の方式を明示した。同時に工場管理移行が促され、こゝに計画生産の第一歩が踏み出されたのである。

従来の自由主義的經營を揚棄し、高度の国防目的に添はしむべく、一切を統轄し運用するといふ国土計画の本然の相貌はこの時すでに看取されだ。

近衛内閣の成立と、もに、經濟界の上下を挙げて「公益優先」の相言葉が叫ばれ始め、斯せずして今後のわが産業界の動向を一致せしめたことも、これから進捗すべき国土計画に最も明確にして力強い精神的裏うち乃至基礎工事を施したものに外ならない。公益優先は反対側から眺めれば私益の犠牲である。しかし、私益の放棄は広汎な綜合計画經濟の確立により放棄したもののよりも遙かに大きな国家的利益を齎らすものである。

獨ソの國土計畫

國土計畫の實踐者としてはソ聯邦とナチスドイツがある。新政府が特に國土計畫實踐の第一歩を踏み出さんとしてゐる際、これらのアウトラインを知ることには無意義ではないであらう。

△ソヴェートの國土計畫

ソ聯邦の國土計畫は 國家計畫（ゴスプラン）の中に包含せられ、ソ聯邦委員会によつて進められつゝ、あるもので、全國土を工業地域とその他の産業の地域とに大別し、その

各々の分野において建設せらるべき目標を示してゐる。ソ聯邦の国土計画は

- (一) 各種工場間の連絡に重點を置く
- (二) 既設工場の接壊地に教育機関および各種の研究所を設置する
- (三) 農業労働と工業労働との結成
- (四) 住居の配置を各人の職業に應じ集団的にする
- (五) 文化施設の尊重

等にその特質がみられまた單に量的計画に止まらず、質的方面においても多大の關心が拂はれてゐる例へば、労働生産性、生産費、設備の利用系数等が考慮され、その具体的数字として、生産費においては前年に対し重工業では三・四%、軽工業では一・九%の引下が計画され、また電力の年生産高は四百十二億キロワット時と計画されるとともに、一キロワット時に要する燃料は〇・五八五と定められてゐるなどである。

計画は十年乃至十五年を一期とする一般計画、五ヶ年計画、年度計画、これを細分して具体化した四半期計画等によつて実施されてゆく。計画品目についても極度の工程にまで區別され、例へば鋼材のみで五十種以上の品目が掲げられてゐるのである。

△ドイツの国土計画

ドイツの国土計画は ナチス政策の指導原理たる「公益は利益に先行する」といふ建前
の下に 法規によつて実践されてゐる。ドイツ政府世帯計画としては

(一) 人口政策

(二) 国家食糧及び原料経済

(三) 増産調整

(四) 経済調整

(五) 経済立地および工業施設

の五項目を挙げてゐるが、これらの要綱の具体策として目下着手されてゐる事業は、産業
聚落の創設人口の大都市集中の緩和、工場の地方的分散、自動車国道網等であつて、その
個々について略述する

(一) 産業聚落の創設—工業と農業の二聚落に分かれ、義務的就業、集居居住等の方法
によつて行はれてゐる。

(二) 人口の大都市集中の緩和—この計画は拡張の制限、旧市中の疏開が地域、住宅、
工場等の制限、禁止或は入市許可制等によつてなされる。

(三) 工場の地方的分散—国防上の立場から大工業を中小工業化して地方農村にバラま

く方法がとられてゐる。この計画実現のために法律により工場の大都市よりの移転を強制し發軔費用の負擔、課税の減免等の方策が講じられてゐる。

(四)・自動車国道網の建設—自動車道路の使命は旧来の都市間の紐帯たることから既述して農村の結合機能とならんとしてゐる目下十ヶ年計画として一篇七千キロの自動車国道建設計画が樹てられ、既に一九三三年—九年間に七千余キロが完成をみてゐる。かくのごとくソ聯邦、ナチスドイツの国土計画は国情、地理的條件、産業構成等の異なるに従ひ差異あるを免れないが、その基調となるものはいづれも人口政策であるといへる。而ち農村の振興および農村人口の都市への流入防止をその根本思想とするものである。

人口政策に力點

国土計画が綜合的国力の發展をはかるキイポイントであり、それは當然、經濟、文化、交通各般に亘り、日滿支を包含する綜合計画として企画實施されるべきであることは論を俟たない。従つて、かゝる綜合的計画の一環としての日本国土計画は(イ)国民生活の向上(ロ)生産力の拡充(ハ)国土の防衛の三點にその目標が置かれねばならぬことは計画要綱中にもみだごとくである。

かくて、国土計画は一方において既に実施されつゝ、ある物資需給計画、労務動員計画等との調整を図り、それら相互間の連絡を有機的ならしめるとともに、地方において、従来
の都市計画法、その他関係法律を運用し、或は一歩を進めて国土計画の準備とすべき特別
法を立案制定し、更に計画機関として中央地方を通ずる統一的な特別機関設置により東亞
新秩序建設に巨大な前進を約束されてゐる。

国土計画の指導精神が「技術的、経済的、社会的、国防的見地からする国力の総合的発
展」にあることは、国土計画がその基本を人口政策に置くことを意味する。

恰かも星野企画院總裁は八月三日の車中談において「日本は日本の国土計画として国民
の半数を農民として残すことを考へてゐる」と語つてゐる。この言葉の示唆するわが国今
後の国土計画の動向と国土計画がその基調を人口政策にかんとすることは重要である。

第二篇 工業

國土計畫と工業立地 (抄)

—— 第四百二十四回藏前大午餐会席上の講演 ——

東京工業大学
講師特別会員
川 正 鑑

要

最初にソ聯及びドイツの國土計畫を一瞥してそれより國土計畫の基本は人口政策なるを指摘し、更に日本國土計畫は日滿支全線を包含するところの東亞共同体的見地に立ち、産業、經濟、文化、交通等各般に亘る綜合計畫を樹立し、その綜合計畫の一環としての日本國土計畫を實現することを最高の指導原理とし、それが國防國家の建設に到るべきであるとする。此の高には国内に於ける各種要素の調和を圖らねばならないが、特に農村と都市との並行的發展を目標とし、國土防衛的見地より工業の地方分散が、各工業の立地條件との勘察に於て実施されるべきである。之には單なる資本主義的、無政府的な考へによつては決して成立するものではなく、全國民の犧牲的精神を必要とする。

旨

本論文は国土計画の總論と其の各論としての工業立地問題を論じたものであるが、その尙論理的連環は見られぬ。猶国土計画を推進せしめるもの——夫は必然的に国土計画の現段階的意義を意味する——に對する分極がなされてゐないこと、その爲に、論旨が著しく自由主義的であるとの批評は許さるべきであらう。

『自由主義的論理の止場』なる條件を忘れた国土計画論は成立し得ないことを知らねばならない。

一 略

二

前略ナショナルプランニング又はライヒスプランニングが国土計画（英National Plans 独Reichsplanungs）といふ言葉ですが、これは一九二八年にアメリカのアーサー・シコメー（Arthur C. Conley）といふ人が地方計画のレポートの中にナショナル・プランニングといふことを言つたのであります。これが先づ国土計画の術語としての嚆矢ではない

かと思ふのでず。併し下らアメリカに於ける国土計画は左程発達してまりませぬので、謂はゞニューヨークを中心とした地方都市計画に終始してゐるのであります。斯様な訳で国土計画の眞の意味に於ける実践者としての榮譽を擔ふものは何といつてもソ聯邦とナキス・ドイスであります。

三

ソ聯邦の国土計画は所謂ゴス・プラン、國家計画の中に含まれてをりまして、ソ聯邦の委員会に於て今計画が進められ、且つ部分的には既に実行に移してをるのであります。この要點は全国土を工業の沃山ありますところの工業地域とその他の用途の地域とに分けるのであります。而して五ヶ年計画の下に建設せらるべき工業の位置を決定してをるのであります。これによつて新らしく出来ませ工業都市が二百です。それから新らしく農業と工業とを合せた都市であるところの農工都市を二十乃至三十を建設する事になつてをりまして、その費用の總額は百億ルーブルと註せられてをります。その計画の特徴に就きまして簡單に申しますならば、先づ第一に工場と工場との連絡に重點を置いてをります。第二には工場に接続するところの地域に教育機關並に色々の研究所を設置する。第三は農業労働と

工業労働を巧く調整する、この為 郊外に国营の農場を設けてをる様であります、家庭は總て団体的生活をするやうにアパート式にする 第五には文化施設を非常に尊重する。ソヴェト ロシヤは御承知の如く革命と同時に總ての文化施設を破壊致しまして大改革をやつたのでありますが、その悪かつたことを悟りまして文化生活を極度と尊重するといふのであります。第六には工業地域とそれに続く住宅地域との間に幅員最小六十米の緑地帯を造る。かういふ方法であります。その為には之を具体的に申しますと、スターリングラードの西側のヴォル河に沿ひまして人口七萬の五つのトラクター工業都市を造るとか、或はウラク工業地帯に人口二萬五千の鉄工業都市を造るとか、或はニジニ ノコロド附近に人口五萬の自動車工業都市を造るとか、或はドニエアルの水力発電地域に人口五萬の重工業都市並に化学工業都市を建設する、かういふやうなことを科学的にやつてをるのであります。

四

ドイツの都市計画は、御承知の通りドイツは「公益は私益に先んずるし私益といふものは公益の前には全く姿を没して了ふといふ。」「公益は私益と先行するし」といふ建前から固

土計画に関する法律（「国土計画及び地方計画施行に関する法律」Erste Verordnung zur Durchführung des Reichs- und Landesplanung）が出てまいります。之を基本としてドイツの国土計画は進んでをるのであります。国土計画に対する国家の要求はどうか所にあるかと申しますると

第一は人口政策

第二は国家の食料及原料の経済回復

第三は労働の調整

第四は経済の調整

第五は産業の立地並に工業移設

この五つにあるのであります。併し乍ら之等の五つは人口（ポアレーション）の強健化と食料及生産経済の独立に対する国家動員といふことに要約出来るかと思ふのであります。これが具体的方法と致しましては、所謂ジードルング（Siedlung）ジードルングとは産業集塔のことでありませう。そのジードルングの創設を考へてをるのであります。ジードルングは二つありまして、農業ジードルングと工業ジードルングであります。農業ジードルングは一九三五年に出ました「帝国労働義務法」に據りまして満十八歳以上二十五歳ま

での總ての男子に対して恰も徴兵制度のやうに農業労働に従事せしめるのであります。農業ジードルンクをやる爲には土地が必要でありますその土地は一九一九年に出ました法律（「帝国家定柱法」）に據りまして、土地は公用徵收することになつてをります。かういふことは恐らく他の何かの機会に於て既に御承知かと思ひますから極めて簡單に申し上げます。

工業ジードルンクは工場分散、それから大都市を救ふ爲に行ふものであります。工業従業者を対照としてをりますが、工業従業者は田園といふものは如何に有難いものであるかといふこと、それから自分達の鋪土即ちハイマートにはどんなに親しむ必要があるかといふことを工業ジードルンクの方法を通じて理解せしむることが目的であるやうであります。

第二には大都市の緩和計画であります。人口が余り多くなりますといふと色々の弊害が起つて来るです。その爲に大都市がそれ以上に大きくならないうに色々の方法を講ずるのであります。即ち工場の新設禁止であるとか、或は又他からその町に入るには許可を要する。許可制を採用して制限を加へるとかいふやうなことを考へてをるのであります。

それから工場移設、工場を移すといふことに就きましては、第一次歐洲大戦の時に、国

境地方に於ける大工場が非常に空襲其他の被害を蒙つたのです。それから又大都市に於ける工業の集積は国防上又産業能率の上から申しましても非常に不利益であるといふことを眼のあたり知りまして、都市にある工業を出来るだけ小さい規模にしてをその各農村にバラ撒く計画であります。丁度我國でやつてをります、商工省でやつてをる地方工業化計画と大体似たやうな性質のものであります。工業を地方へ移設しますには、只此移設するといふんではないんであります。そこに有り、どういふ地方にはどういふ様な工業を移設した方が最も国家的に経済であるか、そこに「工業立地学」(Industrielle Standortlehre)の必要がある訳であります。こゝに工業立地学の調査研究といふことが學術突撃隊として先づ各地方の研究をするといふことになつてをるのであります。又工場を移設しやうと思ひますと直ちにその地方の土地が高くなつて来る。その為には経営が非常に困難を来たすこととなります。そこで「地域法」といふ法律を決定致しまして大都市から工場の移設を強制的に強制し、更に又その工場移設を非常に容易くする、或は又課税を安くするといふやうな国家としての保護を加へてをるのであります。

斯様な意味に於きましてドイツに於ける国土計画の一つとしての工業の移設といふことは非常な成功裡にあります。最近我國に於きましても滿洲に工場が相当移設される計画が

ありますが、その點恰もよく似てゐるのであります。

五

要するに各国の国土計画の粗ひ所は何処にあるかといふと、勿論各国の經濟産業交通其他國情の異なるにつれまして、各国の国土計画には若干の違ひはありますけれども、基本的には人口政策でありまして、經濟向題としては原料、それから農業生産の自給自足の觀點からすると、ころの經濟政策、それから失業防止といふこと、特にこの空襲の脅威顯著なる關係から国防計画といふことを国土計画の中心に織り込んでゐることは注意すべきことではないかと思ふのであります。

人口政策を特に向題にしてゐる點は、質的に優秀なる人口は農村から生れる、斯様なことから特に農村といふものに重點を置いてゐる。これは注意すべき事柄ではないかと思ひます。以上は大體各国の国土計画の解剖であります。

六

日本の国土計画はどうであるか、勿論我國に於ける国土計画はまだ實現するに至つてを

りませぬ。内務省は速早く此點に就きまして研究を始めまして、所謂「地方計画」の名に於て計画局でやつてをるのであります。それに依りますと五つの目標を有つてをります。第一は国民の体位向上です。これは人口政策に基調を置いてをります。第二は経済上の調整、第三は国土の完全なる利用、第四は防空上の考慮、第五は地方の人口といふことを目標に致してをります。

それから企画院に於きましても此向題に就ては研究してをるやうでありまして、此點は勿論まだ判然現れてをりませぬが、大体四つ位の立場から研究してをるやうに観はれるのであります。それは第一に人口政策的な立場から都市の抑制、大都市をこれ以上大きくしない、都市の抑制といふこと、それから農村の人口です。第二には産業立地的立場から農業、其から軽工業、重工業等の産業の分野の不均衡を是正する。自然的、経済的に最適なる所に産業を興しまして産業地域を設定しやうといふこと、第三は産業と交通との連絡を巧くやる、現在は資材その他の配給機構に於て非常なる向題を宿してをりますが、要は此産業と交通との調整がとれてゐないといふ所に結論し得るかと思ふのであります。第四は防空上の見地から重要な文化施設或は其他の工場施設に致しましても一點に集中せしめないでそれを分散せしめる、尙ち防空上の見地から重要な施設の分散を図る。この

四つの點を中心としてより一研究してをるといふやうに何は其るのであります。

次は商工省の案でありまして、商工省の案は地方工業化委員会といふのがございまして其処でやつてをるのですが、同案は既に昨年秋（九月）に發表されましたのであります。それがそれによりますと、第一に工業の集中、着しき地域又は工業の無計画的膨脹を未だす傾れある地域に対し工場の新増設を統制する。他方、積極的に工業を設置すべき適地を研究して重要産業の全国的配置を指定し種々の施策を講ずる。

詳言すれば工業の集中の新しい地域又は無計画的とどんく大きくなる地域に対して工場の新増設に或程度の統制を加へ、更に一面に於ては非常に有望な地域がありとするならばそこに積極的に工場の新増設を助成する、かういふのがその第一の點です。第二には工場の新増設を統制する必要がある地域を指定し、その地域内に於ける一定の業種、それから一定の規模の工場の新増設を統制すること、つまり第一の點を詳しく述べたやうものであります。第三は積極的に工業を建設すべき地域を指定し種々の施策を講ず。即ち第一と第二に述べた點を一掃にして第三で之を解説してをるのであります。

素よりこれは新聞に發表されました文句でありましてこの發表とれましたもの左見た方方の由には、商工省の案は非常にほんやりしてをり何んだか解らないといふやうな非難を

した方もあつたやうであります。確かにかう見ますと、なんだか非常に漠然として在るのであります。私もその委員の一人としてかういふ文句で表現することはどうかとも実は思ひましてお話ししたのであります。何分にも工業の新增設を禁止したり、或は許可したり、或は斯成したりするやうなことは民間への影響が甚大でございまして、色々の運動其他の弊害が伴ふのであります。さういふやうな關係を考慮致しまして商工省案なるものは非常に漠然となつてゐるのであります。その點は充分皆様には御諒解になることが出来るかと存じます。

七

然らば国土計画はどうすることが一番宜しいかといふことを少し考へて見たいと思ふのであります。

で、私も国土計画の目標はかういふ所に置かなくちやあならぬと思ひます。日滿支全体を包含するところの東亜協同体の見地に立ちまして産業、経済、文化、交通各般に亘る総合計画を樹て、その総合計画の一環としての日本の国土計画を考へ即ち日本は所謂單なる日本ではないのであります。東亜の盟主として、新大陸と支那を両翼に配して其先

頭に立つて東亜の覇業を完成しなければならぬ、そこに日本の使命があるかと思ふのであります。従つて日本の国土計画は只日本国民全体の爲に都合さへよければ、滿洲も支那もどうでもいゝ、どいふのであつては東亜の盟主たるの資格はないのであります。従つて日滿支全般を包含するところの東亜共同体的見地に立つて産業、經濟、文化、交通、各般に亘る綜合計画を樹立し、その綜合計画の一環としての日本国土計画を実現する、先づこれが最高の指導原理でなければならぬと思ふのであります。

ところで今日、我が日本の国内に於て最も主要なことは生産力の拡充といふことであります。同時に又国土の保護防衛といふことも、日本の国家としては是非必要なことであります。即ち生産力の拡充と国土の保護防衛といふこの二つの目標であります。が、その期する所は国防国家の建設にあるのではないかと思ふ。国防国家の建設を分けると、生産力の拡充と国土の保護防衛と、かう二つになるかはなにか、即ち国防国家の建設といふことを目標にして日本の国土計画を考へ、更に日滿支全般を包含するところの東亜共同体的国土計画を考へる。そこに現下日本の国土計画の目標はなければならぬと考へる。

この目的實現の爲には然らばどういふことが必要であるかといふこと 私は世界人類の丁史を考へて見ますと 戰爭してゐる時期が長いか、平和の時期が長いかといふことを考へさせられる時がよくあります。それ程に人類は何回も何回も戰爭をやつて來ました。ローマの丁史は正に戰爭の丁史であります。ローマが斯の如くヨーロッパを平定し 或は進んでアラビヤ、アフリカの北岸までも平定した所以のものは擧するに戰爭の結果であります。人類はどうしても戰爭といふものは避け難いものであり、日本が今後亜細亞の覇主となり、世界の指導權を把握する爲にもどうしても戰爭といふものは否定することの出来ない現實の向題ではないかと思ふのであります。其して然らば國土防衛、これは現下の日本でなくして永遠の日本を考へる時に絶対的に必要である訳であります。それかあらぬか、既に百七、八十年前に一代の自由主義者でありましたところのアダムスミス、経済學を依りましたアダムスミスでも、丁国防は富裕よりも尊ししと看破して国防の重要性を確認してをるのであります。況んや現下日本は国防國家の建設を目指して突進してをるので、その非常時に国防といふことを無視して他に何んの經濟があるか

今や世界を挙げて第二次大戰の火中にありますし、我國は鯉臣の聖域途上にあるのであります。このために列強の産業の地理的配備は戰爭乃至國土防衛を目的として根本的に

諸戎更へされてをります。イギリスの産業分布は従来は南部にあつたですが、それが緩々
 に北部に移動してをる。アメリカの産業分布はテニシー河を中心とする発源地帯からずう
 つと奥地に、東の方の工業地帯、西の方の工業地帯からだんぐさういふ奥地に工業が移
 動してをるのです。支那に於きましても上海は常に革命や暴動や戦争の頻発致します關係
 上皆奥地に入つて、重慶或は漢口近辺に行つてをるのであります。世界に於て恐らく空襲
 の危険のない国家はロシアの産業地帯であらうと思ふ。所謂ウラル地方はヨーロッパから
 見ましても、東洋から見ましても絶対に空襲することが出来ない。さういふ僻遠なる地域
 に總ての産業を隠してしまつてをる。隠すことが出来るやうな状態にあるのです。

斯様な国土防衛の立場から致しまして公益は嘗て私益に先行しなければならぬわけであ
 ります。ドイツのフオン・ウエルネル・クライツ(Von Werner Kreitz)といふ著者は一九
 三七年の六月四日及十二日のドイツチエ・ホルクスヴァイト(Der Deutsche Volkswirt)
 誌に国防経済樹立地計画の戰略(Zur Strategie der weh-wirtschaftlichen Standort-planung
 といふ一論文を掲げてをります。それによりますと、戦時に敵の戰略から生産地帯を保護
 することが最も重要である。この場合に於ける危険はどうか程度にあるかといふこと、そ
 れは国境からの距離の如何に在る。概りに前戦と同時だ国境から五十料までの地域が完全

なる戰場になる。国境から百五十料までの地帯は砲火、戦車、航空機及び海軍の襲撃を受ける地域である。国境から五百料までの地域は爆撃及び巨砲艦隊の襲撃の危険に曝される地域である。従つて国境から五百料以内に至つて漸く安全地帯になるのである。總ての産業は国境から五百料以内の所に立地せしめるのが戦略上産業を保護し、国土防衛の立場から最も必要であるといふ研究を発表してをるのであります。

然るに今や世界の戦術は折衝のこのクライツの提言にも拘らず、だん／＼と地上戦の形態から空中戦へと進んで来てをります。其ために空襲の範圍は非常に拡大されてをります。現在は国境から五百料のところではないうであります、千五百料、更に最近は二千料まで空襲が可能であるといふことになつてをります。

皆様の中には五百料はなんだ、千五百料はなんだといふやうにお考へになるかも知れませぬが、我が東洋に於ける实例から申しますと、浦塩から千五百料の範圍を取りますと、どういふ具合になるかといふと、北樺太、それから西の方に廻りますと満洲里、それからズーツと末まして琉球を通りまして、かういふやうな地域が浦塩を中心として半径千五百料の地域であります。それから満洲里を起點として重爆撃機の半径をとりますと、東はハゴロフスク、浦塩、西の方はイルクーツク、かういふやうな地域が千五百料の地域になる

のであります。それからマニラを中心にして考へますと琉球、この辺までがずうつと入ります。佛領印度支那のハノイを中心にして千五百料を取つて見ましても依然として台湾の一部が千五百料に入るのであります。これは千五百料を中心にしたので、若し最近の二千料を考へますならば日本ほどの地獄から考へても空襲の出来ない地域はないことになるのであります。

これをヨーロッパにとって考へますならば、ロンドンを中心にして千五百料をとりますと、ワルソー、ローマ、かういふ地域が全部千五百料の範囲に入ります。それからマダノ線ジューグフリード線を中心として考へて見ますとイギリスは全部入つてをります。そしてかういふ様な地域が皆その圏内に入つてをります。ローマを中心にして考へますならばこれ又ロンドン、それから此辺までずうつと入つてをります。ワルソーを中心にしてやりますと、やはりロンドンが入ります。

かういふ様な次第でありますから、現在世界に於て空襲の被害から免れる危険のない所はないとかういふことになつて来ると思ふのであります。斯の如くにして日本の国土は同じ程度に空襲の危険性を持つてをるといふことが事實の問題であるのであります。斯様な情勢の下に於きましては、空襲を受けました時に被害を少からしめるにはどうするかとい

かことがこの場合国土計画に於きまして先づ中心的な課題になるのではないかと思ふ。勿論これには消極的な方法と積極的な方法とがあるかと思ふのです。消極的な方法ばもう既に各工業専門の学校や各工場に於てやつてをられるが如く、所謂各種のカムフラージュをする。国防色に塗換へるとか、草を植えるとか、木を植えるとかいかことです。併し乍らこれは館く迄消極的な方法に過ぎない。積極的はこの空襲の被害を少くする爲にはどうするかといふと、これは工業を小さくして地方に分散せしめることであらうと思ふ。即ち集つてをるものは爆撃のい、目的物を提供することになります。散つてをる時には空襲しましても其効果が少くもありますし、又爆撃することも非常に広範面に亘りますから難しいからして其被害も少いといふことになる譯であります。

九

そこで現在の我國に於ける工業の地理的配備を研究して見る必要があるかと思ふのであります。我國の工業の地理的分布の特徴は太平洋岸にひどく傾いてをるといふことであらうと思ふのであります。昭和十二年の工場統計に依りますと、全国十萬六千五工場の中で東京に集つてをる工場数は一萬五千百八十二、神奈川が千八百五合計して一萬六千九百八

十七です。静岡が三千七百九十六、愛知縣が一萬一千二百五、合計一萬五千一、京都在四百三十、大阪が一萬六千八百九十一、兵庫が五千六百三十八、合計二萬六千八百六十九、福岡が一縣で千七百二十一で、これ等八縣に集つてをる工場数は六萬五千七百七十八に達しをります。全国工場の六割がこれ等の太平洋岸の八縣に集つてをるのであります。若しこれ北が空襲されたとするならば其被害は非常と顯著なるものがあるだらうと想像されます。特に二百台位の編成で空襲を受ければ必ずや数時間を出でずして東京までやつて来る譯でありますから、その被害は全く想像するだに凜然たるものがあるのです。勤ち太平洋岸への斯の如く傾いてをる、而も全く一線上に、北九州から一線上に上つて来ればい、のですから、一番簡單な事です。富士山があるのですから、富士山から何れ何方へ向へば東京があるとか、横浜があるとかいふことは直に想像がつくところであり、です。ですから夜間に於ける東京の空襲は極めて容易に出来ることでもあります。

一〇

然らば之をどうして救ふかといふ問題が起るのですか、時間がございませぬので、多少飛躍しますが、斯様な譯で工業の集中集積したところには必ず大都市が形成されてをるので

あります。そこで東京の人口は約七百萬、非常に大きな都市です。大阪が三百萬人、名古屋が百二十萬人、神戸が九十萬人、京都が百十萬人、横浜が七十一萬人であります。それから八幡が二十一萬人、戸畑が十七萬人、若松が七萬三千、小倉が十一萬人、門司が十二萬人で合せてこの五市の所謂北九州都市群が六十萬の人口を擁してをります。人口が多くなつて都市が大きくなると色々な弊害が起つて来る、先づ人口百萬以上を大都市といふのです、三十萬から五、六十萬までは中都市といひ、十萬内外を小都市といひます。

大都市になるとどういふ弊害があるかといふと、これは色々あるのですが、本年の一月一日号の「藏前新聞」に書いて置いたのですが、大都市になりますと、第一に防空關係で一番問題になります。かういふやうな大きな都市になりますと、もう防空といふことそれ自体が出来ないので。空を防ぐといふことは不可能であります。第二には防空に対する施設が出来ないといふこと、第三には入口が一つ所に集つてをります、次第々々に入商が弱くなる、国民の健康が保てなくなるです。第四には国民の体位がだん／＼低下しまして子供が非常に弱くなり、早く死ぬ。東京に三代住むと一家は減びるといふのは昔からいはずをることですが、当にその感を深くするのであります。悪い病気が流行つた時には非常に弊害が多い、それから交通關係であります。ラッシュアワーに於ける電車を御覧なりま

すと、あの鋼鉄製の電車がひどく曲つて来る、眞に恐しい姿であります。それから水道施設です。水がない、水は人間にとつて必要なものです。その水餓饉が常に襲つて来る、それから防火施設が出来ない。震災の時に甚多の救助が困難である。それから工場能率がだんぐり下つて来る。地価が暴騰し、工場災害がある、労働争議が頻発するといふやうなことが都市の弊害であります。そこでかういふ状態は当に文明国の病態でありまして、これはどうしても早く直さなくちやあならぬ。これは国家の健全なる発達を考へる上に於きましての重大なる問題であらうと思ふのであります。

然るに他面、農材はどうかと申しますと、極度に疲弊してをりまして甚多の問題を宿してをるのです。農村へ行つて見ますと、殆ど青年男女をりませぬ。田舎にをるのは老人と子供だけですか。炭も焼けない。従つて炭が不足するといふやうなことになるのではないかと思ふのです。

特に注意すべきことは都市と農村との経済的不均衡でありまして、戦争のある度に利益を得る者は常に都市であつて、田舎は都市と同じやうに戦争による利益が得られない。これは色々の點に於て、既に皆様も御想像下さることゝ思ひます。戦争の時には農村も都市も拳国一致しなければならぬ。さういふ拳国一致をしなければならぬ時には、戦争しても都市人は利益が多いけれども、農村は戦争の結果利益が少いんだ、馬鹿々々しいから都市とは協調しないんだといふやうな分子が將來は出ないとも限らない、即ち拳国一致をする

場合に非常に困難である。その他経済政策上に於ける喰違ひでありまして、所謂農林省と商工省の対立も当然に都市と農村の対立の姿と考へて宜しいと思ふのであります。即ち米価政策にしましては、都市の人達に安い米を食せやうと思ふと農村が困る。農村人に米価を上げてい、生活をさせてやらうとすれば都市が困るといふやうな誤です。凡そ経済政策といかものは国民全体に均等に透はなくては理想ではないのであります。ここに都市と農村の非常な違ひがあるのであります。これを是正することが必要であらうと思ふのであります。凡べて隆々たる発展を示してをる国家といかものは我國の如く農村と国家が対立してをるものはありません。都市と農村とを出求得るだけ調整する、都市の利益の時には農村にもやはり相当の利益を與へられるんだといふことにならなければ一等国にはなれないと思ふのです。

— 1 —

然らば農村を富ませるにはどうしたらいいか、又都市に於てこれ以上大都市としての弊害をなからしめる為にはどうしたらいいか。これが現下の国土計画に於て非常に重要な問題となつて来ます。これ過大都市の抑制といふこと、地方農村に於ける中小都市の育成といふことが国土計画の目標になつてをる所以です。

一体、その都市をして過大ならしめる原因は何であるか地方をして地方にその都市を依

らせるにはどういふ原因を考へた方がいゝか、これには都市をして過大ならしめる原因は何であるか、都市が出来るのは一体どういふわけかといふことを研究すればいゝと思ふのです。私は人口の集中に最も強い牽引力を振つてゐるのは工場だらうと思ふ。一つの工場が出来れば、凡そ従業員一人に就て我國の人口統計とよりますと、五人が一世帯を構成してゐる。従つて主人一人は四人の家族を養ふことになる譯です。假令千人の従業員を使ふ工場が造られるならば五十人の人口が集中するわけですから、一萬人の従業員を使ふ工場が出来たとしたら五萬人の人口がそこに定着する。北九州に於て八幡製鉄所が出来たといふことが北九州六十萬人の人口を定着せしめた所以であります。従つて人口集中點即ち都市の形成は結局工業を置くことです。都市をこれ以上大きくしないでやうと思ふならば大都市に工業の新増設を抑制することでありませう。地方に工業を繁栄せしめるならば地方に人口が移りまして地方に都市が出来るとして、要するに都市をこれ以上に大きくしないやうにするにも、やはり工場の問題であり、地方を繁栄せしめるにもやはり工場の向題である、斯様に私は考へるのであります。

然らば工業は如何なる理由の下にそこに集るか、工業はどういふやうな理由でそこに立
起するか、こゝに工業立地学の向題が提起される訳です、私は工場が出来るには工場が出
来るやうな立地学的な必然性があると考へる。その必然性を工業立地因子と云ふのであり
ます。工業を引き附ける因子があるのですからして、ぞれで工場がどこに来ると考へる
のであります。工業の立地といふことに就きまして、工業リツクと説を説方があります。
このリツクをリュウクと讀んでゐる人がある。昨年九州帝大に講義に行きましたところ
が工業リュウクの權威者だといつて私を紹介されたので一寸西まつたのですが、兎に角工業
リュウクと讀んでゐる所がある。京都帝大では工業リュウクと讀んでゐる學者があります
が、関西ではお寺が多いので寺を建ててゐることをコンリュウクといひます。だから皆リュウ
クとついで讀んでゐるのではないかと思ひます。まあ坊主讀みにリュウクと讀んでも決し
て間違ひではないのですから、その辺は誤解のないやうにお強ひ致しだいと思ひます。私
はリツクと讀んでゐるのであります。一般も亦リツクと讀んでゐるかと思ひます。

工業がどこに出来ます否には引き附ける因子がある。その因子が私は二十五あると思ふ
のです。節ち氣候、地勢、地質、河川、湖沼、海洋、水、自然的素材（資源）原料、補助
材料、動力、労働力、製産關係、交通關係、消費市場、資本關係、利子、地域關係、地代

租税、保険料、水道料、社会的負擔、経営手続、社会秩序、経済政策、国家政策、であります。この立地因子に就きまして従来は二十五考へてゐない。ど北位考へてゐるかといふと、原料は考へてゐる、補助材料も考へてゐる。動力、労働力、交通、消費市場、こ北位までは考へてますが、二十五は考へない各種工業の立地現象の研究の結果私は二十五あるだらうと思ふ。

一三三

總て、工業の経営といふものは理想があるのです。資本主義の下に於ける工場の経営は營利主義の達成、金儲けの爲に工場の経営はやるのです。次の統制経済計画経済の時代になりますと營利といふことが非常に少なくなりまして、社会の繁榮、国家の發展、国家の利益といふやうな意味に於て工業経営が行はれるかと思ふのであります。併し乍ら、如何に資本主義の時代が變つて経済統制、或は計画経済の時代になりましたも経済性といふことは變らぬと思ふ。経済性といふのは收支相償ふといふことだと思ふのです。如何にロシアのやうな共產主義の国家でありましても收支相償はないやうなものは経営として成立しない、私が経済性といふのは資本主義時代には營利といふ形に現れ、計画経済或は統制経済の時

代に過ぎましては社会、国家の利益といふ意味に理解してをるのです。

さう致しますと、工場がそこに引き附けられる為には資本主義的な営利の本則に叶はなければならぬ。金儲の本則にかなはなければならぬ訳です。従つてそれは当然に経営計算の分子に之等の因子が現れて来なければならぬ。それで費用の比較へ諸達費用、生産費用、販賣費用、財務費用、それから取引高、結局収益の問題にこれの立地因子が總て入つて来る、之等の點を詳しく御説明申すべきであります。が時向がありますので割愛致します。

で、二十五の立地因子がある。而も二十五の立地因子は工業の立地が決定される場合に對等の力を以て作用する筈はございませぬ。そこに工業の立地因子が或る場合には非常に有力に働き、或る場合には殆ど働かないといふことがあります。

又或る種の工業には有力であるけれども、或る種の工業には有力でない、例へば入絹工業の時には水といふものが非常に有力な因子であります。併し乍ら製鉄業にとつては水はそれ程有力でない。製鉄業にとつて最も有力に働く因子は石炭である。斯様に工業の種類が異なるに従ひまして二十五の立地因子の働く力は優劣があるわけです。こゝに支配的立地因子を基礎として工業立地の型が設定される訳であります。

自 然 的				立地 地理的 因子 單元
河川 海洋	地質	地勢	氣候	
C	C	C	A	国際的單元に於ける立地因子の作用
B	C	C	A	経済プロック單元に於ける立地因子の作用
B	C	B	A	国民的單元に於ける立地因子の作用
A	A	A	C	地区的單元に於ける立地因子の作用

次に工業立地は一定の地理的範圍の下に展開されるものです。即ち国際的單元、世界を目標にした時に工業立地の決定に當り二十五の立地因子はどうか風に働くか、その次は経済プロックの単位です。日清支経済プロックの下に於いては二十五の因子はどうか風に働くか、その次は国家的單元、日本なら日本といかもの差考へた時に二十五の因子はどうか風に働くか、その次は地区的單元の下で、何処に工場を造るかといか場合に、これ等の二十五の因子はどうか風に働くか、左表中このAといかのは其最も強く働く因子であり、Bはさういの場合にさういか因子も考慮する必要がありといか程度、Cはさういか因子は考へる必要がないといか場合であります。

的 会 社													子 因	
保 險 料	租 稅	地 代	土 地 關 係	利 子	資 本 關 係	消 費 市 場	交 通 關 係	製 品 關 係	勞 働 力	動 力	補 助 材 料	原 料	材 質 的 素 質 (資 源)	水
C	B	C	C	A	A	A	A	C	A	A	A	A	A	C
C	B	B	B	B	B	A	A	B	A	A	A	A	A	B
C	B	B	A	C	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A (B)	A	A	C	C	C	A	B	C	C	C	C	C	C

因					
水道料	社会的負擔	經營手腕	社会秩序	經濟政策	国家政策
C	C	B	A	A	A
C	C	B	B	B	A
C	C	B	B	C	A
A	A	C	C	C	C

それで吾々は今国土計画を考へたいのですから経済的ブロック的單元と国民的單元とを考慮すればよい訳です。この場合に於て氣候的因子はAであります。工業の立地を考へる時に氣候は一番強い働きをしますので。その次に資源、原料、補助材料、動力、労働力、これ等は非常に強い影響を與へる。それで地勢の關係、土地が高いか、安いか、これも非常に強い働きを與へる、それから地質即ち地盤が硬いか軟いか、これは地区的單元、例へば京汝地帯の何処に造るかといふ時には問題になるが国土計画で国土全体を目標とする時はそれ程問題ではありません。交通關係、土地の問題、それから地租とか、租税とか、保

除料とか、水道料とかいふことが非常に尙題になる。六郷川に立ちまして川崎寄の方を見
た時に工場が非常に澤山ある然るに六郷川から手前の方を見ますと工場は非常にまばらで
ある。この原因はなんであるか、何が立地因子になつてをるかといふと、これは水道料の
尙係です。水道料は神奈川縣では工場の爲に特に安い料金を課してをります。かういふ尙
係であります。立地因子と地理的單元との尙係は甚だ其説明は簡單であります。この表
によつて御想像願ひたいと思ひます。要するに支配的立地因子の作用に因つて總ての工業
立地は決定されるのであります。

一五

どうも甚だ長くなりましたが、要するに最適なる工業立地を決定するといふことが一
番必要になつて来るのであります。そこで私は国土計画の立場から、結局工業立地・工業
の立てられる場所、即ち工業立地に対し、國家としての一定の方針を決めて之に統制を加
へる。これが我國に於ける過大都市を抑制し、地方に中小工業を造つて、都市と農村との
対立をなくし、又都市は都市として、農村は農村としての発展をなさしめ、以て日本の全
地域を完全に國家の用に供するといふ、国土計画が実現するのではないかと思ふのであり

ます

こゝに於て、私は工業の立地に対する統制を加へるのに五つの段階を考へたい。それは第一は禁止地域、工場の新増設を禁止する、第二には禁止はしないけれども許可制として、国家として必要な場合には許可をする、必要でない場合には不許可とする。許可地域、第三には積極的に工業の新増設を助成して、將來は一大工業地域にまで発展せしめるといふ地域であります。第四は纏まつた工業地域とまでは行かないでも、或程度まで工場の新増設を助成する地域、第五には自由に放任して置く地域です。即ち五種の工業立地の地理的統制段階を考へる。

さうするとどうなるかといふと、この赤の所（地図略）は工場の禁止地域であります。これは此処だけでいめて置きたいですけれども、今は五大都市として一番弊害が顕著に現れてをりますのは京浜工業地帯、それから京阪神の工業地域、これは先程申したやうに京浜工業地域に定着してをる人口は一千萬近くに達するです最も弊害の顕著なるところであります、この地域に工業を新増設するといふことは空襲其他の意味に於きまして非常に危険なんです。そこでこの地域はどうしても工場の新設を禁止しなければならぬ。或る省でもセンターからの距離でこの地域を区切る。例へば京浜工業地域は東京駅を中心にし

まして三十料乃至四十料の半径を描いた地域、さうしますと大体東京が中心になりました、横浜、かういふ地域が三十料乃至四十料即ち東京のセンターから大体電車で四十分から一時間位で行き得る範圍です、それから阪神工業地域は大阪の中心から大体二十料の周辺です。名古屋は十五料、北九州は大体十料といふのです。さういふ甚だ漠然とした考へ方ではありませんが、さういふ村子定規を中心からの距離によつて禁止区域を決めたらどうかといふ案なのであります。併し乍ら假に東京駅から三十料乃至四十料で半圓を描きますと其中に入つて来るもの、中には農村があり、漁村があり、或は山岳地帯があるかも知れませぬ。さういふ所を禁止するといふのは甚だ滑稽の至であります。私は若し此の地域に於て工業の新増設を禁止するの必要がありとするならば、今のところ行政区劃を以て決めるのが一番無難ではないかと思ふ。現在の状態から申しますと大体東京市、川崎市、横浜市、船橋市、川口市といふやうな範圍は先づ工業の禁止地域にする。

この禁止地域が終りましたして其処から出た所は、平塚とか、町田とか、八王子とか、熊ヶ谷とか、さういふ所になります。これ(地図略)が許可地域、名古屋も大阪も北九州も大体、かういふやうな範圍です。

それから真中が赤の三角で其周圍に青の三角が描いてあります。(地図略)さういふ所

は將來工業の大きな工業地域にまで發展せしめやうといふ地域であつて、北海道では石狩川の河口です。それから苫小牧、東庄では八戸附近、今行つて御覽なされば鹽分澤山の工場が出来てをります。それから秋田市、酒田市、南東では大体足利、鎗林を中心とする地域、北陸方面では新潟と東岩瀬港を中心とする地域、南西では山陰の松江市、山陽では広島や宇部を中心とする地域、九州では刈田海岸、延岡を中心とする地帯これ等は將來は工業の適地といふ見地から考へて必要であるだらうし、又例へば東京のやうなかういふ所に回つたやつをかういふ所にバラ撒くといふことが寧ろ空襲の危険から免れる所以であります。これが工場の新増設を積極的に助成する地域でありまして、新工業地域の積極的予定地になるのです。

その次は消極的に工業の助成だけをやる所でありまして、かういふ所は工業に適當してをるのであります。それはどういふ所かといふと三角の印のある所へ(地圖略)であります。留萌、札幌、釧路、青森、弘前、能代港、山形、宮古町、銚子、茂原、石河、大聖寺、津市、笠岡、三原市、萩市、今治、八代等。かういふ所が工業の適地としてはい、ぢやないかと思ふのです。

眞白な所は自由地域であつて、工業立地としては未だ海のものとも山のものとも分らぬ

けれども、当分放つて置く。

以上は極く一般的に述べたのでありまして、勿論各統制地域の広さといふことが問題となつて来ます。

一六

その次には各部門別の工業的配備、即ちどういふ種類の工業はどういふ地方に分布せしめ、どういふ地方に於ては新增設を禁止し或は許可するといふやうな個別的問題がある訳であります。それは割愛致します。

一七

それから工業の規模です、即ち労働者従業員何人位の工場は禁止するけれども、何人以上のものはよろしいといふやうな工業規模の大小によりまして非常に問題があります。特に工業規模のシムによつて考へなくてはならぬ點は將來人口の配置であります。この事は都市を抑制し、地方に中小の工場を育て上げることに取つて非常に問題となつて来ます。

以上の如き事柄を詳細に考慮することによつて 始めて我國に於ける工業の繁栄が可能
なんであり、又その工業立地の立場からする国土計画が始めて具體的な姿を取つて現れて
来るではないか。以上のやうな方法を採用することになれば、恐らく国土防衛といふ目的
にも合致するであらうし 又地方の人口、生産力の拡充といふ問題も考へられる。

現下の国土計画の設定に取つて国防國家の建設を目指するところの生産力の拡充といふ
こと、それから国土防衛といふこの二つは絶対に必要なことでありまして、此考へを根
きとしたところの国土計画は當に魂のないところの死骸であると私は考へるのであります。
勿論これ等のことを実施しますに就きましては官民の非常なる犠牲的な協力を必要とす
るのではないかと思ふのです。又かういふ様な大都市に工業の新增設を禁止するとか或は
許可するとかいふやうなことは非常に困難でありまして、そこに既に立地してをるところ
の工業はそれが為に幾多の損害を蒙る訳であります。これに就ては國家は如何なる保障を

これにするか、他面地方に工業を育成するには各地方には土地を無償で提供するとか、或は水道料を十ヶ年とか二十ヶ年は全然取らないとかその他の人道的な政策を施さなければなりません。かくて人口の調整、總ては又、中小都市の育成といふ目的も達成されるだらうと思ふのです。

要するに、国防国家の建設といふことは従来の單なる資本主義的な、無政府的な考へによつては決して成立するものではないのであります。こゝに国民としての非常なる犠牲的精神を必要とします。完全なる国土計画の運営こそ興亜霸業を完成する所以ではないかと思ふのです。

第三篇 農業

日本農村と國土計畫

農學博士 小野武夫

要

一定計畫下に日本帝國全体のありゆる体制と組織とが 地域的に、階層的に、合理化された暁には 政治に硬弱なく、法律に無理がなく 經濟に冗費がなく、官衙に老朽若朽がなく、野に遺賢がなく、又人口の疎密にも完全合理性が與へられて、日本全土に生を樂む一億同胞が内にはその稼業を樂みつゝ、外では後進滿洲國を愛弟とし、支那四億人民を西隣の友人として相提携し、此の西隣二國の經濟と其の文化が日本内地の經濟と文化に密接し、交流し果つて、次代日本が建設されねばならぬと云ふ大前提の下に考案せらるゝ其事が爾小所の國土計畫であつて幕末の先驅者たる佐藤信淵の「國土經濟論」と、百年の歲月を隔てたる今日に於て、声息相通するものがあるとの觀点より、東亞の新秩序は高度封建制度の精神を再現せしむるにあり、その具體的支柱として、農村を

旨

核心とする国土計画の構想を論じ、更にそれは自由主義的世界觀並に因家觀の
 止場且新國家觀の法制化によりの又可能なる旨を説き、その一般宏略に觸れ
 最後に、それは東洋人の東洋的風格に於て具現せらるべきを強調して居る。
 敘上の美より想像し得らる、如く 本論文は 農業国土計画の具体的手法を
 説いたものではなく、基底を農村に置いた日本国土計画の性格を、佐藤信淵を
 意識しつゝ、論じたものであつて、一つの先駆的総論であるとも云へよう、之を
 朝鮮の立場より見るとき、その構想に於て大きな妥当性を感ずるものがある。

日本農村と国土計画

小野武夫

小引

近時官界並に学界の一隅に於て国土計画の声を聞く。謂ふ所の声は独逸思想の影響であ

るりしく思はれるが、併し斯る思想は固有日本の思想中に蔵存する。佐藤信淵の『國土経緯』の如きは全く其の符節を合するものである。殊に信淵存世當時に於ける東洋の状勢と今日の其れとが酷似してゐる點が特に吾々の注意を呼ぶのである。即ち幕末に近き天保年度に、其の權益を極東に扶植せんとして虎視眈々たりし英國が、自領印度産の阿片莫大量を清國に輸入しゐたるを、清國政府が人道に許し難しとして、之を禁止したるを英國は不可解とし、忽ち大艦隊を編成し来つて、時の間に中南支を攻略し、遂に償金二千万兩、重要阜港五箇所開放、香港割讓等を強行して、無残にも清國の劣弱性をば世界に曝露せしめたる事變を迥かに傳へ聞きて快氣満身、皇國日本は宜しく大軍備を整へて此の可憐なる清國を救はねばならぬと呼号したる一大言論家は、我が佐藤信淵であつたのである。

之より先、商都大阪には一代の革命児大益平八郎が、幕府官僚の汚行と、御用商人の醜劣を悉く異動を決定したる前代未聞の異変を目の当りに見て、このやうな早期資本主義制度の弊害を芟除するには先づ日本全土の商業を国营に移し、同時に農工生産品の買上専売を実施するに如くはなしとの説を立てたる一大農政学者があつた。其れも佐藤信淵であつたのである。

かうして、東洋の大広場に英國がのさばり出で、内は將に崩壊に到らんとする断木魔の

封建制度を尻目に見つ、雄大無比なる國土計畫案を立てた一大憂國の士も亦佐藤信淵であつたのである”。

爾來時の流る、当に一百年にして、日本は今や東亞新秩序建設の爲の聖戦を戦ひつゝあるが、彼が曾て絶叫したる各種の思想対策、殊に彼が高唱したる神道主義と、其れより演繹したる經濟政策一は、宛かも百年後に今日のあるべかりしことを予感してゐたもの、如く、其れ程にも彼が健筆に成りたる哲學と經論とは昭和現代に直通して居るのである。だが私か茲に思辨しようとするのは、信淵の思想の祖述でもなければ、復現でもない、其れは一に信淵の國土經緯論に寓意しながら、現代日本の重要地域たる農村を凝視しつゝ、横には地域的の縦には階層的の、大々的組又変へと、建て直しと、其れ等の練り上げとを企図する設計書の図案であり、草案である”。

序 言

敢て統計の数字を藉るまでもなく、翼風一搏、日本國土の空を飛行機で飛んで見よ、又地上ならば一平野、一盆地を、一眸の下に收め得る丘角や山頂から俯瞰して見よ、其処には春季ならば麥圃百里、夏季ならば綠野地に布く一千里が視野に入つて、如何にも日本全

土が農村を以て蔽はれ、其間 僅か點々として若干の都市又は聚落の散在することに気付くであらう程に、農村は日本国土の上に広大なる地域を占有して居るのである。併し、斯うした広大面積を占める農村地域を廣的に組織し、且つ制限づけるものは、僅かに點か線かに過ぎざる都市であり、其の郊村である。そしてこのやうな都会地域と農村との諸關係を如何に調整すべきかに就ては、既に遠き以前から多くの學者や、政治家によつて思索せられ、論辯せられ來つてゐるけれども、其れは日本國家が平常狀態の下に置かれてあることを前提としてなされたものであるが故に、多くは議論點となるが、又は暗々裡の黙殺となり、何等目星しき進展を表はさないで今日に及んで居る。然るに、一朝滿洲事変起り、続いて日支事變の生起するに逢ふや、今度こそは我國力の満幅高揚が要求されるであらうと思つたのも束の間、愈々向ふ五年や十年は愚かなこと、百年の永きに亘りて一國の總力を發揚するには日本国土の經營上に即ち百般の産業施設上に、無駄があつてはならぬ。ソツが残つてはならぬのである。かやうにして合理經營に移された国土に於ては、社会のあらゆる階級者が其の処を與へられ、欣欣として困難下に營業する気持になると共に、生なき物でも、大は山岳河川より、小は木石土壤の末に至るまで、悉く善用利驅せられて、眼前に積はる非常時苟克復の用を勤めしむることになるのである。

国土計画と云ふ字音に「土」の字が入つてゐるから、必定其れは日本全土の耕地整理を
 することだらうと云ふ早合點屋の語を、竟先達て電車の中で取継いだ所、居並ぶ連中が思
 はすどつと一時に吹き出したのであつたが、国土計画と云ふのは、農政学者信淵の所謂「
 国土経緯」のことであつて、内務省都市計画課の拡充でもなければ農林省の経済更生部の
 焼直しでもない。一定計画下に日本帝国全体のあらゆる体制と組織とか地域的に、階層的
 に、合理化されを境には、政治に淀みなく、法律に無理がなく、経済に冗費がなく、官衙
 に老朽若朽がなく、野に遺賢がなく、又人口の疎密にも完全合理性が與へられて、日本全
 土に生を衆む一億同胞か内には其の稼業を衆又つ、外では後進国滿洲を愛弟とし、支那
 四億人民を西隣の友人として相提携し、此の西隣二國の経済と其の文化が日本内地の経済
 と文化に密接し、交流し來つて、次代日本が建設されねばならぬと云ふ大前提の下に考案
 せらるゝ、其事が謂ふ所の国土計画であつて、佐藤信淵の「国土経緯論」と、百年の歳月を
 隔てたる今日に於て、声息相通するものがあるのである。

謂ふ所の国土計画は其の地域性に重點を置かねばならぬ關係上、自ら農村が計画の主体
 とならねばならぬし、又国土計画遂行には日本国民の大多數が現に抱いてゐる旧來の世界
 觀と、其國家觀とが相倚り相絡又合つて、妨碍を為してゐるのであるから、先づ現代日本

國民の懐く思惟の世取の模範替と、修補が行はれねばならぬ。此等の點に就き私は之から最も率直に、私独自の見解を語るであらう

一、東亞の新秩序は高度封建制度に倣

信淵が立案したる國土經緯の中に滿洲と支那を取り込まれてゐるやうに、昭和現代の國土計畫にも滿洲と支那を逸しては立案の体裁をなさないのである。処で先づ最近の流行語たる東亞協同体の批判から始める。東亞協同体と云ふやうな社會學的な表現が最近盛に用ゐられてゐるが、謂ふ所の協同体の内容は、言ひ合はしたやうに、日滿支三国が各々其自國の立場から出發した内部的並に外部的利害關係を擧げて其の理念たる協同体に投合参加するにあると云ふのである。処が、日滿兩國の關係は過去五年間の培養に依り協同体理論を律することの不可能な程に、日本への依存性が濃くなつてゐることは云ふまでもない。今一つの隣國たる支那に關する限り、蔣政權が縱令近き將來に於て崩解し去るとしても、言葉を換へて云へば、待望され居る新政權が我が援助下に確立されるとしても、滿洲國が日本に對すると同様の依存意識を支那國民に期待することが出来るか否かは却々の疑問である。何となれば、支那は遠く四千年の歴史を持つと共に、世界文明史上に於て其の高度文

化を誇り来たる国民である。そして日本は今から遠からぬ一十有餘年前に此の支那からの
洗滌によつて發達し来たる國である、其れ以来日本國民が所謂同文同種の標語を彼我親善の
楔子としようとしてゐたことは事實であるとしても、彼等支那人は東洋文化に向する限り
周知の、彼等自身を先進國として矜持し肚裡常に自國文化の高級性を誇り来たる者である
から、彼等は近代化されたる日本文明に對し却つて輕侮の念を懐かないまでも、衷心尊敬
してゐないことは蔽はんどして藏ふべからざる事實であつた。

然るに今次事變に依て彼等の自慢性と尊大性が一挙に挫折せしめられたことは云ふに
及ぶであるが、其れかど云つて、今後滿洲國民が其の弱き双手を伸ばして母親にすがら
うに、彼等が日本依頼の姿態を衷心から示すかどうか、少くとも、當分の間は一大疑問と
して残るだらうと思ふ。支那の國土は殆んど廣大無辺に延びるのであるから、来るべき新
中央政府の集権力を以てしても、其の國土の辺疆にまで之を徹底させることは所詮困難で
あらう。殊に、現存歐州諸國との諸關係を永續的のものとして考ふる時、一層強く其の危
根を濃くする力である、是に於てか、東亞協同体と云ふやうな社會學的表現方法は安當で
ないと共に、其の内容が従つて難解となつて来る、再言すれば、現下の事體を説明する標
語としては東亞協同体は當てはまらなかつたと云ふ結論に達するのである。

此の間に在りて、東洋の新秩序建設と云ふ標語はこれにより曰支事変に於ける日本侵略の意義を遠ざけ得た器用さは無論のこと、其の語の上には多くの文化的意義さへもにじみ出てゐて、世取各國の好感を買ひ得る適性を充分に備へてゐる。然も此の東亞新秩序なるもの、具現化に就ては明確なる方途を示してゐない。實の処、東洋の新秩序建設は今僅に胎動してゐるのみであつて、將來のことは明日から、否な明後日から調査研究し、其の中の実施可能性あるものから実行に移すと云ふより以上に出てゐない現状である。然らば謂小所の協同体理論によらないで、東亞新秩序建設の指導標下に曰清支三國を拏結するとするならば、其の拏結の結果として現はれたる三國の形は果して如何なるものであるであらうか。今私をして所見を語ることを得しむならば、東亞新秩序建設の態様は、日本を盟主とする一種高等封建制の確立に外ならぬ。そして盟主日本の下に位置する滿支兩國が日本に對する關係には夫々差違があつて然るべきである。滿洲は何処までも日本の附庸國として取扱ひ、其の國のあらゆる政治、經濟、社會を日本の思ふ儘に營為し得べき可能性が多分にあるけれども、支那の方は却々以て左様には参り兼ねるから、更に違つた角度から、異つた取扱ひと待遇を與へねばなるまい。顧みれば近世日本の封建制度は社會史學上の高度封建制であり、其最初は諸侯中の一領主に過ぎなかつた徳川氏の霸業が成功すると共に、

全国三百諸侯を巧みに籠絡牽制して、其上に君臨してよく三百年の命脈を保つことが出来たのであるが、今や東亞新秩序建設の各分下に日本が獲得すべき新位置は取りもなほさず此の高度封建制に於ける徳川家康の其れである。鳴かざれば殺して仕舞へ郭公の故智は、仁義明徳を以て立つ日本帝国の欲せざる所であるから、今や鳴かざれば鳴かせて見せようの努力を拂ひつゝあるのである。家康は其の天料八百万石と、日本全土の金銀山の採掘権を手中に收め、此の両方から挙る收入を以て總石高三千万石と云はれたる三百諸侯を操縦した。僅かに八百万石の領地と、點か星かに過ぎざる鉾山の経済的基礎によりて諸侯を朝略操縦し、然もその方法宜しきを得たるが爲に、諸藩脱藩、徳川一門万歳が三世記の永きに及んだのである。即ち徳川氏一度び其の覇権を確立するや、決して諸侯を根本的に壓服することを行はず、單に外交兵事の権の又を幕府の手中に收め、諸他の民政に關しては、事大小となく之を諸侯に任せ切りにしたから、谷藩主は自己封内に於ける政治の割據性と、大殺様としての威嚴を充分に維持し得たのである。此の高度封建体制を東亞新秩序建設に採用するならば、滿支兩國を西臨に抱いて立つ日本の地位が始めてはつきり顯現されるのである。そして滿支兩國に對する此の態度と新体制を樹立すべきことを前提としてこそ本篇主題の國土計畫を其の背後的政策として取り上げんとする意義が自ら判明するので

ある。繰返して言へば、日本の新附傭國としての満洲を育て上げつゝ、他方の支那を善隣友好國として愛敬し、其の上に東亞の盟主として日本が君臨し得る処から、東亞の新秩序が具現化されると共に、農村を中心に立案さるべき國土計画の全貌が、描き出されるのである。

二、國土計画の必然性

國土計画を実施しなければならぬ國內の事情は實に多岐多端であつて、農業部面は勿論のこと、工業部面にも、商業部面にも多々存在して枚挙に遑ない程である。私の謂ふ所の國土計画は農村を核心として考へなければならぬとする建前を取る故に、茲には農村部面だけを尙題として國土計画実施の必然性を見ることにする、然も此の農村部面には無駄と重複が一杯充満するけれども、今は唯其の中の一、二例を引きて全般を推測すると云ふ方法によるであらう

(A) 農業立地の無統制

農業は専ら自然條件に制約せられて立地し発達すべきものである、此の原則に背いて企画された農業は、其の遠慮せざる自然條件を克服する為により以上の、より餘計の、資本

と労力を投ぜねばならぬ。其処に必然的に採算困難と、経営者の生活不如意が生み出さる

此の原則を無視して農業増産が企画せられ、特殊農産物の奨励がなされた為は、某縣某郡の農産物は其の産額に於て異常の躍進を見せたが、然も他の某縣某郡の同種生産地の競争によりて低価放売を餘儀なくせられ、之を前なる某縣の農産物と同一水準にまで引き揚げるには更に一段の労力と資本をつぎ込まねばならぬと云つたやうな事實は、屢々聞かると、話題である。斯る農業非計画性の下には縣知事の、縣經濟部長の、縣農務課長の、又縣技師の小功名心や、縣自体の持つ割據主義から来る場合が多い。日本国土は北半球の北辺から南に流れて赤道にまで及ばんとしてゐると共に、其の帯の如き山嶺の高原地帯と、低地帯とは垂直の關係により一縣内に於てさへも往々青森縣と宮崎縣の如くに、天然條件の違ふ場合があるのであるから、時の官吏の輩なる一時の功名心によりて立案せられたる一縣付足主義や、一河自足主義やの生産方法が、日本全土の計画生産から見ても如何に不都合であり、不合理であるかは多言を要せずして明かであらう。

農業部面を見た序に工業部面を少し覗くならば、数多き産業部門中で工業は割合に立地割

約を受くること少き産業である。故に、其の工場建設は一方に住宅地域を襲ふかと思へば、他方には農村地域を侵喰する。其の結果として都人の安眠を妨害し、大気を汚濁し、風光を臺無しにして、結局人心を晦冥萎微せしむるものあるに拘らず、工場自ら持つ飛散性と一地集中性とは、如今軍需工業の勃興や、生産力拡充計画の進展に連れて、益々其の度を強めつゝある。其の結果として出現されるものが、大小都市郊外への集中であり、職工の都会群居であり、住宅不足である。かやうな工業集中は昨今異常の速度を以て進行しつゝあるから、其れが毓て内地都市社会に、延びて又農村社会に及ばず影響たるや、寒に以て恐るべきものがあると豫想せざるを得ぬ。

農村は工業豫備軍の溜池であり、貯水池であるから、一朝都会に各種工場の煙突が林立するに至ると、農村予備軍の匣内がどつと切り開かれて、田舎の簡素なる停車場とか、バス停留所とか、今が今までモンペイを穿いてゐた娘達や、股引をつけてゐた青年達が欣欣如として柳行李や風呂敷等を脇にして離村する。其の行き先は云はずとも知れたこと、彼の工場の棟割長屋、彼の煙突下の竈脇である。かうして青年男女を吸ひ去られた跡の農村に於ては労力不足のあがきと、農業増産の指令とが一時に押しよせて来り、勤労奉仕の號令又一段高く響くことになるのである。凡そ一國人口の配置に於て都会を頭腦に例

ふれば、農村は其の肢體に當る。頸寒足熱が人体の健康上最も望ましきものであるとするならば、最近に於ける日本國土の人口配置は健康道の逆を辿つて、頸熱足寒の症状を濃厚化しつゝあると云つてよい。

(B) 移民國策の不立地性

附備國となりたる滿洲に日本帝國の活機を注入するには如何にもして向ふ二十ヶ年間に日本人五百万人を入れねばならぬとて、大量移民政策が提唱せられたりはよい。だが併し、移民の引き抜き方と、移民を送り出したる跡地農村の整備とを考慮に入る、時、其処に幾多の問題と疑惑が呼び起さる。日本國土は前にも云つたやうに、帯の如く、蛇の如くに延縮として南北に流れてゐるから、國內の同じ一反歩の土地でも北と南とでは其の生産力に異常の差異がある。東北地方に於ては水田に於ても、畑地に於ても、僅かに夏期一作しか收穫し得られない。一年一作の點では滿洲と敢て異なる所が無いのである。然るに、西南日本の中国、四角、九州あたりでは二作三作は少い方で、多きは一年十數回も土地―土地と云つても畑地の事だが―を利用するものさへある。故に同じ一反歩でも西南日本の農村の土地と、東北日本の其れとは數等十數等の差違がある筈である。昭和十四年五月、私は香川縣綾歌郡土器村に旅行し、同村大字西新前（西新前）に於ける一篤農家から、三反歩の畑を

耕作して年收一千四百圓を挙ぐる実話を聞いた。此の篤農家は自己所有の畑地を一年十回利用するのである。私は其の作付順序をこまめに手帖に書き込んで帰ったが、其の委曲は茲に省略するとして、私が今方説しようとする論議の焦點は、香川縣が日本中で最も人口稠密なる地方と云はれてゐながらも、全縣下の農家が別に逼迫した気色もなく、悠々として生活しつゝある理由は、実に其の豊かなる天恵に依存することである。三反歩の畑地から一千四百圓の收入があるならば、一反当り四百七十円弱の收入となる。尤も此の全收入中から若干の生産費を差引かねばならぬが、さうした差引を行ふても、一反歩優に三百円は純收入として残ると云ふから、驚くのである。之は併し香川縣下でも特例の一つであるから、縣下農村の全部を此の標準で推すことは出来ぬとしても、一年一作たる東北農村の最も歩のよい稻作経営を取って比較して見ても、其の向の差異が明白であるのである。東北地方に於て水田一年一反歩当り純收入が漸く七八十圓に止るのに比すれば、其の向の相違の如何に大きいか判るであらう。況んや東北地方の畑に至つては更に其の收益が低下して、五六十圓を出でない実情であるから、あとは語らぬでも判ると思ふ。同じ一反歩の土地を持ちながら、同じく日本農民と云はれながら、そして等しく興亞国策線への進軍歌で鼓舞されてゐながら、東北日本の農民と、西南日本の農民とは、其の收入の上に斯うも

甚しい懸隔があるのである。然るに提唱されたる移民國策では内地農業生産力の地域性が考慮されずに東北日本からも、西南日本からも、平等に一縣一村から雪と氷の滿洲に人移しをしようとしてゐる現状である。国土計画の立案には先づかう云ふ點に狙をつけて、土地と人口の調整を農業生産力に即して遺憾なからしむるのである。更に又國策としての滿洲移民と、残留農家更生との關係を来るべき五十年、百年を先達して検討すると云ふことに就ても今は何故か、一般に期待するやうに注意が拂はれてゐないやうである。我が大日帝國が過去に光輝ある二千六百年の歩を続けて来たやうに、其の来るべき年月をも千萬年の數字を以て敬へたいと念願せぬものは一人も無い。其処で吾々が茲に大に考へねばならぬことは、昨今、五族協和の人柱として雄々しくも墳墓の地を棄て、滿洲地へ急ぐあの青壯年達が、星移り、物変りて、五十年百年の後に至り、彼等の父や祖父が往年考へたやうに、彼等は母國日本の繁栄を念とするにあらうか。人間には何人にも郷土に対する愛情がある。其の産湯を使つた場所ならば、其れが山や河であらうが、谷の底であらうが、下ふるさとしとしての親し及かとくに幼心に附着してゐるから、一生を通じて其処に愛着し、其処の繁栄を囀ることに専念するのが常である。今潔く父母の國を去つて北滿の荒野に新天地を求めようとする彼等青壯年が、今後歲月を経る向に、徐々と心変りかして、土着

心理を強め、遂に故国日本よりも第二の故郷たる満洲の方がより大事だと考ふるやうになるのではあるまいか。そして、彼等の生活権は満洲國としての地域社会を維持し、其処を發達させることによつて、確保さるゝ現實性を理會するのではあるまいか、昭和九年の秋、私は満洲の南東州は旅順襄なる水師營——日露戦争の際に、敵将ステッセルと乃木将軍とが前線談判をした有名な歴史的村落——に、二十年前に日本から移住し、苹果栽培を行ふて成功し、今は年頃の子供を持つてゐる一農家から、在滿移民の対母國心理が年と共に移り行くさまを南かされて胸を打たれた、話と云ふのは斯うだ。右の移民農家氏事、多年の勞營空しからずして苹果の栽培に成功して、小金かたんまり溜うたので、可愛い子供を連れて、懐しの故国日本に旅行して見たくなり、大連港から船出して、何のトノ唄くる玄海灘の海の色、さては山陽線の汽車の窓に映る瀬戸内海ノ風光に心跳らせつゝ、古き都の奈良や京都、それから東京、日光と見物して廻る向に、可憐なる子供君か「お父さんもうお内に帰らうよ」と云ひ出した。「何処にお前は帰りたいのか」「水師營に帰るのよ」と無心にねだらるゝので、父なる農家氏もとうとう我を折つて、予定よりも早く日本見物を切り上げて、又々玄海灘の波濤を分けて遠東半島の寒村たる其の「故郷」に帰つたら、子供君が始めて安堵しと云ふ。移民農家の新郷土愛、其れは寔に宜しいが、其の心理が

集積せられ、練磨せられて、何時の日にか満洲国民性とか 満洲愛國熱とかに變形変質し行く日が必ず来ないと誰が保障し得ようぞ。そして米國や、加奈陀が母國英吉利から離脱したやうなことは夢にも見たくないとしても、今、母國日本の中堅層たる青壯年をむごむご満洲に送り出すことには幾らかの用心があつてよいのではなからうか。内地日本の青壯年達が移民國策線に沿はうとして、否な彼の地の十町地主を目当てとして故郷を離去し移民地生活五十年、百年を重ねる向に、彼等が壹個の満洲人になり切つて仕舞ふであらう其の日の来ることを考ふる時、國策移民と相並んで故國農村をもつとよく守つてよいことの一層切實であるべきを感ぜざるを得ぬ。「お父さんもう水師營に歸らうよ」の天真なる童子の一語は洵に後百年に於ける在満日本人心理の動きを予感させる悲しくも強き響きではある、さうかと云つて、私は満洲移民國策に対して悲觀的冷水を注ぐものではない。要は日本内地の人口疎密現象の及に捉はれず、農業産力を立地的に考慮しつゝ、内地日本のより大なる向上と充實を目指して青壯年を引き抜かねばならぬ。其処に国土計画と云ふやうな無駄と不合理を矯正する大尉的事業の起るべき必然性が潜んで居ると主張するのである

三、新世界觀 新國家觀

佐藤信淵は自ら提唱する所の「國土經緯」を實現する爲には、先づ政治の局に當る一國の君侯たる者が万民の主長たるに値する人格を備ふると共に、農政經濟に關する充分なる智識を會得せねばならぬ、此の大前提が具備しなれば如何なる名案、如何なる良策を擧げて、決して成功するものではないと云つた。此の大前提具備さすことを彼は「創業」と呼んだ。創業と云ふ文字は却々よく考へたものかと思ふ。實際の政治を行施するに當つて先づ「創業」せよと云ふのである。然も其れは人民に「創業」せよと云ふにあらざして、君侯自身に「創業」せよと云ふのである。かうして、君侯の徳品が備はり、其の善習良能が一國を知るに足るに至つたならば、其処に始めて善政の實が挙ると云ふのである。そして此の善政を國內に實行する手段としては一に教導、二に鞭撻、三に強制と云ふことを考へた信淵の國土經緯には、云はゞ硬軟自在の手法、文武兩道の捌さが相備はつてゐた。然らば現下非常時局を目前に控えて行ふ所の國土計畫實施に際し、信淵の考へてゐたやうな「創業」が必要であるかどうかと云ふことになるが、私は是非其れが先行せねばならぬと思ふ。唯現任は信淵在世時代とは違ひ、未だ資本主義的勢力が社會を支配してゐる時代であるから、所謂創業もその処に重點を置いて考へねばならぬ。手近な例を引いて云へば、先づ農村及び都會の土地所有權に關する考へ方を直すことである。今日の土地所有權は憲

法によりて保障せられ、民法では其の所有地を自由に使用し、収益し、処分することを出来ると云ったやうな所有権萬能的に立法されてあつて、徹底的に土地持を保護することになつてゐる。國土計画を實行する場合ともなれば、國家の見て以て必要とする場合には如何なる水田でも、畑地でも、山林でもとしく其の地目を変換して、川を通したり、山林を仕立てたり、野原にしたり職工住宅区を建設したり、療養部落を作つたりするのだから、各地の土地所有者が本当に非常時局を認識して、喜んで其の土地を國家の用役に奉じ、國家は其の所有権だけは元の持主に認めてやつて満足させると云ふことにならなくてはならぬ。さうなつたならば、其の土地の持主は最早其の土地を使用し、自由に収益し、自由に処分することは絶対不可能となるのである。土地所有権に肉する限り都會地に於ても亦同様である。一坪五百円の土地も國家の御用には甘んじて提供し、かやうな一大制限を受けた所有権を國家から許容されることに、至上の満足を感ずるやうにならねばならぬ。斯くも旧來の所有権に變質の伴ふことを予め農村と都市の人民、殊に物持層に覺悟させることが、頗る必要なのである。其れが蕭小所の創業である。

次に國土計畫の目指す処は一町の富、備在と、其れから生れる享樂の備有を是正しやうとするのであるから、是迄必要以上の土地とか、金錢とかを所有し、其の収益によつて広

大なる邸宅に住み、華奢なる日常生活を営んでゐた人達は、今や東亞高度封建制の盟主とならん爲に日本國家が無限の資財と勞力を要求すると共に、更に此の大運動の背後工作たる國土計画に尤相當莫大の國費を要求せらるゝのであるから、其の所有に係る不動産や全錢の自由使用によつて得られを享樂は大々的に制限せらるべきことを覺悟せねばならぬ、此の異常なる制限に対して不平や不満を起さない所から、東亞新秩序の建設と、其の背後工作としての國土計画が実現の緒に就くのである、

我が建國史の第一頁には天の御中主の尊と高皇産靈神と神皇産灵神の御三体が現はれて来る。信濃は此の御三神の攝理に基き宇宙が創造され、地球が出現し、日本國家が生成されることを頗る巧妙に叙述してゐるが、昭和現代の日本國民は此の目前に横はる東亞新秩序建設事業が眞に日本歴史始まつて以来の大事変なること、並に此の難関を突破する爲には無駄と浪費を断然やめて、大堅固最緊密の國家体制に立ち直る準備としての國土計畫の是非共必要であることを銘々察知して、以て各自の所有物の一部を手許に残し、他の一部を國家の自由使用に任する気持ちになつてもよい筈である。如何に金銀財宝を葦笥の中に仕舞つて置いても、居宅が丸焼けとなり、又は洪水に押し流されて仕舞つては、何物も残らないではないか、かうして大思想家信濃の提唱した「創業」は先づ以て農村と都市の土地持を

改心させる所から始まらねばならぬ。彼等が一斉に皇道適照の有難さに感泣することにならねばならぬのである。

このやうにして、一般國民の國家觀が大変質を遂げて眞に一億一心、邦人一如の世の中になつたならば、日本國內のあらゆる生物と無生物が挙げて國家の御用に立つことになる。自由主義時代や、個人主義時代は無用の廢物として放棄せられたものが皆生き返つて御用に立つことになるのである。例へば彼の路傍に於ける雜草一握りも、従来は農家の堆肥原料とせられ、其れを採集したる農家を益するものとの又考へられたが、新國家觀に於ける右の雜草は、當の農家が其れを堆肥の原料とするにより、春秋二季の金肥買入量が減少する。そして其れ丈け日本への外國肥料又は肥料原料の輸入額が減じて、海外への正貨拂が少くなり、國庫の正貨確保額が増嵩すると、かやうに、全國農民の一事一物に対する觀方が變つて来るのである。隨つて大學あたりの經濟教育も一大變化を遂ぐることとなる。即ち日本領土以外に生産せらるゝものは、縱令其れが豊富且つ低價であつても、一応其れは日本國家の欲望を充足するものとしては見ないのである。他國のものは他國のもので、日本の資材と見做さないのである。之に反して、日本國土に生産せらるゝものならば、一本一石の微に至るまで悉く國家の資材として尊重し、之に最高度の利用價値を見出さし

めようとして國民全層を指導し、教育する。鎌倉時代の昔、青砥藤調なる一武士が一夜滑川に落ち拾文錢を捨ふ為に、代五拾文の松火を買つて燈火としたる傳説を自由主義經濟時代の經濟学者は、迂濶者の骨頂として一笑に附したけれども、新國家觀下の日本經濟學に於ては青砥一人は縱令損失をしてむ、さうした行為が、結局國家奉公の眼目に副へば其れで満足するぞと、かやうに指導し、教育するのである。故に一つの物、一つの錢が單なる一個人の損得觀念によつて假初めにも放棄せられたり、又は浪費せらるゝならば、それは如何にも勿体ない」と叱咤する強硬大原則が、新國家觀には当然織り込まれるのである。今一度繰り返して云ふならば、国土計畫實施によりて農村一地主の土地が潰されることがあつても、又都市大富豪の庭園が解放せられて綠地點に縮入せらるゝことがあつても、其の所有者は決して其れを失ふたのでもなければ、消滅したのでもない。日本國家と云ふ最も信用があり、且つ其の抱ふる大番頭の差配によつて安全に保管せらるゝのだから、之に増したる財産保有の安全法はないと、期う考ふることになるのである。

四、新國家觀の法制化

謂ふ所の国土計畫は我國土上に自然發生的に生長し來つたと云へば云へる彼の無計畫的

存在である各種の産業に国家の意思に基いて有機的計画性を與へ、然かも其の總てが主として農村を中心にして立地せられ、機構づけられることを指して云ふのである。之が為には日本国家の既存行政組織や、教育制度や、經濟機構や、交通制度やに一大変革又は修正が加へられなければならぬが、之を具現化する為には一般国民の、即ち官吏の、學者の、政治家の、労働者の世畧觀と國家觀とを根本的に改めなければならぬことは前に述べた通りである。

日本国民の世畧觀と國家觀に基礎的指導概念を與へてゐるのは云ふまでもなく皇道である。併し吾等が信奉する皇道は、是迄は國家道德としての軌範を示すに止り、唯最近に至り皇道實現に對して若干程度の統制經濟諸規則が現はれ居るに過ぎずして、未だ強い拘束力を具へてゐない。故に、其の皇道が實踐に移るまでは、先づ説法、其れに對する聴講、其れに反省が続くと云ふやうな、やゝこしい段階を経るを必要とし、然も其れを實行すると否とは各人の自由意志に任せてあつたのである。かやうな、主として道德規範たるに止る処の皇道主義は、實踐一途を進む国土計画の指導原理とするには聊か抽象化され過ぎた嫌があつた。左れば日本國家の總力を今後五年、十年、百年の永きに亘つて発揚せんとするには、皇道の眞本義を眞向に奉体して國民全層の社會心理と、家族心理と、個人心理へ

所有慾、享樂意慾、優越感等)に法律的拘束を加へ、更に其の拘束を受けたる國民が一意皇道の趣旨に副ひ奉らんことに専念するやう不断より精神的に教育し、指導すると共に、若しも此の嚴法を犯すものがあるならば、斷々乎として処罰する建前を取らねばならぬ。かうして日本一億民衆の世帯觀や國家觀やを教育手段と立法手段によりて變形變質せしめ得るならば、国土計畫の如きも易々として行はれ、皇道日本の國家体制と社會組織が始めて完全なる鉄壁陣となるのである。假初にも之を犠牲と考ふる國民のある處は、國民思惟の世帯觀未だ皇道主義の世帯觀に通ふてゐな、譯であるから、国土計畫など云ふことは所詮実行せられないのである。國民道徳の最高規範を示す皇道の本旨に即して、日本帝國天皇親ら一億蒼生の心を以て其の心とせられ給ふことを先づ教育手段によりて徹底せしめ、且つ其れが實踐を法制化することに成功するならば、國民全體は拳つて此の聖慮を奉体して、必ずや恭儉己を持し、博愛を全市、全郷、全村に及ぼし、國民民福の爲に世務を庸いて大に公益に勵むに至るであらう。

五 国土計畫の一般方略

皇道主義の世帯觀と國家觀が確せられ、其の日本國家の各層各地域に且現化され

る曉には、先づ以て東洋高度封建制度下の墮主としての日本の地位が確定せられ、滿洲國は一層我等に接近し来り、且つ支那國民は眞実に我等を畏敬し、其の間に日本の欲する經濟的提携も隔意なく進むであらうし、隨つて彼の地の天然資源の協同利用や、日本製品の協同売込及び圓滑に行はれて、日本帝國大繁昌、滿支兩國の安居樂業が名実共に具現化されるであらう。之と同時に日本國內に於ては事業資本家も、金融資本家も一齊に皇道主義の光被にあやかつて、其の生産手段と其の金融機關は依然各自の私有を許されつ、其の手段の利用、其の機關の運用によりて生じたる利潤中より、一般國民の生活費に相当するだけの額を手許に残し、他は全部之を租税として上納し以て高度封建制の維持と、其背後の工作たる国土計畫実施の費用等々に充つることになるであらう。そして彼等資本家も、金儲も、一般國民と平等に質素なる私生活と、節度ある社会生活に甘んじて、其処に毫末の不平がない所か、生々發展する日本國家に其の生を享けたることに、無上の歡喜を感ずるのである。

日本国土利用面の大半を占むる農村は国土計畫実施の結果として、如何に改造されるであらうか。悉くは農村人は科学的精密調査の結果実施されたる農業地域確定の爲に多少の拘束を受けざるを得ないであらう。例へば、是迄不良なる條件を忍びて僅少の利益を目あ

てに飼養しむる養蚕とか、又栽培してある果樹とかを停止せしめて、其の代りに、麥や大豆を栽培させらるゝと云ふやうなことがあるであらう、かやうな場合に於ては、其の新に栽培せしめらるゝ麥や大豆の値段を政府が保障することになるから、農民は之れに対して却つて満足するであらう。随つて計画実施の爲に生産力を減殺すると云ふやうなことは考へられない。又生産力を減殺するやうでは國土計画の本旨に背くのである。

又農村耕地の周圍に突如として労働者住宅が設けられ、労働者への耕地売却又は提供等のごことが強行せられ、同時に垣々たるアスファルト道路が村端に開けると云ふやうなこともあるであらう。其の際農村地主の所有地は望道政治の御趣旨に基いて、決して没収する等のことは為さざらば、其の所有権は永久に之を享有せしめ、唯其の用役を國家の爲に開放し、其れに対する適當の用役料を仕拂はるゝことになるから、其の債銀收入によりて村々地主は従来通りの生活は続け得ないとしても、大体にして自作農や小作人と略ぼ同様な程度の私生活と、節度ある社会生活を営みつゝ、其の土地を熱心に管理して、日本國家の隆興と東亞新秩序建設の進展を目標して、感喜し得ることになるのである。

茲に特に一言すべきは、日本農村の本質的存在である彼の自然村落——即ち大字——の特殊性であるが、農村部落は出未得る限り旧態を保存せしむるやう計画する。全國十萬の多数に及ぶ部落は寔に以て日本國家の細胞をなすものであるから、其の點には充分注意す

る必要がある。故に各種の道路を新に開通する場合でも、部落の中央を突き通すやうなことは絶対にやらせない。縱令、多少の工費は増加しても、部落の周辺を迂迴せしむる、之と同時に現に存在する國道や縣道が部落を貫通し居る場合には、之をも周辺を迂迴するやうに改修する。斯うして農村部落を一個纏りたる団聚の地域となるやうに設計してこそ、農村本位の國土計画が実現されたと云ひ得るのである。然らば都會はとうなるか。三大都市は無論のこと、六大都市、十二大都市も今の如き立錫の餘地なきまでに平面的又は立体的に家屋の充満することはよくないから、かやうな都市形態は断然改修せられて、先づ都心に、次で都心より若干距離を隔つる毎に大小幾つもの緑地帯や緑地點が増設せられ、其処には蒼蒼として茂れる林樹の下に銀漣躍る池水があり小流があつて、都人士の入りて自由に林遊し得るやうになし、居ながら青松白砂の美を味ひ得ること、到底現在の小公園などの比ではないやうにする。そして斯く緑地帯や緑地點を設置するには広大なる市街地を潰さねばならぬが、此の場合に於ても、土地没収等のことは敢て為さず、所有権は現在の地主達に認めつゝ、壘道主義下の用役権の或を低廉なる賃銀にて國家に認むるのである。そして工業労働者も現今の如く都會附近にのち住居することを許さず、都會より隔りたる農村内に住宅地区を設けて其処に住まはせられ、主人が工業生産に従事すれば、其の家族は蔬

菜農業に励み、以て清浄なる空氣と閑寂なる環境裡に、手作りの野菜を食膳に上ほすことの出来る愉快を味ふのである。此の場合職工住宅と職場とを聯ぬる交通路は今より以上の便利なるものとなり、快速と低運賃により彼等が進んで安樂境たる職工住宅地区を選ぶやうに仕向くるのである。

商業に於ては産業組合と工業組合の存立は依然認めらるゝけれども、然かも個人商人の生存権を侵蝕するか如き所謂組合主義による営利行為は望道の本義に依りて是正せしめられ、其の商行為は人々が一組合の組合員たることによりて得らるべき利得と、商人より仕入れ、又は商人に売却することによりて得らるべき利得とが同一水準に置かるゝ程度にまで組合の営利行為と、個人の商業行為とに整然たる統制が加へるのである。さやうにしなければ、主として農村地域に立脚する産業組合と、商業地域に立脚する個人商人や商工業団体との摩擦相剋が依然として国土の上から消え去らないうであらうから、斯うした複雑なる都市商工業の内部的並に外部的諸關係は、一切之を挙げて望道主義下の国土計画の線に沿うて修補しく、是正する。其の結果として三大都市も六大都市も、十二都市も皆其の周囲に於ける農村地域との聯関に於て平衡を保ち、相勸し得ることとなりて、東西新秩序建設への新しき反撥力が、都市農村兩環の聯繫點から奮勃として興り来るやうに誘導する。

之を要するに、國土計画が實現せらるゝことにより、都市工業生産手段の地理的独占と農村自然美独占と、都市農村兩地域に跨る金融資本主義的独占等々に大修正が加へられて、各種産業の地理的偏倚と、富の偏在とを全く不可能ならしむるが故に、自由主義經濟時代に於けるが如く、一國の資本家の又が歡喜と娛樂を独占したるとは打つて變つたる明朗河達の社会となり、自由主義時代には到底夢想し得なかつた均等の歡喜と娛樂が國民全層、殊に庶民層に與へらるゝことになる。即ち例へば皇道主義國家觀が實現せられて、國庫の收入が増加したならば、其の收入の一部を割いて國家は先づ庶民層の爲に數万噸の巨船數隻を建造し、其の設備は今日の日本郵船の最優秀船に優るも劣らぬものとして、其れに農村小作者も、自作者も、地主とも、重役も、職工君も日給一円の小使君も押し並べて平等の「シート」を與へられて、青波渺茫たる日本海沿岸の、又は黄波濱辺を没する支那海沿岸の、又は温風緑樹の梢頭を掀つる太平洋諸島を巡航廻覽して、海國日本に生れたることの歡喜を味はしむる。之と同時に農村都市の女性衆の爲には瀟洒たる優秀汽船十數隻を建造し、中に萬全の設備を施して瀬戸内海に浮ぶる。善美を盡したる此の汽船に平等の「シート」を與へられ、銀波船べりを打つ内海を巡航して、或は彼の奇石怪岸折り重る小豆島の寒霞溪や、木咲耶姫の鎮座ますて小大三島や、海の鳥居に夕日さす巖島などを次々／＼に巡航して、

里の娘も、漁村の姉御も、川向ふの伯母さんも、等しく皇道日本の有り難さに歡喜する
更に又農村の氏神社頭と伊勢大神宮や出雲大社を聯ぬる爲に、又は農村の墳墓と歴代天皇
の御山陵とを繋ぐ爲に、既設道路があれは其れに修補を加へ、其れがなければ平坦道路を
開設する、此等の信仰道路工事は悉く沿道村民の勤勞奉仕により致され、其の結果として
全国五百万戸、三千万の農民は村の氏神と大日本帝國の祖廟とが、又祖先の墳墓と歴代天
皇の御山陵とが道路一線の上に置かるゝ歡喜をひたすに味解するのである、更に進んで
皇道主義に基き全国民を大自然美に接近せしむる爲に設けられたる大道路が、山は立山、
八ヶ岳、雲仙岳や、狩勝峠、濱は潮岬や、壑戸崎、舞子ヶ濱や、田子の浦と云ふやうな名
山勝区に僻陬部落の一端から南通し、其の道路を皇道國家より差し廻したる最優等のバス
に群衆して疾駆する、其の爲に旅行者には特別宿舎を建築するか、或は旅行券を發行して
既設旅館への宿泊者を優遇する方法を講ずる、斯ふして或は浪怒る太平洋の巖頭に立ちて
指呼の向に黒潮の流れを見、又は遙か山上日出づる空を仰視し浩然たる神氣に觸るゝ余ら
ば、其の恩沢に浴したる国民各層の歡喜は當に絶頂に達するであらう、そして斯く設備せ
られた海上の航路や、船舶や陸上道路や、バスや、旅館には、神ながらの名稱としてすめ
ら航路、すめら汽船、すめら道路、すめら自動車、すめら宿、すめら旅券等の名前が考慮

せられ、其の費用の大部は國費により、他の一部は平生の掛金によりて仕辨せらるゝ。斯くして農村が明確滴達一色の下に置かるゝことを目指して、国土計画は着々進めらるゝのである。之を要するに私を提唱する日本農村の国土計画に於ては都市と農村との間に於ける人口の疎密と生産力に即応して調節を策し、其の結果として、又其の目的として、行はるゝ農業及び商工機構の修正及び国民全層に対する娛樂再分配の問題が包含せらるゝのである。而して此の計画実施に伴ふ世取観、國家觀——変革と云ふよりは寧ろ飛躍的向上——が先決の、否な最前提の、條件として考慮せられねばならぬのである。

六、国土計畫に隨行するもの

国土計畫が東亞新秩序建設の背後的工作である以上は、其の設計には必ず常に滿洲と支那の問題が結び附けられねばならぬことは、前に云つた通りである。然も我等が目前に横はる東亞新秩序建設に対しては尙知の如く列國の妨害を伴ふと共に、吾等が主張する高度封建制の高揚にも当分の間は支那から反對される、否な滿洲からさへも反對されぬとは限らない。斯る反日本的抵抗勢力を排斥し、掃蕩し得ること、高度封建制の体制が整備せられて、東亞新秩序建設が具現されるのである。此のやうな遠大なる目標を見詰めて直往邁

進せねばならぬ現段階下に於て、我上層階級の面には尚多分に指導者としての影の薄さが見ゆると共に、官署の割據主義や、官吏の利己主義や、人材配置の不合理や、青年指導網の重複やらが雜然として存在し、過ぐる平沼内閣の一枚看板たりし總親和とは凡そ程遠いものがあるのである。此等の権利備在と、無駄と重複の充満等々は国土計画実施と共に當然雲散霧消して、更に新なるものが其れに取って代るべきであるが、其の事を二三例を引いて語るであらう。

(A) 國民生活に對する上層部軌範の薄影

國民全層に非常時的緊張と努力が要求されて居る今日であれば、上は宰相百官より下は町村の吏員に至るまで、苟くも國家的事務を委託されてゐるものは悉く節度勤勞の模範とならねばならぬ、公事を預る者が自ら率先して節約し勤勉する時、周囲大衆は必ず其れに隨步隨行して國民運動の体制にまで進展し行けるのである。宗教界の傳導者は其の求道者に對して神信の神格を奉し、其れへの接近を勸奨するに當りて、不徳不敏なる自分傳導者を見ること勿れ、見るならは宜しく雲上神秘境の彼方におはします貴き神の姿を見るべしと説く。併し凡庸低劣なる一般民衆は至上唯一の神を見ること能はずして、其の普通の智識人に過ぎざる傳導者の思想と生活態度をのぞき見て、全智全能の神灵に通せず、其の

結果として、其の説かるゝ宗教の權威をさへ疑ふもさへあるに至る。或は云ふ このやうな信仰生活は匹夫匹婦に見る所であつて、多くの信者には見る能はざるものとして一笑に附するかも知れないが、時苟も非常時に際し一國の師表となり、全社会の軌範となるべき政治家、教師、演説家、言論家等々が其の相与とする民衆の前に於ては、如何にも高人、國士の如くふるまひなから、一度び其の位置を去るか、又甚しきは降壇する其の瞬間からか、又は其の筆を擲るかすれば、忽ち別人の觀を呈する人々か、狭い日本の巷間に堆積し、路傍に増集する現状である。此等の事實は國土計畫實施と共に如何に變り行くであらうか、幸にして我國体は清澄洪明にして肇國の當初より天皇親しく御身を以て謙讓の範を垂れさせ給ひ、遠くは難波高津宮に於ける聖帝仁徳天皇の御製となつて現はれ、近くは明治大帝が若し日本國民にして其の処を得ず、生活の途を失ふ者があるならば、其は一に朕が罪なりと仰せられざる如き、帝國獨自行の親政意識が日本三十年の統治史を特色づけてゐるのである、併し上を輔翼し下指導の任に當る上層者に至つては往々にして變態に値するものが無いではない、例へば農業に全く経験なき某々氏が、良二千石となるや、市尹となるや、思ひ出したやうに田植の眞似をする。又昨日まで頭髮に油光を放たせてゐた某々太官が俄に頸髪を九刈りにして、國民に恭儉の範を垂れようとするか如きは、却つて上層社

會人としての指導力の薄弱さを、國民の前に曝露するものではないか。彼の人々のなす田植と、彼の人々の九州坊主とが、單なる一時の間に合せの假り着であることを熟考する國民は、更により高き、より眞実の籠れる高級指導者を要望して居る今日である。此等経過途上の橋梁に乱舞する今の指導者達は、國土計畫實施に伴ふて一斉に引き下り、純正高潔の士により代らるゝであらうことが豫想せらるゝ。

(B) 官署の割據と官吏の利己主義

繁文辱禮の兎本市場、其の名は日本の官署であると云はれる程、我が中央並に地方の官署には無駄と重複が積まれてある即ち一たび部局が設けられ、課室が置かれると、部局長は一意其の局其の部の屋臺を守ること力又を支道の眞隨と考へる、そして日がな夜かな考へ抜いた結果として生れ出づるものが所謂新事業であり、部員の増加であり、其れに伴ふ俸給旅費の捻出である。然も其の新事業なるもの、目鼻をつくまで其の位置に止つて懸命努力するのならば未だしも、其の業績が黒とも白とも判らぬ前に、大事な責任者は輕風に枯葉の飛ぶが如くに榮轉又は転出して、跡は一向に構はない。斯ふ云ふ行政組織と運用が明治維新以來七十年向繰り返されて今日に及んで居る。彼等官吏は國策の何物なるかを考ふる前に、先づ自己の坐れる屋臺の安否を考へるから、其処に縦令官署組織の重複と無駄

が見え、又預算の使用に濫費を究見しても、各官の座墊の安危に拘する限り決して其の重複や無駄を省くとか、又は組織を改正しようとかはしない。斯る事情が小有中の甲の荷でも、乙の部でも、丙の課でも、丁の室でも同様存するるのであるから、此等官署の管理を改める全国の民衆にも其の悪影響が及んで、無用の競争や無用の生産費増徴を誘出せらるることとなる。現在我國に於ては前にも云つたやうに、農業にも、工業にも、商業にも何等立地的統制が行はれ居らず、農業に在つては往々にして或種の作物が氣候と土質を無視して不適当地に行はれ、又工場敷地が場所を構はずに選定され又は移動せられ、為に都市美を害ひ、淳風美俗を傷け、甚しきは風紀をさへ破壊するにも拘らず、其の弊を阻止することが出来ないのである、一に懸つて農業を統轄し、工業を監督する主務官廳官吏の腦中に国土計画 國家總力究揚の熱意が缺けてゐるかである。日本國家の行政事務には非難すべきものか実に無数にあるが、然も最も國民經濟の正常性を破る競争、摩擦、共喰ひ、共倒れの根本源泉をなすもの、官庁の部局課割據の弊害より甚しきは無い。左れば今後時局に對應すべき歴史的大改造を行ふには先づ以て官吏諸君の頭腦改革から着手せねばならぬが、彼等が頭腦は、俄か社立ての服務規律や、当面一片の訓示などで改まるものでない。もつと其の、其の興の水潦地に瀕つて洞窟しなればならぬ今日であるが、幸にも国土計画が実施せられたならば、斯る弊害や汚穢は無論綺麗に清浄せられるであらう。

(C) 人材配置の不合理性

國政の振作や、産業の拡充や、教育の刷新やは一に個々人材の育成と、其の配置に待たなければならぬのであるが、現在日本の文化機構中教育制度——学校教育、社会教育——程時代に取残されて其の微脂を曝露せるものはない。中には此の教育制度が時代に落伍し居ることは歴代の政府者之を認め、既に其の改革は屢々政府の手によりて立案せられ、又は民間団体によりて批判せられて無数の改革案が発表せられたにも拘らず、未だ其の中の一つも実行せられてゐない。例へば官学中の或大学と或特殊官立学校とは重複するものあるに拘らず、其の特殊学校の教員と卒業生とが、生活權擁護の爲に結束して改廢に反対し、政府要路者も其の勢を制御する能はずして、改革は結局行はれず、旧態依然たる有様である。大学は其の本末の使令として学向の蘊奥を極むることにあつたが、今や其の制度草創當時の目的を忘却し了りて、教師は学向の切り売りに終始し、学生は單に就職前の滯り場所としか考へなくなつてゐるから、其処に学向に対する懸命さと熱心さが殆んど見られなくなつてゐる、唯此の向 近年民間に勃興したる私芸教育の影響を幾分が受けて、多少改良の跡が見えないではないけれども、併し未だ一学級に三百人も、四百人もの学生を收容聽講せしむることを当然として居る現在に於て、誰か其処に深切なる人格教育とか、精神

訓練とかを期待し得ようか。メカホンの教育依然横行し、トコロテン式卒業生の大量生産は盛んに行はれてゐる。斯うした教育方法が、次代日本の骨髄となり、大東洋の将来を擔つて行くべき人材教育の方法でないことか、国土計画実施後には殊に目立つてあらうから、頑冥なる彼の教授達も、彼の卒業生達も、必ず時代転歩の重大性に鑑みて、謙讓互助の美德を発揮するであらうと思はれる。

次に官学と私学との差別的待遇は今日聊かも改まつてゐない。私立学校出の青年達が官廳や民間会社に入つて始めて目撃する差別の甚しさに、小心者は度膽を抜かれ、極く淡泊な家でも氣盜症に罹る程其程に懸け離れた待遇を與へられて居る。官学出身者が高等学校や大学へ入学する際に幾箇門を経ることに其争が、採用者側に安心を與へ、当の卒業生に優越感を懐かしむる訣ではあるが、其れをさうさせなくて、又さう思はせる方法は何程でもあるべき筈であるのに、一國將來の幹部級たるべく船出する私立学校業生——人文科学に關する限り、私学卒業生が官学卒業生よりも絶対多数を占むる——に對する仕打ちは、新東亞建設の大旌旗下に働かすべき青年養成方法とはどうしても考へられぬ、併し之も国土計画実施と共に必ずや先づ官学當事者から反省自戒して政府要人を働かし、明朗深淵なる青年時代を出現させて呉れるであらう。

更に看迷しならぬ一つノ痛恨事は、同種の大学が北と南とに設立せられ、其の大学設立の目的と沿革により、又所在する位置により、学生教育上には多分の特殊性を帯びて居る筈であるから、卒業後の就職の如きも其れに相應する地域が與へられてよい筈である。其の事が全く考慮せられずして、大学卒業生は宛も將棋の駒の飛車や角の如くに或は東に或は西に高飛びして、やつと職場に有りつく現状である。北海道帝大農学部は、建学の沿革と、所在する位置の何然條件とに基きて、寒地農業の研究と其の教育に主力を注ぐこと既に六十年の長きに及んで居るから、此の大学の卒業生こそは新附廓國の滿洲に送りて、其の地の寒帯農業指導の任に當らすべきであるのに、實際は然らずして、雪と氷の教育を受けざる此の大学の卒業生が却つて椰子の葉熱風にそよぐ台湾や、東南洋地方の農業技術者として出て行く現状を、誰か見て奇異に感ぜざるものぞ。併し其れも昭和今日の状況であつて、今後幾歳か後に国土計画が実施せられて、農業生産法に計画性が與へられたらば、人材生産性にも此の計画性が隨行して行かない筈でないから、悲觀せぬでもよい。

一國の將來を卜せんとせば、其の國の青年層を見よとは、誰も知る國家診斷学の玉條であるが、最近に一方文政当局者の頭腦から生れ出でたる学徒隊と、他方日本三千年の若者史と祭政一致史を背景とする日本青年團との間に其の地盤争ひと繩張り競争を突演して、

被指導者たる青年達に、其の何れか一つが無用の長物であることを教へて居るが、之も國土計画実施と共に臨時編制の混成隊と、郷土に根生ゆる若者団体との区別が認識せられ、元の眞善美一体の若者時代に帰る日か、何時かは来るとありう。農村の青年達は毅然自若たるべく、慌てぬでもよい。

七、東洋人の東洋的計畫

南くが如くんば、独逸に於ては風にヒットラー總統の創意によりて國土計画が立案せられ、其の一部は既に実行せられて相当の成績を挙げてゐると云ふ。今や同國以上に複雑至難なる國際狀勢下に置かれつ、日支事変処理の急行を促されてゐる日本に於ては、更により以上の精緻さと、巧妙さと、眞剣さを以て國土計画を実施して、旅費の「旅駄」と「備在」と「重複」を除き、完全なる有機的總合國家にまで練り直して東亞新秩序建設の幹通を突進せねばならぬ現狀である。併し、それかと云つて吾等は何も此際徒らに独逸を模倣し、彼の國の施設を眞似る必要はな。

惟ふに彼の独逸が更に高度化されたる全体主義國家へ成熟し行く爲には今後尚幾多の智識と努力を傾くるであらうし、又あらゆる諸外國の美點や長所を取りて自國の體格と血

液とを補強するであらう。現に我國薩摩の封建青年團たる健児の社や、近代的青年運動の總本山たる聯合青年團やらが速早く彼の國に採用せられて「ヒットラー・スーゲント」にまで成果したとのことは周知の事実であるが、私か茲に指摘したいのは、現在ナチス統制經濟の政治軌範は独逸十八世紀の明君フリードリッヒ大王の政治に暗示を得たるものが尠くないと云ふことである。即ちフリードリッヒ大王が「國王は其の國の第一の従僕なり」と云ふ君民一致の思想は独逸現下の独裁者ヒットラーが進んで躬行する所であつて、彼の謂ふ「資本は勞働の爲に存在する」と云ふやうな考へ方が如き當に其れを證つてゐる。又つ大帝が盛んに土地改良事業を行ふて農業生産力の發揮に努力を拂ひたる先例も、食糧問題に惠念せざるべからざる現在の獨逸が盛んに踏襲しつゝある所である。而して現下我國の向題たる国土計畫の如きも、同大帝の故智に教へらるゝものか尠くないと云はれて居る。

然るに此のフリードリッヒ大帝の政治思想は實は独逸國産のものにありおしてナチス七世紀の頃、宣教師が支那に遊び、明國の儒教殊に孟子の所謂「民を貴しとなす、社稷之に次ぐ、君を輕しとなす」と云ふやうな思想を持帰り、其れを獨逸の哲學者ライプニッツが採用して彼れ一流の政治哲學を作り上げ、其れを同國の學者らオルフが繼承し、其れをフリードリッヒ大帝に進めたる所、大帝はいたく其の思想に感銘し直ちに之を普魯西亞の政

治に利用したものであるとは我が政治学博士五未欣造氏ヲ具さに研究発表する所である。左ればこそ、日本近世の封建明君として其の名を馳はれたる羽前米沢藩主上杉鷹山の農政の如きも孟子の教ふる帝王学の影響を受けて頗るよくマリトドリツヒ大王の其流に酷似せる農政を施せりとして、其の巨細に互る比較を既に早く我が農学博士、法學博士高岡熊雄氏に委されて居る、實に極東日本の一小河、隅田川流れば、英吉利テムズ河に通ずるやうに、支那の白河や、黄河や、揚子江の水も亦何時の間にか、独逸北岸なる漢堡港頭の岸壁に波打つのである。斯うして君は民の心を以て心とすと云ふ国家統治原則の源泉は西政にあらずして、東洋に、吾々東洋にあらずして日本に、あることをゆめ／＼忘れてはならない殊に私が本篇に所題とする国土計画に關する根本理念及び、此の理念に基點を置いて大東洋経綸にまで発展昂揚したる幕末の經濟學者佐藤信淵の如きは、實に其の透徹せる觀察力と、緻密なる思考力を以て、中にも、其の深刻剴切なる自然科学の智識の上に立つ宇宙觀と、國家觀とを提げて、以て「国土経緯」の要諦を論じ承り論じ去つたのであって、彼の遠大なる論策を讀まば、現下國策の衝に當る官商諸君必す其の感激共鳴するもの多であらう。今日の日本に對して進統の羅針盤を示せるかに見ゆる百年前の大思想家佐藤信淵の熱火の如き論策に動かされぬ智識人は、絶対に缺い筈である、彼は国土經營の要則を

四ツに分け、一に創業、二に用物、三に富国、四に垂統とする。創業とはフリードリッヒ大王の實踐したる如く、ヒットラー總統の躬行しつゝある如く、又上杉鷹山が自ら範を示せる如く、治者日常の行状が聖人に近きまでに修養せられ、萬民の「欣戴」するに値するまでになることを云ふ、即ち眞の仁政善治は眞の仁君善候によつて始めて行はるゝと云ふのが信淵の創業である。此の創業が昭和現代に先づ行はれなければ、即ち上層階級者の反省自肅が先行しなれば、国土計画と云ふやうな大事業は行はれ得るものでないことを信淵は暗示して居るのである。用物とは今日云ふ所の農業増産計画と工業生産力補充のこととであり、富国とは斯く創業して修養り成りたる一國の明君が其の身を以て最善良の民政を施して国家を富強にすることである。信淵が志す富強は一藩財政の富強でもなければ、下百姓町人の致富でもない、彼が志す富強は實に一君万民の上に立つ國家全体の富強である。最後の垂統とは坂本塞源的なる行政改革である、徳川幕府の治下でありながら、彼は幕府に代るべき三台文府と云ふ新政府を樹立すると共に、日本全國を二府十三省に区劃せよと叫んで居るのである。陋巷蠶居の一処士たる彼が信淵が其の腦中に画きたる行政改革意見は現下日本中央政府の省庁廃合にも、局課整理にも多くの応用性があつて、参考とすべきものが少くない程、近代的色彩を濃厚に帯びて居る。而して更に驚くべきは、彼は商

業国管と農工業生産品の買上げ専売制度と、商品配給機構としての切符（信牌）制度の様
用をカ説すると共に、農村計画に於ては海辺荒燥地を拓きて新田を得ると共に、山向未開
の地に独立理想農場を建設し、又城下町住居の人口を減じて、農村に散布せよとまで叫ん
で居るのである。更に又驚くべきは、斯くして「国土経緯」の実績が挙げたならば、其の
富國強兵の實力を提げて滿洲を攻略し、渤海を襲ふて北京を陥落せしめ、清帝を陝西省に
蒙塵せしめよと呼号するかと思へば、天保十一年に英國が阿片戦争に事よせ、中南支を攻
め落して、同地亦一帯に其の勢力を扶植したるは残念、宜しく我が実力により彼を支那よ
駆逐して、不埒なる友邦支那を助けて、其の独立を保障し、東國日本の西屏とせよと喝破
するあたり、時は天保の年代でありながら、如何にも百年後の今日を指示して感惟し、激
勵してゐたかのやうに受け取らるゝのである。

繰り返して云ふ、他山の石を政羅巴や亞米利加に求むるのもよい、左礼とも、我が見出
さんとする國家哲学や國政指針の法則やらが、東洋から流れ出でたものならば、否な我が
脚下の日本に在るものならば、宜しく東洋に歸りて、日本に歸りて、其の水源地を汲むべ
きである。ヒットラー大統領の手による大独逸建設の工作を学ばはよいが、其の國家建設の
最高原則が東洋哲学者の創見に、否な日本近世の封建明主により夙に実施せられ、又は卓

坂俊敏の学者により極めて明白に論明せられてあるものならば、先づ日本國土の上へ蹴き、
て彼れやこれやを取り挙げて精査究明し、其の中から求めんとする金泉玉露を汲み出す工
夫が、大いに肝要ではあるまいか。

第四篇 人口

人口と國土計画

―都市と農村の人口配分―

エゴノミス ト

要	旨
<p>本論は過大都市の発展と人口の流入問題と、その人口給源たる農村との事情に於て觀察し、次に過大都市そのもの、もつ諸問題ありかを概観し、最後に結論的に、人口部門に於ける國土計画に於て構想すべき諸要素を摘録したものである。従つて本論からは、何等のオリゲンテイスム感得し得ないが、計画策定に諸因子を知る上に便利であると云へよう。但し具體的構想にあつては朝鮮的特質を考慮せねばならないことは云ふまでもない。</p>	

都市集中の傾向

人的資源から見た日本資本主義の発展の條件は、過少農制に基づく農村過剰人口に工業生産の労働力源泉に根拠をおく。不斷に拡大する工業生産のために要する労働人口は工業都市の背後地区に存する生産性の低い農業地帯にその供給を求めてゐる。このことは東京に対する東北、北陸地方、名古屋に対する中部山岳地帯、大阪に対する奈良、和歌山地方、北九州地帯に対する朝鮮、南九州地方の如きである。勿論、都市成立の理由がその他多くの自然的條件に制約されてゐることか嚴然たる事実であるが、封建的城下町および商業都市から近代的大都市への展開が重工業工場集中によつて條件づけられてゐることは、大都市が京都を例外として、京濱、阪神、中部、北九州の各工業地帯がその基幹工場を重工業に求め得ることにより明らかである。

〔第一表〕全国人口に対する市部人口の割合

全 國	市 部	市 部
總人口	市 数	市 部
千人	人	人口
	口	割合
大正九年	五五、八六三	八五、一〇、〇九八
	千人	千人
		一八・〇

大正十四年 五九、七三六 一〇一、一三、八九六 二一・六
 昭和五年 六四、四五〇 一〇九、一五、四四四 二四・〇
 “ 十年 六九、二五四 一二七、二二、六六六 三二・七
 “ 十四年 七二、八七五 一五一、二六、六七六 三三・六
 (備考) 昭和十四年は推計、他は国勢調査人口、帝国統計年鑑より

過大都市の発展

昭和十四年の都市人口が大正九年の二倍半に増大してゐることは前表により明らかである。これをさらに分析してゆくと都市への人口集中が一路過大都市へと蓄積されて来てゐることが明らかになる。

〔第二表〕 都市の発展

明治十一年	〔イ〕 都市数変化			
	地方都市	小都会	中都会	大都会
二六八	一万 一、二	二万 一、五	五万 一、十	十萬 一、百
七六				以上
一九				
一〇				

過大都市

大正二年	三三五	九七	二六	一一
〃 七年	三七八	一三二	三二	一四
〃 九年	三七四	一三六	五一	一四
〃 十四年	五九二	一四三	五一	一九
昭和五年	四二六	一五八	六五	五〇
〃 十年	四二六	一四六	五四	五〇

(備考) 帝國統計年鑑より

過大都市への人口偏重は表出した通りで、この傾向は年々激化され、人口百万を突破する都市は十年では四都市であるがこれに神戸市横濱市の二大都市が加はつた現況大都市が過大都市の範疇に入るとすればさらに人口の偏重は甚しくなる

(口) 人口階級別人口

總 数	昭和十年		大正九年	
	人口千中	人口千中	人口千中	人口千中
村	三七、五〇二	五四一・五	三七九二六	六七九・七
落	六九、二五四	一、〇〇〇・〇	五五、九九三	一、〇〇〇・〇

地方都市	六、二五四	九〇・三	五、〇七四	九〇・七
小都会	三、五五四	六二・〇	四、一〇二	七三・三
中都会	四、二九四	五三・二	二、一〇五	三七・六
大都会	六、四八九	九三・七	一、六二六	二九・一
過大都市	一一、〇二八	一五九・三	五、一二六	九一・六

過大都市と流入人口

中小都市の一般的な傾向はその増加が停滞の状態にあることであるが流入人口から見た場合には有府縣内の人口の出入に止まることが指摘し得る。人口の年齢構成から生産年齢にある階級の都市集中は全都市に共通の現象である。大都市、過大都市への流入人口が中小都市と異なる點は他府縣の生れのものか——勿論主として生産年齢にある——多いことである。このことは大大都市および北九州地帯がその隣接都市、町村を含めてそれ以外の産業地帯を構成してゐることによる。全国の人口密度を地方別にみるとき一方々口当り全国平均一八一、北海道三五八、東北一〇四八、関東四七四、北陸一六六、東山一二五、東海三二一、近畿四〇八、中国一七六、四国一七九、九州二二八、沖縄二四八人を示すのは九州が南北に区別

これであるために事情が判然としないが、前述の事情の證據である。
 六大都市への人口流入もこれに基く生産性は次表により明らかである。

【第三表】 全国および六大都市工場数並に工場生産額比率

昭和七年	全国に対する		工場生産額	
	工場数割合	割合	工場生産額	割合
昭和七年	三〇・八	三八・〇		
〃 八年	三四・三	三九・五		
〃 九年	三六・一	三九・五		
〃 十年	三七・一	三九・〇		
〃 十一年	三七・五	三九・二		
〃 十二年	三七・四	四一・一		

(備考) 日本都市年鑑による。

工場数の全国に対する

大都市の占むる割合よりもその生産額の占むる割合が大きいことは、六大都市における大工場集中を意味する。これに北九州地帯および六大都市隣接地帯の工業生産力を考慮に入

れるとさらに大きい数にならなことは今さら言を俟たぬことであらう。

これに対する労働人口の供給源たる農村の事情は

(一) 土地所有、農業経営規模、農業経済層との関係において農家労働の職業的完全移動
は永久離村は明らかになり一定の階級的に意味を有し、貧窮過程を辿る農家労働こそより農家
経済の完全な移動を促進せしめられる。

(二) この自らの経営において生産力の補充の至上命令さへ果し得る極限さ下層貧農の余
剩労働や浮遊労働のぞれこそ、時局重化学工業、労働体制への有力な労働給源をなすもの
で、時局の進行に従つてこれらの労働給源は急激なる移動が促進され、それがために
当然にも農村賃労働の不足、移動労働による労働力の空隙が結果しつゝある。

(三) 移動労働による労働力稀薄または労働空隙を恰も補填せんとするが如き働きを持つ
移動主流の発生に伴随して提起せられる逆流現象たる歸村や、横流現象たる入村にてその
労働力のカウアーせられんとする階層こそより上層農家のぞれであつて下層はこれにあづ
かるところ少き傾向を持つ。

「社会政策時報十五年四月号所載野尻重雄氏最近の労働移動の分析より」

過大都市の持つ問題

六大都市地帯および北九州工業地帯への人口集中は過大都市の発達を来たしを、この集中に伴ふ種々の弊害も少くない。

第一に挙げ得る問題は戦争勃発の場合に生じる防空の方法である。航空機による襲撃に對して、重工業および政治の中心地帯は最善の目標となるものであることは論を俟たぬ。現在の自然発生的な都市形態は防空施設の點では完全に零である。

次に無統制な生産および消費の集中に對して、資材および食料の配分機構の整備に際して生じた混乱、これらが生じた原因が輸送力、配給機構の内部に有する矛盾にあるものが多分に影響してゐるにしても、生産消費の計画性を著しく困難ならしめてゐる。

右に伴つて生ずる交通および輸送の人口集中地帯における混乱。

最後には、社会問題の性質を帯びる、保険、住宅、厚生施設、教育および風紀問題、従つて過大都市住民の体質の低下および都市人口の自然増加の停滞

以上の甚だ困難な問題が発生しつつあり、現在為政者が政治的な、社会的な諸施設により改善を講じつつあることは周知の通りである。そしてこの施設は主に都市計画法により

施行せられてゐる。

都市計画の施設中には單に計画に止まるもの、事業の執行を伴ふものがある、都市計画法の適用を受ける町村の規模は（一）人口増加顯著のもの（二）人口一万以上のもの（三）温泉地、海水浴場、史蹟地、遊覽地等を有するもの（四）港湾の修築工場、停車場の設置に伴ひ市街を構成せられんとするもの、となつてゐる。この規格に該当する町村は全国を通じて一千以上に上る、都市計画法の適用都市町村の数は大正十四年四月末の適用都市一四九、指定町村四三一、計指定市町村數五八〇に増加してゐる。

都市計画および都市事業として認められてゐるものは、地域（住居、商業、工業および未指定）住居専用地区、工業専用地区、高度地区、空地々区、防火地区、美觀地区、風致地区、風紀地区等の設定、道路、廣場、河川、港湾、公園、鉄道、軌道、運河、飛行場、上水道、下水道、土地区劃整理、運動場、一団地の住宅経営、市場、屠場、火葬場、塵介焼却地および防風、防火、防水、防砂または防潮等の施設である。

遷大都市における都市計画の方向は、人口稠密地帯より分散、周辺都市の計画が主である。この人口疎所に對して相伴つてとられてゐるのは大工場が分散である。しかし大工場の大都市よりの所め出しは必然的に隣接地帯への工場集中を生んでゐる。

支那事度の進行と生産力拡充に原因する軍需・重工業工場の新設により、新らるる大都市が發生せんとしつゝ、あることは注目し値する。これの具体的な例は、茨城縣多賀町、群馬縣太田町および附近、神奈川縣相模原、愛知縣拳母町、同勝川町、同豊川町、三重縣四日市市、兵庫縣広村、山口縣周南村等である。

國土計画遂行方策

國土計画の遂行の場合における人口の問題は当然工業立地および農業立地計画と相伴つて同時に遂行されねばならぬ問題であり、工業および農業等に要する人口の分布に基本點をもつ附隨的なものである。

政府発表の國土計画要綱によると人口に関する問題は人口分布計画として取り上げられ、人口の無制限な都市集中を防止し、都市と農村の人口配分を適正にし、國內および東亞國諸國への移民計画を実施するとある。

人口の無制限な都市集中防止の主眼目は前述の都市集中の傾向からさらに過大都市への人口蓄積の経過から及び、当然過大都市へ流入の防止が刻下の急務となる。

大都市の人口分散計画たる都市計画のこれまでに示したる成績に鑑みて、都市計画と地

方針画との密接なる liaison の必要性が、特に大都市周辺都市—住宅地帯田園化の向題の提起によつて認められねばならないと同時に、大都市を中心とする工業地帯の発展とにり及び合せて産業地区と行政区劃の予盾を解消することが必要となる。工場分散ならびに田園都市の建設における現在までの自由主義体制の下における絶對的な制約は、營利主義の計画に對する阻害である。この點、日滿支を一環とする國防國家体制の強化の線に沿つて是正されねばならない。

都村と農村の人口配分の適正の向題は、當然日本の農業生産の技術を根幹とする適正なる耕地面積と農業人口との割合の向題に主眼點が存する。

農村における適度の人口の向題は別として、現在の持つ農村人口が全人口の三四・四%であるに對し、農業および水産業の人口は全有職人口の半分に當らない數字であることは農村の人口が、その居住地における主要なる生産に従事して生計費を得られないことを意味する。

〔第四表〕 職業別人口表

(昭和五年國勢調査による)

職業別

人口

百分比

全有業者数	二九、六一九千人	一〇〇・〇
農業	一四、一四〇	四七・七
水産業	五四六	一・八
鉱業	二五一	〇・八
工業	五、六九九	一九・五
商業	四、四七八	一五・一
交通業	一、一〇七	三・七
公務自由業	二、〇四四	六・九
家事使用人	七八一	二・六
その他有業者	五七〇	一・九

農業人口の問題について、日滿一体の立場において、現在の内地農村戸数を半減して一戸当り耕作反別を倍加し、農村収入を増加することによつて健全なる民族性を保持する農民の離村防止を政府は企図してゐり、目下農林省および企畫院などを滿洲国に対する廿ヶ年百万戸移民計画を少、と倍加する方法が検討を進められてゐる。

以上の人口対策は、国土計画の策定目標たる人口の増、量的増徴を図り、都市、農村

の人口配分と職業的地域の適正なる分布を期すと、ふ方向線により規定せられる。

国土計画の具体化として個々の地方の計画は全國を北海道、東北、関東、京海、近畿、北陸、中國、四国、九州の九地方計画單位地域に分割せられてなされる。

この地方計画の人口問題と関係ある項目は聚落配置計画に見出される主なる目標は大都市疎南、定住地、文化および厚生施設である。勿論、その他の地方計画項目たる、経済圏計画、生活圈計画、産業分布計画、媒体計画および供給計画と相互関連性をもって一体として把握されるものである。

第五篇 雜

座談會

『國土計畫』の進展

小峰 本日は皆さん御多忙中のところを御出席下さいまして厚く御禮申上げます。生憎と雨になりまして……。では早速ながら、お話を進めて頂きたいと思ひます。橋井さんもお急ぎのやうでございますから……

このプランは素人の献立でございまして、また私も司会するといふ柄ではありませぬので、お互ひにも話合ひになられましたり。お訊きになられましたり、御自由にお話し願ひたいと思ひます。この頃、大分國土計畫といふことが喧しく言はれて居りますが、どうも言葉かけでは判って居るのですが、内容的にはいろいろ問題もあるやうでございまして。先程、橋井さんから智慧をつけられましたので、先づ小貫さんから全般的にお話を承り、どんなものを考へたらいい、かといふところから、一つ口火を切つて戴きたいと思ひます。

日本納な國土計畫

小貫 只今、小峰さんから国土計画が判
 ったやうで判らんといいお話ですが、私も実
 は判ったやうで判らるので、大いに研究し
 なければならんと思つて居ります。国土計画といふ
 言葉は、こゝ両三年盛んに云はれて来てあ
 るのですか、意味がはつきりしないといふ
 のは、国土計画といふものは、ドイツあた
 りでやつて居るラウムアルドマンク、あ、
 いかものだ、或はロシヤやつて居るゴス
 プラン見たいなものだと、色んなものが皆
 の頭の中にある。そこへもつて来て現在の
 日本の情勢です。都市向題、例へば大都市
 が膨脹して行く、生産力の拡充をしなければ
 ならんといふので、工場など、建つ
 、而もそれか多く都市に建てられて、無制

座談會——出席者——(イロハ順)	
商工省	橋井 眞
生産拡充課長	
企画院第一部	小貫 弘
書記官	
日本労働科学	吉岡 金市
研究所員	
中央大学教授	今野 源 八郎
東商大教授	佐藤 弘
秩父セメント	諸井 貫一
常務取締役	
(司会者) 本社 専務	小峰 柳 多

限に大きくなつて行く、従つて動力の問題、交通の問題が起つて来ます。或は人口の問題が起つて来て、何んとかしなげればならんといふ。また一面、工場がどこへ出ますので一番手近かな耕地が片つ端から潰される。そこで食糧の自給が叫ばれて居る折柄、そんなことをして、いかといふ、一つの疑向が起さる、いろいろの疑向が次々に起つて来るのですネ。それからもう一つは、日本が満洲事変、支那事変を経て所謂東亜の新秩序を造ることになると、この日滿支の向を一体どういふ形で結びつけて行くか、といふことに絡んで、色々の疑向が又山起つて来てゐる。そこへドイツあたりでやつて居るものが頭にあるから、結局、あ、いふ思想で片付けなければならんのがやないかといふことが皆の頭に響いて来たのですネ。ですから、国土計画に対して要求されるものは非常に汎汎なもので、これらの問題を全部取上げてやることは、恐しいほど大きな問題になつて来るのではないかと思ふのです。それで或る程度限界を設けて、整理して、その要求に應へて行く、これがまた我々の仕事ではないかと思つて居ります。

左様な訳で、国土計画といふ仕事は、新しい仕事なんでありませんが、また考へてみれば、これは古い政治でもあつたとも言へるのです。佐藤信淵先生の言つた如く、国土経緯と云ふことは、凡そ政治そのものであつたのです。今日国防国家体制の整備を圖るため

土計画をやると言つて居りますが、徳川時代にも、家康がいろいろの政治は結局、徳川幕府の政權を維持する意味の、国防国家建設の施策が行はれて居たのですネ。例へば藩の分け方ですネ。親藩をどう置くか。外様と譜代の分け方、或はまた久能山に廟所を定めたりも、幕府の一つの要害であり、例へば日光のお霊屋も、中禪寺湖といふ湖水があつて、徳川が最後に立籠る要害の土地であつたのでせう。矢張り一種の国土計画が行はれて居たのですネ。また少く言へば、その都市計画でも、東京の道つけ方を見ても、我々がうっかり歩いて居ると、逆の方へ行つてしまうことがありますネ。これはさうして、態々道を判りにくくしたのです。これも国防国家的国土計画の建設でありますか、これは霸道的の意味からやつたので、京都のごとく道路が整然として居るのは王道的の国土計画であります。さういふ點から考へると、この国土計画の思想は古いもので、統制的な政治に於ては不可分のものなんです。

だから、今日全てが統制的になると、第一藩に取扱はれる向題として起つて来たので、その意味に於て、国土計画は新しい向題でもあり、同時に古い向題でもあつて、我々は、必ずしもドイツから輸入したものではないといふ氣持ちで、ケチな翻譯的な考へを抜きにしてやつて居るのです。出発點は要するに八絃一字の計画ですネ。八絃一字の具体化と云

ふところに根本を置く東亜の経営計畫である、その方法を土地との関聯に於てやつて行く計畫である、といふところに出発して居るのです。そして、産業、交通、文化等の施設及び人口の分布分を国防國家建設の見地から配分して行かうといふ氣持ぢなのであります

満洲國土計畫の示唆

小峰 國土計畫が輸入ものでなく、日本本末のものであるといふお話は非常に愉快ですネ。今度は一つ佐藤さんに經濟地理の方面から

佐藤 私はこの夏、公用で満洲に行きましたか、丁度満洲國の企畫処に國土計畫に相當する綜合立地計畫といふのがあつて、そこで十日間招聘されて、經濟地理から見た國土計畫にういて、満洲國の國土計畫委員會その他で話を致しました。國土計畫をやることについて各共、大体、似たり寄つたりであると思ひますが、唯だロシアのやつて居るのは、寧ろ國家計畫ではないかと思はれます。ロシアのやつてゐるのを國土計畫といふならば生産手段の、或は文化機構の社会化の程度に應じたことが、我々の社會の國土計畫に於るので、ロシアのと我々のとは少しく趣きが違ふやうに思はれます。その意味で、資本主義社會に於いての國土計畫の根本向題は、どういふ觀點から國土計畫をやるかといふ點であ

ります。計画の規整と申しますか、枠と申しますか、さういつた觀點が抜けて居るやうに思はれます。その點、日本國內は凡ゆるものが殆ど出来上つて、行詰つた國家なので、寧ろ枠を決めて、その中に色々のものを造るといふよりは、整理するために枠をつくるといふ立場にあるのではないか、所が滿洲國は寧ろ國家が新しいので枠を造つて、その中に色々なものを入れるやうに計画して居るのではないか。それで日本と滿洲國とは、その実施方法が違つて居るやうに思はれるのです。然らば滿洲國で國土計画をやるには、どういふ觀點からやらなければならぬかといふと、私は四つの案を立て、見たのです。

その一つは凡ゆる滿洲國の企業を、第一に自給自足の立場に於いて考へてゐる。例へば、大豆ならば自給自足を越える生産物だが、小麥、或は高粱その他は自給自足の可能限取の立場に於いて考へる、さうして、寧ろ資本主義社会では従来かやうに個人なり、或は会社なりが物のストツクをもつて、それが財産になつて、そのために今日まで戦争が續いてゐる訳だが、統制經濟になると切符制度等が行はれて、個人や会社はストツクを持ち得ないので、これは國家なり社会なりが、当然ストツクを持たねばならぬのではないか、その意味に於て自給自足と同時に、國家なり社会がストツクを必ず持つことを第一の建前とし、第二は地域的産業の確立に照してゐる。これは、御承知の通り經濟的ドミナレンと言

ひますか、適地適業の産業になるから満洲國の大豆とか、日本の生糸とか、ブラジルのコーヒーとか、アルゼンチンの小麦とか、さう云った適地適業の産業は自給自足の範圍を越えて繁栄させる。満洲では大豆が農民の換金作物であると共に、また外貨獲得の手段になる。たとへば日滿支のブロックが出来ても、完全な自給自足経済は作り得ないので、若し完全な封鎖的自給自足経済が造られるならば、私は東亞のブロックは他のブロックから取残された不完全なものが出来ると思ふのです。その意味から、大豆といふ地域的産業は極端に発展させて外貨獲得の手段にする。次に第三の基準は軍需工業への重點形成と申しますか、將來の戦争は〇〇〇とである。その意味に於いて、日本の今日の軍需工業の大部分、ハーパーセント以上は皆満洲國に移設移動させなければならぬ。その際、満洲國では何処に工場を設けるか、これは非常な問題で、従つて専門家の議論を要しますが、兎に角さうぢやないか、さうぢやなければならぬので、今日満洲國で工業を興す場合、工業を移設する場合には、その工業が軍需工業であるかどうかを一応見究めて、軍需工業ならば満洲國に移す、若し軍需工業でないものならば自給自足の程度を範圍内に止めて置くといふやうにしたらどうか。それから、この軍需工業を持つて行く理由は、南洋を日本が共榮圏に入るならば、この東亞の共榮圏は日本の海軍と空軍が守られ十分護り得られる。陸軍は殆ど内地には要

らないと思ふから、全部、満洲へ持つて行つて然るべきで、その爲、この軍需工業の満洲國への重點形成が必要ではないかと思ひます。第四番目には狹義の單なる國防の見地から凡ゆる産業なり、交通なり、人口の問題等、例へば目下滿洲國の問題になつて居る哈大道路の計画を、十ヶ年向、三億圓の預算を企畫処に申請中で、滿洲國の国土計画の一つとして、これは必ずやらなければならんと云つて居ります。が、國防の見地から見ても當然やるべきだと思ふのです。

以上この四つの枠を一應決めて、その枠の中で整理建設して新しく国土計画を行ふ。さういふ枠を提唱したのですが、問題はさういふ國家的のものを決めるのに、枠を決め方を方が良いか悪いかといふ問題が次に起つて来るのです。特に日本人の國民性として、企画性とか、計画性とかを餘り好まないのです。この點も少し、こゝ、五年なり三年なりの枠を考へてもいゝのがやないか、個人生活では朝言つたことが夕方變つても構はないと思ひます。が、国家生活に於ては、少くも一ヶ年先からゐることは計画的にやつてもいゝと思ひます。また私はその四つの枠を――世界の客觀情勢の動きと共に動き得る釋力性がある――枠と考へて提唱したのであります。その時もなほ色々廣向が出て、それは單に滿洲國だけの國土計画であつて、日滿支の今後に於ける計画ではないぢやないかといふ意見も出まし

たが、日滿支の國土計畫の枠は、これは寧ろ日本に於て考へるべきであつて、一應滿洲としてはいふことをやるのはいふのではないかと、といふ案を立てた訳です。

なほ具体的に、やるものと致しましては、滿洲國は、御承知の通り圓い簡單な形の國です。この部屋ぐらゐの大きい模型を造つて、航空路から、電信から、道路網から、飛行場から、鞍山の製鋼所等を煙突で現し、一目で滿洲國が判るやうにして置いて、その部屋の周圍に風呂屋の衣類棚のやうな箱を拵へて、その中に例へば昭和製鋼所の生産はどのくらゐあるか、またその生産品は何処の場所へ持つて行くかといふやうなことが一目で判るやうにそれぐらゐ拵へて置く、單り滿洲國の情勢が一目で把握できる。「秘密の部屋」とでも云ふものを造ることを提議したのであります。これはドイツでもやつて居るの心、日本でもやる必要があると思ひます。その部屋には大臣級の主人人以外は絶対に入れない、その中に入れは日本の製鐵業の能力はどれ位あるか、例へば八幡の製鐵所はどのくらゐ能力を持つて居るかといふやうなことを、日本全体の産業なり、機構なりが直ちに判るやうにして置く。さういふやうなことを話したのであります。

ドイツの國土計畫

小峰 今野さん、ドイツではどんな行き方をしているのですか……

今野 どうも私はあまり勉強して参りませんでした。先程、小讀さんもお話になつた通り、確かに国土計画は日本の封建時代にもあり、資本主義諸國にもあります。唯ドイツの特徴は所謂ナチス的であり、国防技術的、及び国防経済的立場から云ふと、資本の營利性、資本主義的でない——国土計画であると思ひます。私がドイツで見て来たのは国土計画と道路との關係の問題であつて、これは後で申上げますが、この国土計画が念佛の御題目でなく、國民の生活と結びついて来て居る。たとへば大学の研究室の仕事は殆ど、国土計画のために大学があるのではないかと思ふほど、熱心にやつて居りました。御承知の通りドイツの大学は地方に分散して居りますから、例へば東北地方にある大学は、その地方の国土計画の研究責任を有し、^{ユルフォールンシヤンゲ} 国土研究の一志の計画を樹てるといふやうにして居るし、学生のセミナーを見ても、興味の中心が 農業立地、工業立地の問題もあるし、広い意味の国土計画になつて居るやうであります。殊に、自由主義的の国土計画とドイツのそれとが、如何に異らなければならぬかといふ點が強調されて居る。我々日本人の血の中に計画性があることは、封建時代の都市計画に於ても見られます。これは今日のそれよりも確かに進んで居たと思ひますか、今日、日本経済には計画性が少い。計画経済と

は何んぞやといふと、勿論、土地、労働、資本の計画経済化であります。その中で日本に於ては土地の計画経済化が一番遅れて居ると思ひます。

新東亞圏の計畫

小峰 橋井さん、日本ではどうですか……！

橋井 日本ではどういふことになりますか……寧ろ私は概念的の向題について、或は先刻の佐藤さんのお話と裏表であるかも知れませんが、根本の思想をもう少し突っ込んで又たいのです。一番初めに言はれた満洲の国土計画は、満洲の自給足経済を根本として考へる。その後、所謂東亞経済といふものを第二次的に考へて、最後に全体の纏めをつけたい、といふやうに拜聴致しました。私が考へ方では国土計画の根本は何んと言つても東亞経済、殊に日満並に当面日本でコントロールしやす、地域内の支那を、同一の必要とポイントから見ても、その産業なりその他の計画を、共通な頭を考へて行つたらどうかと思ふのです。即ちこの国土計画の棒を立て方を大きくして、その中で満洲は何を、日本はどういふやうにやるべきか、といふやうな順序で考へて行つたらいい、結果は同じ棒に纏め上げることにはなりますが、順が違ふのです。

私は行政屋なんぞ直ぐ具体的の結果を考へるんぞすが—— 畢り立て方に依つては随分違つて来るものもあるのではなかつかと思ひます。日本の計画経済は、全体的にはまだ初步の形であるが、生産拡充計画などは、相当突っ込んだものに違つてある。唯も現在の大きな問題又は、日本と満洲の關係、即ち産業、國防の分擔をどうつけて行くか、決め得ない點なので、寧ろさういふ點が、國土計画など大きな出発點でありながら、遅れて居るのではないかと思ふのです。大きくは日清支那の、日本國内ならば、内地と外地との産業の配分とか、さういふ點を先づ決めて行つたらどうかと思ふのです。勿論、それを扱ふには適地適業とかいふ事が考へられらるのですが、兎に角、いま一番大きな問題は極かつけ方で、謂はば大きな枠の方がどうも上手く行つて居らない點ではないかといふことでもあります。

それから第二段の機軸は、この日清に於ける産業、経済、政治等の發達の段階が同じでない。日本では産業、経済、政治、交通、總てが非常に複雑に發達を遂げて居るのに、滿洲は必ずしもさうでない、支那もまたも一つ違つてやうな状態にあることです。それを新しい形に統一してやり直すことか、時間的に許され、は非常にい、が、國際關係などを考へて又、必ずしもその餘裕は十分でない。とすると、現在のものを餘程尊重して、それを傷めない範囲で、徐々に改善しつゝ、活用して行く、それが我々に與へられた一つの條件で

ある。それを忘れて理想的な国土計画を樹てると、実行上 非常な困難が出て来やしないかと思ひます。具体的に云ふと、この産業はどちらでやるかといふ場合でも、今あるものを先づどう活用して行くかといふことを先決問題で、さういふ約束のあることは止むを得ないと思ふのです。さうした見地から日滿の大きな産業配分を考へて行くと、簡単に凡ゆる國防工業は滿洲で興して行くのだが、移してしまふのだと、一口に言ひ得るかどうかといふ點に私は大きな疑問を持つのです。

手近なところから入れば、何んと言つても失張り原料關係の産業で、滿洲は未開發の地域で種々の資源を包藏されて居る——而も、この原料資源が足りないといふことが、日本の、従来一番大きな弱點であつた。——とすると、滿洲の最初に持つべき計画は、先づそこに重點を置いたらどうか。そして、この基礎産業が相当發達した後でないと出来ないやうなもの、建設は後にして、差当りそれ等は現在日本にあるものを伸ばすといふ形で行き、將來、滿洲国の經濟が發達した後で、もう一つ進んだ国土計画に入るべきではないかといふ氣持ちを、私は持つて居るのです。その點か或は理想派と現實派との相違と云ふやうな風にも思ひますが……

理想と現實

小峰 佐藤さん、その理想と現實の問題については如何ですか……

佐藤 日滿支を全体に考へてやつて、そのあとで滿洲國の国土計畫をやつたらどうかといふ質問ですが、結局は同じことで、何時でも問題になるのは理想と現實の距離が遠いといふことで、如何にこれを縮めるかと之かですが、私のはやゝ理想のかも知れませんが、

小峰 然し理想の形を決めて置いて、それにアプローチするのはいゝかではありませんか……

小貫 私もさう思つて居ります。

小峰 諸井さん、如何ですか、實際家カ立場から今のお話について……

諸井 その前に一寸今野さんに伺ひたいことがあるのですが、今のドイツのラウムオルドプランクの問題ですネ、実は他でもこの説明を聴いたのでありますが、ドイツでは自由主義經濟的の考へでなく行かうといふ傾向が強いといふ、それはどの程度に考へられて居るのですか、私の聴いたところでは、畢り成るべく場所々々で生産と消費を場所的に形成して、こゝで造つたものを、遠くへ持つて行くやうなことをしないで、市場を決定するとか、或

は経済的地域といふものを考へるしか、そこまでやって居るといふ話ですが、果してその程度まで行つて居るのか、それを一つお伺ひしたいと思ひます。

今野 生産地と消費地とが結びついて居るといふ點は、相当進んで居るのではないかと思ひます。畢り成るべく生産地の近くに消費地を置いて、生産者の算盤が餘り外れないやうにする、そのためには、交通問題の解決が非常に大きな問題になる。ですから、日本がやうに工場を京濱面に集中してはいけない、地方に運つてると言つても、道路がなく、鉄道もない場所へ持つて行つても算盤が合はないので、ドイツでは工場を建てるには建るやうに——パランスが取れるやうにして、工場立地の條件を先づ整へてから、「さあ、こゝに工場を建てろ」と政府が命ずる。一例として、従来ラインの方に重工業が集中して居たが、近年マゲブルグから中部トインに工業地帯が出来て居ります。これもラインから中部ドイツを繋ぐ一つの交通路が出来たからで、これは十億馬ルクの金をかけて一昨年完成し、またそれを鉄道、自動車で連絡して居ります。また鉄、鉄鉱を中心として非常に安い運賃で運河の水運を利用して、これが精密機械の工場等に結びついて行く、さうしてマゲブルグから、近頃の消費地のベルリン・ハンブルグにはけるといふやうに——。日本よりも遙かに立地の準備をして、計画的に進めて居るのです。全然算盤の合はない東北の奥の

街道へ工場を建てると言つても、例へば江戸と東京の間に大きな交通の流れがなければ無理ではないか。その點で、私はドイツの国土計画の全体性、資本主義的でないが、而も眞盤を無視しない、極めて現実的なやり方があるのではないかと思ひます。

諸井 いや、我々もさういふ點を考へて行つたら、国土計画といふものが單なる理想や空想に終らないで、現実的にも非常に効果があるのではないかと思つて居ります。そんな意味で、商工省が工業を地方に分散する場合に、まあ極端な話が、田舎の田圃の真ん中や何かへポンと一つ工場を建て、も、それがどれだけの意味があるか——。そこで私は、さういふことを救済するため、地方に分散する場合には、適当な場所に、工業地帯を建設する方がいゝ、そして工業地帯の建設には、当然、今お話のあつたやうな、作る方と、使ふ方との結びつきを考へてやつて行く、といふやうに言つて居るべきであります。さうすると、單に地方に分散するといふだけではなく、初めて向題が国土計画にまで進んで行くのではないかと思ふのであります。

なほもう一つ加へたいことは、この国土計画については大体、今までは地面の上の拡がりといふ意味に考へられて居るのですが、外国のことはいざ知らず、日本の場合これは非常に困難な向題であります。單に地面の上の拡がりだけでなく、土地が持つて居る資源

の問題まで考へたいです。もう日本の内地の資源は出盡して居るのだ、それがために
は満洲、支那にも行き、また南方地域にも行かなければならぬといふ、——それは確
にさうでありますか、また一面、この日本の国土の中に、また、必ずしも資源が残つて
ないことはない。従来、鉱山を探して歩くとやうな商売人的の考へ方ではなく、もつと我
が科学的に、総合的に、計畫的にやれば、日本の土地の中には資源があるのではないか
と考へるのであります。

その根拠は申上げれば、沢山あります。今夕もこゝに入つて来て、理研の平井の廻転
の製鉄工場で、長野縣とか、静岡縣、或は千葉縣の畑の下にある原料などを使つて、製
に従事して居るといふお話をありました。又、畢りさういふ風に、資源といふものは、平
と思ふ静岡縣にも、千葉縣にも、長野縣にもまだ——あると思ひます。これは鐵の問題
すか、鉄以外にもさういふことが相當にありはしないか、是非この科学的な、計畫的
資源研究といふことについて、日本は考へべきではないかといふのが私の議論でありま
す。何処で考へべきかと云へば、私は国土計画といふものが、幸ひ今日、非常に注目を惹
て居るりで、これの一つの項目として採用され、是非常に面白いのではないかと考へて
るのであります。

小峰 いろ／＼な広い角度から伺ひましたか、そこで今の理想の枠と現実の枠との違ひは、ユニットをどういふところに決めるかといふことにならうと思ひますが、理想の枠をお話し下さるなり、現実の枠をお話し下さるなり、御自由に願ひます。

橋井 私の言つたことにもう一つ——先刻の語に附加へて戴きたいのですが、国防的に色々要求のある産業その他の建設計画は、その物と場合によつては、現在の便宜に則しないで、満洲でも、支那でも、南洋でも、日本に於ては、急激な、或る程度の、経済的條件を無視しての建設をしなければならぬものゝあることは勿論であります。この點は佐藤先生の御意見に一部分、私も同感です。

工業計畫の諸向題

小峰 各論に入る意味に於て、小貫さんに日本の工業計畫についてお話を願ひたいのですか、これも満支に於けて下さつても結構ですし、或は滿印までも——これは餘り言ふと叱られるかも知れませんが——

小貫 それでは私のいま考へて居ることを簡単に申しますと、この日本、満洲、支那を通ずる計畫、橋井さんのお話になつた意味の日滿支計畫は、東亞新秩序の建設として日本

が、關係各國と密接な連絡をとつた上で考へ、また出来た以上は、滿洲や支那に於ける計画が、當然これに準じて行はれなければならない。勿論、日本に於ける計画、假に中央計画と云ふか、さういふものも促進する。これは橋井さんの内、外地問題にもなりますが、私は、少くも日本について内、外地を一体として、一單位として行きたい。勿論、これは広汎な地域ですから、その内更に更に單位を分ける。従来は内地、朝鮮、臺灣でせうが、理想から言へば樺太、北海道、東北、或は九州、朝鮮、台湾、南洋群島と云ふ風に分けたいと思つて居ります。そして、産業、交通、文化の諸般の施設、それに人口、これらの配分計画を、土地との關係に於て、合理的に綜合的に構成して、国土の綜合的保全と利用と開発をやって行きたい。それが、迂遠な計画でなく、現実の矛盾を解く鍵になつて行くといふ意味の理想計画でありたい。さうなると範圍が非常に広くなるので迂遠な感じも起るのですが、現実に着手する場合には自ら重點があります。

今のところは結局、綜合的の交通計画、動力計画といふものとの有機的關聯に於て、産業と人口の配分計画を行ふことに重點を置いて行きたい。勿論、人口計画は、人口の配分と言つても、人間を引つ張つて行く訳ではないので、産業計画をやつて工業地帯をつくり、こゝに人口を吸引すると云ふ訳です。こゝで考へなければならんことは防空上のことで

、最近のロントンの爆撃を見て、これは非常に大きな要素をなすのではないかと思ひます。計画の内容については鉱産資源の開発、農、畜、林、水産業の配分、交通計画、動力計画、都市の配備計画、かういふことも全般的に取上げて行きたいと思ひます。ところでこの国土を飽くまで利用開発して行かうといふ思想ですネ。これかうつかりすると、国土を榨り取らうといふ思想になるので、これは飽くまでも国土を愛護保全して行くので、国土を愛するといふことを根本に置いて行きたいのです。勿論、それを策定する場合、日清支を通する計画ではあつても、要するに東亜の共栄圏を確保することが主眼ですから、海南島、蘭印、佛領印度支那等の資源をとるかといふことも、勿論計画に入つて居る款であります。大体さういふ気持ちで計画を進めて行きたいと思つて居ります。

自給自足の問題

小峰 佐藤さん、日本の産業計画について理想的なお考へがあると思ひますか……

佐藤 私は日本國內も失張り自給自足の建前を押し通して行きたい。が、問題は国土計画をやる必要はどこにあるのか、国土計画をやることか、国家の一般的能力をあげる上に於て必要なか、個人生活のレベルを上げるためにやるのか、その根本問題ですネ。私は飽

くまでもブロックに分けて自給自足経済を建前として、その上なほ地方——カストックを
持つやうにやったらどうかといふ考へを捨てないで居るのです、どうも自給自足経済を立
てると反対が出るのですか……

橋井 自給自足が国土計画の大きな眼目であることは全然疑向はない、唯だ地域の取り
方だと思ひます。自給自足は高度国防国家建設の基礎的條件で、これは誰も異議はないと
思ふのです。

佐藤 例へば東北地方の人々が五百万か、六百万か——その人々が、般に米をどのくら
ゐ食ふ、足袋を何足穿くといふことになれば、それの出来る範囲の工場を東北に移せばい
ゝので、さうして、東北地方の産業である米、樺桃などの地域的産業は極端に発展させて
、他の地方の足らんところに補つて行くやうにしたら、いゝのではないかと思ひます。

橋井 計画性のある新日本経済、東亜経済を創るのには、もう少し大きく地域を取つた
方がいゝのではないかと考へて居るのです。ところが少し意見が違ふのですネ。餘りに少な
な、封建的な自給自足を打破することが寧ろ必要ではないか、さういふ氣持がするの
です。

佐藤 北海道ブロック、本州ブ、ロツク、四国、九州、朝鮮、台湾々らるにしますか……

小貫 取り方は色々ありますネ。

橋井 私が内閣調査局に居りました時でしたから、第一次近衛内閣で総合経済会議といふものを、一度だけ開かれたことがあります。南洋からは南洋を代表する方、台湾からは加藤恭平さん、大陸代表の意味で鮎川さん、日本内地の大きな産業関係者、さういふ方々で総合會議をやつたのですが、その時は問題を一トからげにして適地適業主義で、日本を造り上げて行かうといふやうな考へ方が、強かつたのでした。これは新しい言葉で言へば、國防國家を経済的に造り上げて行く、それには地域の取り方は、飽くまでも大きな眼で見行かうと云ふ気持ちであつたのです。

佐藤 計画的な配給組織をつくつてやらねば、實際出来ないのではないかと思ひますネ、それに今日では各縣が皆ブロック主義をやつてゐますし――。

橋井 それが一番いかんと思ひます。

(笑声)

小貫 例のアウトタルミーといふ言葉は、結局統制主義の申し子で、國土計画が統制計画をある程ならば、アウトタルミーは、國土計画と宿命的に不可分の問題ではないでせうか。

東北の米は東北で使つてしまふといふと非常に間違ふので、少くとも東北人の喰ふ米は

全部、東北の米でなければならぬと言つていゝのでは無いでせうネー……

小峰 それはさうかも知れませぬネ、

小貫 ——東北人は自分の喰ふ米さへ作ればいゝといふのでなく、少くとも東北人は東北の米を喰ふと云ふのは、一種のアウトタルネーだと言へる。場合によつては一つの村でも、村の人が喰ふ以上に米が取れるならば、村の人の喰ふ米はその村の米でなければならぬいゝ——これも矢張り國土計画の重要な要素だと思ひます。

諸井 その話が進むと、今のドイツの國防國家のやうに、敵が入つて来て何處を切られとも、あとの残りの部分で生きて行かれるやうな、組織を造つて行くといふ考へになるのではありませんか……

今野 それには生産力が、地方で自給自足し得るだけのものを備へなければならぬ。それにはストックの問題が大事だと思ひます。ドイツはこの四五年間ストックを貯めるために、凡ゆる場所を利用して居りました、何處を切られても百足のやうに生きて居られるやうに——。同時にアメリカのやうに広い地域を対象とする、適地適業の良い點を取る政策もしなければならぬこの両方か調和して行かなければならぬと思ひます。即ち日本では、従来ストックといふ問題について國家が直接計画性を持たなかつたが、自由資本主義

の國家だつたから止むを得ないとして—— 將來は、個人的計画經濟を國家が取つて代るのだから——。例へば東北に〇〇〇が侵入しても、他の地域が餘り重大な影響を受けないだけの準備とストックを貯へ、交通も整備しなければならぬと思ひます。私ゝ郷里が東北にすぎ、東北と全國との連絡路を多元的にすることが必要で、機械部隊の輸送路の建設は必要であり、またドイツでは、五万以上の人口の都會には飛行場があります、さういふ方面も必要と思ひます。

佐藤 吉岡さん、労働力の話を企画院で伺ひましたが、あれを一つ承けたいと思ひます。

吉岡 あれは農業と工業の跛行的發展を是正して、工業の水準まで農業の水準を引上げるところに問題がある、結局国土計画は此の問題を本当に解決しないことには、生産力補充は勿論何も何も巧く行かぬのではないかと思ひます、戦時に於ては物の不足もあるが労働力が一番不足して来る。さうなつて来ると、結局、食糧を自給し乍ら、他方には軍需生産の労働力を供給しなければならぬ。この二つを同時に充すには、日本の非常に遅れた農業の状態では駄目で、それを工業の水準まで上げると云ふこと、そこに大切な問題があると思ひます。産業の立地や、交通の問題を考へる場合でも、国内の資源を最もよく活用し、消費物資に仕上げるまでの

能率を考へることは、非常に大事だと思ひます。畢竟農業労働力が労働技術、量、質に於て、工業労働力との差が本當に少くならなければならぬ。それを何んとか出来るやうなプランを樹てることか一番大切でず。

立地計畫の條件

小峰 橋井さん、貴君は産業計畫の元締をされて居るのですが、どういふお考をお持ちか、資金調整の問題等に關聯して一つ――――

橋井 今の状態を見ると、日本の幾つかの限られた地域に、人口も産業も文化も、従つて労働力も資材も、また交通も集中し過ぎて居り、これではどうかと思ふのです。勿論これは、色々な自然的條件に基いて、かういふ発達をして来たこと、は思ひますが、今後は國土に對する色々なものゝ分散、かの分散と云ふ見地から見直して、かう云ふ方向に發展を向けて行くべきかを決めて行かなければなりぬ、而もこれは非常にさし迫つた必要ではないかと思ひます。さつき小貫さんが仰しやつたことですが、東京附近とか愛知近辺とか、大阪近とか、北九州の或る部分とか、これらは經濟的地域としてはまだ発達すべき點が多からうと思ひます。然しそれは成るべく、今まで出来たものを完成するといふことを主眼に置い

て、その辺に止めて置く。そして、今後の主要な新建設は、寧ろ新しい地域に建て、行かなければならぬのではないかと思ふのです。当然、先刻諸井先生も仰しやつた資源とか、労力の関係とか、交通の関係とか、もつと大きな国防上の種々の要求とか、さういふものを根據にして新しい地域を決め、そこに、計画的に今後の新しい國土建設をやつて行く。従つて産業の今後の發展計画の實行をする場合に、例へば資金調整法の運用等もその一部と思ひますが、これら、國土計画上の要求をはつきり念頭に置いて、取入れて行かなければならぬと思ひます。これに關聯して、私の特に痛感して居ることは、強い政治の樹立と、また、計画の確定といふことです。強い政治力がないと、一定の地域を決めて、それを中心に港灣の施設とか、鉄道の敷設とか、道路の敷設とか、水路の南通といふやうな新しい施設をやる上に於て困難が出来ます。色々の運動とか、要求とか、抵抗とか、さういふものが多いのであるなり、それに打ち勝たない限り、實行上の困難が伴ふのです。

また一方、實行計画についても、従来は土地の觀念が割合に重要な要素にならずに、最後の量的要求のものが強かつた。そこで一方に強い行政力といふか、國家の意志を實現する力を備へる、半面に明確な計画を造り上げること、この二つが根本の要件ではないかと思ひます。扱つてそれが出来上つたら、誰がやつても当然その計画に基いてきちんと的確にや

って行くこと、そして何人も喜んでそれに従って行くことだけが残るのみです。

小峰 工場敷地を決める場合でも今までは、土地を決めてから申請して居るのですが、今後は大体の国土計画を発表して置いて、工場はこの辺に持つて行かねばならぬかを豫め決めてをかなくは不可なりと思ひます。

橋井 どこを両々相俟つてやらなければならんと思ひます。單に、この土地は一杯だからと言つて建ち出すのみでは、合理的な国土建設は出来ないので、的確な計画がまだ確立して居ないことに、現在国土計画実行上の大きな懸念があるのではないかと、思ひます。

佐藤 工場地方分散には、自給自足とか、何らかの目標が必要ではないか、それがない場合は、この地方に分散させる、と言つても分散させるやうなないので、

橋井 ですから具体的に計画を樹てる場合には、幾つか目的地を考へて、さういふ見当を置いて、すネ。

佐藤 その場合には、切符制度にしないとやりやうがないですネ。

橋井 さういふ権利は強く持たなければならぬと思ひます。

佐藤 さういふ意味の、枠が必要ではないかと思ひます。

橋井 然し、たゞその上に、もう一つ大きな枠も捨てたくないいふ事です。

吉岡 佐藤さん、先程の資本主義社会に於ける國土計画といふことですが、さういふこと、自給自足とはどういふ理論的の關係を持つのでせうか。——さういふことが可能なかが、畢竟実現性有りや無しや……

佐藤 資本主義社会では、完全な自給自足は出来ない。唯だよりよく自給自足的經濟をやるといふことに過ぎないのです。然し、それほどの程度のものか判りません、勿論、完全な自給自足經濟は、ロシアの如き國でも出来ないのです。

計畫の運営

小峰 諸井先生、一つ……

諸井 唯だ日本の内地だけの國土計画なり、決まれば案外に上手く行くと思ひますが、問題は直ぐ内地と外地の關係、更に日本と滿洲國との關係があつて我々の今までの經驗からいふと非常に面倒な問題です。例へば重要産業統制法といふ法律があつて、我々もその御厄介になつて居る訳ですが、これが初めは内地だけであつた。それが今までは朝鮮にも施行されて居るが、台湾にはまだ施行されてゐない。滿洲國では滿洲國の産業統制法といふものを持って居るのです。それから、朝鮮と雖も條文の上で内地とは同じ法律が実施

されるが、その運用は朝鮮總督がやり、日本内地では主務官庁として商工省がやって居るのです。即ち法律は一つになつたが、運用といふことになる、内地は商工大臣、朝鮮は朝鮮總督といふことになるのです。

勿論、その商の連絡には色々な方法を講ぜられて、餘程いゝのであります。現在でも、例へば公定価格を決めるとか、新しい工場を許可するとかの問題になると、同じ法律が施行されて居る内地と朝鮮に於てすら、その運用には相当違ひがある。さういふ状態ですから、國土計画をやる場合、我々は先づ第一に、この問題に打つかるのではないかと思ふのです。一體、國土計画といふものは総合的であり、統一物であるところに値打ちがあるのだから、扱て実行に當つて、内地は内地、朝鮮は朝鮮、台湾は台湾、滿洲は滿洲、況や支那もといふことになる、色々面倒な問題を生ずるので、計画は如何に良くとも、それを実施する場合に、どうして統一を保持して行くかといふことが、非常に大切だと思ふのです。この點も實地に於て大いにお考へ願ひたいのです。

小峰 橋井さんの強い政治です。そのところか……

橋井 實際、行政をやつて居つてほと／＼困ることがあるので、今後とんま風にやるかの問題もあります。私も諸井さんの色々な痛感しておられること、同感です。

佐藤 小貫さん、日本の国土計画は具体的にどういふことを令やつて居るのですか……
小貫 具体的問題には入って居りません。先程申上げました、あの大きさばは解釋あの程度で、末月あたりから、本格的研究所に入らうと思つて居りますので……

佐藤 企畫院の中にあるのですか。

小貫 企畫院の第一節として……。

橋井 組織を決めて戴くと同時に直ぐに立案に入つて戴くことになると有難いのです。計画が樹ては、あとの実行は割合に難ではないかと思ひます。それで大いに小貫さんに頼つてゐるわけです。

工業の地方化と農業

小峰 今度は労働力の問題に入りますが 吉岡さん……

吉岡 工業の地方化といふ問題、それと農業の両断をどうするといふことかもつと進んで、それから労働力の問題に入つたらいい、のではないでせうか。そのところが先づはつきりしてから……

小峰 それでは 工業の地方化といふ問題を決めて戴いてからにしませう。

橋井 それは、諸井先生が専向家でいらっしやるのです。

諸井 工業地方化の問題といふと？

小峰 工業の地方化の方向と言ひますか、日本の工業の地方化がどの程度に進んで居るかといふやうな……

佐藤 大河内さんの農村の工業化がやアないのでですか……

(橋井氏辭去)

小峰 都市で工業が拡がりますと、否応なしに地方に出て行くのですが……

諸井 それは防空といふ一點からも、やらねばならぬ問題ではないでせうか。丁度二年からの前、イギリスで、今の産業人口の再分布に關する委員会が出ましたのです。ローヤル・コンミッションで出来たのですから、相當な重要性を置いてやったのでせうが、その時に——私はロンドン・タイムスか何かで見たのですか——國民の保健といふこと、もう一つストラテジカルといふ言葉が使つてあつた。矢張り空襲といふことを考へて居たのでせう。——数字は忘れましたが、工場の大部分がロンドン及び、その近所に集まつて居るので、これをどうしても分散しなければならぬといふことが書いてあつた。最近ドイツに空襲されて居るので、その記事を思ひ出すのですが、近頃そのレポートが日本にも入つて来て居

るやうです。勿論、色々研究して居ったでせうが、果してどれだけの対策をやつたか、その點、大いに聴きたいのです。日本でも、この一點からでも、相当眞剣に考へねばならぬ時代になつて居るのではないでせうか。

小峰 それに都會では土地も、勞力もなくなり、どうしても工業は地方に出なければならぬでせうし、農村の技術を工業技術の水準まで引上げるといふか。合せて農村の社会政策的の意味に於ても、工業を地方に分散しなければならぬと思ひますので、もう工業の地方分散は不可避、必然の結果と思ひます。

吉岡 今のお話と、私どもの調査とは喰ひ違ふやうな事実が多いのです。工業が地方に分散しつゝあることは、どうも私共の見るところでは、日本の工業土地は低賃銀を追ふの如く、といふと誤弊があります。——追ふて居ることが非常に多いやうに思ふのです。コストの問題や、トランスポートの問題や、技術の問題もあります。前記話ると低賃銀を追ふて居るのではないかと思ふのです。

そこで、一寸これは辛辣な言ひ方になりますが、農村では一体、工業が地方に分散して来ることかどういふ結果を齎して居るかといふと、私共の知り得られる範圍では、一面、非常にプラスに見えて居て実は内容に立ち至るとマイナスになることが多いやうです。具体

的に言ふと農業をやりながら工業に通ふ、畢り農家の子弟なり戸主が通つてゐる農家の内
容を具に頼むると農業では喰へない、親爺さんが工場に行つても喰へないといふので、そ
れで無理な労働をやつて居るのです。それからフランスになつて居るかといふと、生活が豊か
になつたやうに見えても、従来マイナス少し埋められるといふ程度で、それ以上に餘り
出て居ないのです、そこで、農繁期になつても農業をやりながら、一方で工場に通つて居
る。そうすると三交替の場合、家に帰つても農業をし、工場に行つて労働をやるのです。
これでは休息時間は僅かしかないのこ、工場に行つて五稼な仕事は出来ないと思ひます。ま
た農業の方もお粗末になつて居るのです。今度、軍隊でも工場労働者でも農繁期には帰郷
させるやうになりましたか。これには色々な意味があるが、そのこと自身担当主目すへ感
たと思ひます。結局、これは農業水準が低いこと、これに非常に大きな制約を受けて居る
といふ——こゝに大きな問題があると思ひます。

小峰 然し半分職工で、半分農業をやつて居るといふのはどの辺ですか。

吉岡 各地にさういふものが多く現はれてをります。各地に随分、農業と工業との両極
類が殖えて来てをります。それでは幾何向上はありません。ラヂオを引くとか、新聞を
とるとか、さういふ文化的には進んだが、土地の利用の仕方も粗濬になり、農業生産の減

退が起つて居るのです。

小峰 さうですか、それは非常に重大な問題だと思ひますネ。

小貫 吉岡さんにお伺ひ致しますが、先程の國防經濟ですネ。ストックを確保するといふ、特に戦時に於て一番大事なストックは労働力だと思ひますが、従来は、慮げられた農村が、これを一番持つて居た訳ですか、これは将来どう考へたらいいのでせう。

吉岡 企画院の鶴島さんから、労働力コストツクを何処に置いたらいいかと、かお話が出ましたネ、日本には労働力が農村に沢山あって、現にその調達が出来る。それに農村から出る労働力は軍人としても、工場労働者としてもいゝから、労働力コストツクは農村に置かなければならんといふが、今支那的意見のやうですネ、然しそれには疑問があるのです、第一に農業、農村に沢山の人口が保有されて居ることか、農業技術の発展を阻止して居るので、この技術の発展のないところへ、戦争で沢山の労働力を動員するとしたらどうなるか。日本は食糧を生産しなくともいゝのより宜しいが、今日では米の向題が戦争の一切を決定するかも知れないといふほどであり、現にその向題が起つて居ます。抑々食糧の自給安全感が向違つて居た、非常に薄弱な基礎の上に立つての食糧自給策であつたので、何百万の動員があつたら直ぐ食糧不足向題が起つて来るのです。

次に、農村に多く労働力が保有されてゐると、その生活がミセラブルな状態におかれるから、体位の低下といふ問題も起つて来て、メンタルテストをやつても非常に成績が悪い能力が極めて低いのです。

これに対して都市へ工場労働者として出る傾向が悪くなると言はれるが、これは工場の福利施設とか、都市の文化施設が出来て、所謂不良化されな、施設、教育が出来れば、都会だつて悪くはならんと思ひます。即ち、農村だからと言つて、いゝところではないのです、文化的に実に貧困で——経済的に貧困であるといふことは、文化的にも貧困であるといふことです。よく、農村又は「いゝ労働力」であると言はれますが、それは非常に柔順でもあり、黙々として働きはするが、極めて能率が低く、その訓練陶冶には餘程の期間が必要ませう。従つて、短期間で優秀技術を獲得する場合には一寸、間に合はない、さういふ意味で農村は優秀なるプールではあり得ないと思ひます。これは敢て異を唱へるのではない、現地で色々見て、どうもさういふ気がするので。この點は餘程、重大な問題ではないかと思ひます。

佐藤　それを改良するためには、農村機構の改革をやり、また教育も新にやらなければならぬのですネ、

吉岡 さうです、農村の文化水準を引上げる訳です、現在農業技術の水準と工業技術の水準が餘り離れ過ぎてゐると云ふところに向題々あるのです、いま農業が非常に公的の性質を——私的經營をせざるを得ないか————帯りて来て居る、この際生産組織の均衡化を図り、農業技術の水準を上げれば米の生産を一倍增すくらゐの何々でもないので、これは所謂農業機構の改革とか、農業の再編成等とかはされてゐる問題を、解決すれば出来ることだと思ひます、現在の状態では、農業労働力がどん／＼工業に取りれて行く後を追つて、その整備に努めなから、なほ追つ、かな／＼状況ですが、この點がゆゑ、これを十分カバーし得るだけの生産技術の向上を図らなければならぬので、それには機械化や共同作業等も必要だし、また根本的には土地問題の解決が必要で、さうなれば、もづと労力を工業の方へ取られても構はない、寧ろどん／＼工業の方へ出してもなほ両者並立し得るやうになると思ひます、結局、農業技術の水準を上げることが、——我西引水のやうですが、最も工業の要求に應へることになるので、この點が非常に大切ではないかと思ひます。

それから滿洲移民にしても、唯だ單に内地の低級な技術水準の農業を滿洲に延長したところ、彼地は一層季節の差も劇しく、短期間に多くの仕事をしなければならぬので、二

十町歩賣つても作れないで、矢張り吾方に依存しなければ農業が成り立たない。結果、内地の農業問題も満洲の農業問題も同じで、こゝちの問題を向うに押しやったところで、少しも解決出来ないのです。

工業地帯の設置

小峰 吾方の角度から国土計画を見ますと、大体、工業といふものゝ計画を主として見る事になりますか、逆に工業分散の計画が吾方配置の計画になるといふやうな點から、御意見はございませんでせうか……

諸井 私は地方分散といふ問題は、唯だ無暗に分散すればいゝといふのでなく、適当な工業地帯を造つて、そこに或る程度の集団を造つて分散し、その工業地帯は動女並に交通との聯関に於てやつてはと思ふ。これは分散と同時に、日本の工業をそれによつて再編成するといふ目的も含まれるのですネ。今までの日本の工業は、吾方は何時でも有り餘りて、あつてと言ふ前も下に成り立つて居たのです。ところが今日は労働状態がまるで疲つて来たのだから、これからの日本の工業は、今までのやうに労働力を餘り当てにするやり方ではいかんと思ひます。

これは私共前から言つて居るのですが、日本のセメント工場は数も多く、而も大体、海岸に多いのです。この海岸にある工場で、大体五千トン級の、普通の貨物船が横づけになるだけの設備のある工場は数多くはありません。そこで工場から船につけて行つて本船に荷役して、それを本船が持つて行く。従つて人間の数とか、セメントにかゝる運送賃は相当大きな金額です、これなど、港湾の設備を改良し、本船を横づけにして、機械的に荷役をすれば、相当多くの人向を整理することが出来るのです。従つて工場地帯を造る場合、港湾、交通の問題も入れて考へる必要がある。勿論、一つ一つの工場を持つといふことは不経済だから、共同で立派な港湾設備を造つて、人向を使はないやうに考へる。また既設の工場を俄かに造り替へることは却々困難だから、或る工場地帯に工場を持つて行き、交通とか動力の束係を出来るだけ総合的に計画して、どんな機会に日本の工業を建て直す、労働の點から言つても、同様に建て直すなければ嘘です。

その他、今までも工業は大体、日本の内地向と後は困難の多い支那、南洋方面への輸出を考へて出来たのですが、これからの工業は少くとも東亜共栄圏ぐらゐは、自家の販路と考へていゝ時代になつたのだから――。我々が工業する場合のエニツトもまるで替へていゝ。その意味で、工業の地方化にも、新しく日本の工業を再編成することをも、当然併せ

て考へるべきだと思ふのです。従つて労力の問題も、餘には農村に於て低廉なる労働力を利用することはあるかも知れないが、工業分散の上からは既に力一項目であつて、地方化といふ問題は、もう少し廣い立場から考へていゝのではないかと思ふのです。

吉岡 日本が過剰労働力を前提としてやつて来たことは、工業ばかりでなく、農業もまたさうだつたのですネ。だから今では逆も前に合はないので、そこで今では、如何に少い労力で、より多くの生産が出来るかを考へなければならぬことになつた。適正規模もその一つの現はれです。これは、いま旺んに言はれて居る言葉で、土地に対する人口が多過ぎ、そこから凡ゆる不幸が起るの——、現在の平均の倍の経営面積を持つては、日本の農家の生活は安定する、だから、その程度まで減らせばいゝ、それには満洲に行けば宜しいといふのですが、技術をどうするか、労働力はどうなるか、といふことは一向考へないので、従つて技術水準を如何にして上げるか、資材をどう供給するかといふ考慮がない。そこで分村しても母村の生産技術が、特に労働技術が向上發展せず、従来通りの農業生産しか出来ず、従つて豫期したやうな農業の發展がないのです。

佐藤 その地方農村の工業を、高度の工業でなく、低度の簡單なところから適用したらいふのでせう。

吉岡 簡單なもの、適用と云ふのはどんなものをせうかネ――

小峰 いや、農業技術と平時させるといふことから言へば、それに進歩するのになく、順次に高いものを持って行くやうにすればいいですね。

吉岡 それですネ。

ドイツの労働組織

小峰 大分いろいろのお話を伺ひましたが、産業と交通の問題を一つ今野さんお話し下さいませんか――

今野 いま労働のお話を承りましたが、割合に簡単なことで実行して戴きたいのは労働の組織化、労働力の計画的な配置政策であらうと思ひます。我國には労働の全国的組織化がない。また労働力を、或る一定の生産力拡充に必要な方へ配置することが必要ですが、それには小学校を出た時からどういふ職業につくかといふ就職の指導を国防経済的の立場からの、或は工業の将来の拡充から見ても、労働の組織化が大事であると思ひます。ドイツでは例の労働戦線が形成されて居て、殆ど四千万人。これは頭腦労働者、肉体労働者など全部入って居ります。それからヒットラー、ユーゲント、これは青年運動ですが、同時

に青年の労働力の組織化であり、年齢別に組織され、隣組にもある。日本の隣組は精神總動員に行はれて居ります。が、あれも山の手の手なからでは女中の隣組であります。(笑聲)ドイツに於ては、少年、青年と年齢別に組織され、それら精神總動員、国防に必要な組織化となつてゐると同時に、純経済的な意味に於ての労働力の組織化となつて居る、これを私達も何かの形で取入れたいと思ひます。

日本の労働政策に基礎的な労働力の配置政策がないこと、また量と質のお話がありました。たが、その意味は學生層の労働をもつと、國防的の立場から教育出来ないかと、我々學校に居る者として始終考へて居ります。直ぐ戦線に起たねばならない學校教練が、日清戦争當時から四十年、餘り變つてゐないこと、或は青年団の訓練も依然として機械的として行はれて居ない。或は農村出の兵隊が身体はいゝが、技術的に遅れて居ると、ふことは、青年の訓練に機械化のなゝことが大きな原因ではないか。それからスポーツもドイツの如く、國防スポーツとして自動車、グライダー、射撃といふやうなものな、小學校の時分から日本でも行はれたなら、國防から見た労働人口の問題が、或る程度まで解決されると思ひます。

交通計畫

それから交通計畫ですが、東亜の共栄圏も、純経済的國防経済的に見た共栄圏でなければならぬ。畢竟地域の安全性が保たれなければ共栄圏にならないから、同時に國防圏をなし、政治的協同体であり、また文化協同体となるものでなければならぬ。思ひます、東亜共栄圏は宣言によつては出来ないのであつて、その実行方法が最も大事かと思ひます。それには先づ交通が大事な役割を持つので、地域が拡大すればするほど、これが先決問題である。例へば、アメリカの発達も、交通の発達が前提ではなかつたか？、その意味で東亜、南領印度を含めた廣域経済圏のために、初めに交通政策を実現しなければならぬ。それにはどういふ交通体系が設定されなければぬかといふと、凡そ根本的の交通体系の設定には大量の交通、それから安全、規則的、低廉、迅速の交通を可能ならしめる体系が必要だと思ひます。その上に、国防経済的考慮も拂はれなければならぬ。

かういふ交通政策は現在の凡ゆる交通機内（内）に互るので、鉄道、運河、海運、空輸の全部をやらなければならぬ、殊に日本では自動車道路の建設です、謂はゞ多元的の交通政策を取る必要がある。

従来、日本の交通といふと船と鉄道だけで、他は文明國として非常に遅れて居る。殊に道路は統計で見ると、延長九十万メートルで、大体、世界の一、二を争ふと言はれま
すか、自動車交通の可能な三、四メートルの幅員を持った道路は、実に全道路の三割に至
らないのであります。そこで、如何に工場が方々に分散的に発達しても、それを連絡し、
そこに物を運ぶ自動車道路がこの状態では、國土計畫の前提すらまだ造られてないのでは
ないか？、この状態は滿洲、支那に於いて、なほ更らである。滿洲には道路計畫が定められて
居りますが――。要するに所謂アジア的の道路を無くさなければならぬと思ひます。船舶
にしても、若しも政府が屢々云ふやうに西南太平洋及び日本海を池にしよと云ふならば
、もつと大きな造船計画も樹てなければならぬ。汎亞米米カ路が南米からマニラの
方まで来て居るのに、日本の空輸の發達は御存じの程度です。そこで東亞共榮圈の實質的
實現條件は、交通條件に關する限り、世界の共榮ブロック經濟の設立の中で、一番立ち遅
れになつては居ないかと案せられる次第です。

先程、ストックの話が出ましたが、交通にも輸送能力のストックが大事であつて、殊に
戦時には、五割や六割の輸送能力の増すことは明かで、それに空襲等を食けると輸送能力
は約五割減るのです。この點で従来日本の交通政策には、戦時經濟的の考慮が果して拂

はれて居るか？交通のストックを持つといふことは、交通機関、燃料、従業員がガソリンを持つといふことです。この點も日本の國民自身が機械化されて居ない。即ち自動車を探縦できる者が数十万しかないのに、ドイツの青年は、殊に全部が飛行機を操縦する教育をされて居ります。かう言つたし、ガソリンを將來、我々は造らなければならぬと思ひます。

次にこの東亞共榮圈の實現のために、具体的にどういふ交通政策をやるべきかですが、例へば樺太から太平洋岸を通つて下向に抜け、朝鮮から濟洲に行く道路、また日本海岸を通る道路、蒙古から香港、或は佛領印度支那に行く道路が必要です。一般に道路といふものを馬鹿にして居るが、治安の恢復上、非常に大事なことは、エチオピアに於いてイタリ―が最初にやつたのは道路の建設であることを見ても判ります。大体、道路を三角形に造つて、その一辺を底辺として、だん／＼に拓けて行く、その幅員も非常に広く、大きな自動車や、機関車が通れるので、殆ど叛乱を起すものがない。假りに叛乱が起つても拡大出来ないの、昔から植民地行政は道路の建設から行はれて居る、その意味に於て支那に道路を造ることが非常に大事だと思ひます。それから産業道路と国防道路が大事です。また鉄道を造るにも、成るべく、香港、シンガポールにまで一枚の切符で行けるやうにすることも必要で、さういふ距離の克服が基礎となつて、初めて東亞の共榮圈が發達するのではない

でせうか。

次に交通と都市との関係ですが、これから出来る日本の都市には先づ立派な道路を作りその後で家が建てられるやうにしたい。最近、空襲を受けてあるロンドン、或はアメリカのワシントンなどは、都市の面積の三四割ぐらゐが道路になつて居るのに、日本は一割にも満たない。これが防空といふ場合に、日本のやうに道路が貧弱であり、溝などがあつては、高射砲が走るにも不便であつて、空手で防備するやうでは殆ど火事を防ぐことすら困難ではないかと思ひます。昔都城の間置に幾重にも壕が繞らされたと同様に、或はベルリンに造られた環状線の道路網のやうに、自由に高射砲が走る事が出来、敵機の襲来に対して、高射砲を集注出来るやうな道路網を大都市に完備しなければならぬ。鉄道の建設にしても、京濱沿線のやうに、工場が密集してゐては、工場が爆破されると同時に鉄道も爆破され、鉄道が爆破されると同時に工場も爆破されることになるので、鉄道沿線の或る一定地域には工場建設を避ける必要がある。ドイツでは道路の両側に、二百メートルの空地を造つて居ります。これは道路が飛行機の不時着陸地になり、作戦上の基準にもなるのです。日本のやうに家が建てこれて居ては道路が全然役に立たない。以上の諸點から、今後の交通計画には当局も十分計画的に顧ひたいと思ひます。大層長く喋りまして失

禮致しました。

小峰 それでは皆さん、色々結構なお話を伺ひまして、どうも有難うございました。

附
錄

(一) 近衛内閣基本國策要綱

(昭和十五年八月一日
閣議決定終表)

世界は今や丁史的に一大転機に際会し、數個の國家群の生成發展を基調とする新なる政治經濟文化の創成を以んとし、皇國また有史以來の大試練に直面す。この秋に當り眞に肇國の大精神に基く皇國の國是を完遂せんとせば、右世界史的發展の必然的動向を把握して庶政百般に亘り速に根本的刷新を加へ、萬難を排して国防國家体制の完成に邁進することを以て刻下喫緊の要務とす。よつて基本國策の大綱を策定すること左の如し。

基本國策要綱

根本方針

皇國の國是はハ絃一宇とする肇國の大精神に基き世界平和の確立を招来することを以て根本とし、先づ皇國を核心とし日滿支の強固なる結合を根幹とする大東亜の新秩序を建設するにあり。これがため皇國自ら速に新事態に即應する不拔の國家態勢を確立し國家の總力を挙げて右國是の具現に邁進す。

二、国防及外交

内外の新情勢にかんがみ国家總力發揮の国防国家体制を基底として固是遂行に遺憾なき軍備を充實す。

現下の外交は大東亜の新秩序建設を根幹とし先づその重心を支那事變の完遂に置き實際的大變局を遠觀し建設的にして且つ弾力性に富む施策を講じ以て国運の進展を期す、
国内態勢の刷新

内政の急務は国内の本義に基き庶政を一新し国防国家体制の基礎を確立するにありこ
れがため左記諸件の實現を期す。

(1) 国體の本義に透徹する教養の刷新と相俟ち自我功利の思想を排し國家奉仕を第一義とす
る國民道徳を確立す。

(2) 強力なる新政治体制を確立し国政の綜合統一を圖る。

(1) 官民協力一致各々その職域に應じ國家に奉公することを基調とする新國民組織の
確立

(2) 新政治体制に即應し得べき議會翼賛体制の確立

(3) 行政の運用に根本的刷新を加へその統一と敏活とを目標とする官界新態勢の確立。

- (3) 皇国を中心とする日滿支三國經濟の自主的建設を基調とし国防經濟の根基を確立す。
- (4) 日滿支を一環とし大東亜を包容する協同經濟圈の確立
- (ロ) 官民協力による計画經濟の遂行特に主要物資の生産配給、消費を貫く一元制統制
基礎の整備
- (ハ) 綜合經濟力の發展を目標とする財政計画並に金融統制の確立強化
- (ニ) 世界新情勢に対応する貿易政策の刷新
- (ホ) 国民生活必需物資特に主要食糧の自給方策の確立
- (ヘ) 重要産業特に重、化学工業及機械工業の副期的發展
- (ト) 科学の副期的振興並に生産の合理化
- (チ) 内外の新情勢に対応する交通運輸施設の整備拡充
- (リ) 綜合国力の發展を目標とする国土開發計画の確立
- (4) 国是遂行の原動力たる国民の資質体力の向上並に人口増加に関する恒久的方策特に
農業及農家の安定發展に関する根本方策を樹立す。
- (5) 国策の遂行に伴ふ国民犠牲の不均衡の是正を断行し専制的諸施策の徹底を期すると
共に国民生活を刷新し眞に忍苦十年時艱克服に適應する質実剛健なる国民生活の水

準を確保す。

(二) 新体制準備會に於ける首相聲明

今やわが國は世界的大動亂の渦中において、東亞新秩序の建設といふ未曽有の大事業に邁進しつゝある、この秋に当り世界情勢に御應しつゝ、能く支那事變の処理を完遂すると共に進んで世界新秩序の建設に指導的役割を果たすためには國家國民の總力を最高度に發揮してこの大事業に集中し、如何なる事態が発生するとも独自の立場において迅速果敢且つ有効適切にこれに対処し得るやう、高度國防國家の体制を整へねばならぬ、しひして高度國防國家の基礎は強力なる國內体制にあるのであつて、こゝに政治、經濟、教育、文化等あらゆる國家國民生活の領域における新体制確立の要請があるのである。

この要請は一内閣一黨派一個人の要請を遙かに超えたる國家的要請であり、また何等か特定の政策のためにのみ必要とされる一時的なる要請でもなく必要に應じて如何なる政策をも強力に遂行し得るための恒常的なる要請である、いまわが國がかくの如き強力なる國內新体制を確立し得るや否やは正に國運興隆の成否を決定するものといはねばならぬ。

かゝる新体制に含まるゝものとしては先づ統帥と國務との調和、政府部内の統合及び能力の強化、議會翼賛体制の確立等が挙げられねばならぬ、これ等の事項については、政府

の立場において鋭意その実現を期しつゝ、ある、しおしなわらさらしに重要なるはこれらの基礎をなす萬民翼賛の所謂国民組織の確立であつて、こゝに準備会を招請し協議協力を求めんとするのち、正にこの問題についてである。

この国民組織の目標は、国家国民の總力を集結し、一億同胞をして生きた一体として等しく大政翼賛の臣道を完うせしむるにある、かゝる目標を達成するには、全国民がその日常生活の職場において翼賛の實を挙げ得るやうにせねばならぬのである、愚かに従来如く国民の大多数が、三年か四年に一度の投票により選挙に参加するのみを以て、政治と關係する唯一の機会とするが如き状態にあつては、国民全部が国家の運命に熱烈なる關心を持ち得なかつたのもむしろ当然といふべきであらう。

国民組織は国民が日常生活において国家に奉公する組織なるが故に、それは経済及文化の各領域とわたつて樹立されねばならぬ、即ち経済において文化においても、あらゆる部分がそれぞれ縦に組織化され、更に各種の組織を横に結んで統合するところの全国的なる組織が作られねばならぬ、今日経済、文化兩方面において政策を樹立する当局者が国民の實際活動について眞の理解を有せず、また国民の側においても国家の政策決定に無關心であり、かくて取締るものと取締られるものとの対立的關係に置かる、如き傾向あるは、

正しく萬民翼賛の實を擧ぐべき組織なき処より生まる、缺陷である、かく考ふる時いか所の国民組織の眼目が茶辺にあるかは自ら明白である、即ちそれは国民をして国家経済及び文化政策の楛立に内面より參與せしむるものであり、同時にその樹立されたる政策をあらゆる国民生活の末梢に至るまで行渡らせるものなのである、かゝる組織の下において初めて下意上達、上意下達、国民の總力が政治の上に集結されるのである、

以上の如き国民組織が完成されるためには一つの国民運動が必要である、元來かくの如き国民運動は国民の間から自発的に盛り上つて来るべきであつて、政府がこの種の運動を企画指導し、又はこれを行政機構化することは国民の自発的總力の發揮を妨ぐるの虞があるのである、しかしながら現下の情勢はかゝる運動の自然発生的展開にのみ期待するを許さず且つ又下からの運動は動もすれば分派的抗争に陥り眞実の国民運動となり得ぬ虞がある、こゝにおいて政府もまたこの運動に対して当然積極的にこれを育成指導する必要があるのである、

かく觀じれば国民組織の運動は實に官民協同の国家的事業であり、全国的なる国民翼賛運動に外ならぬのである、しかしてそれは單に狭き意味における精神運動ではなく實に政治理想と政意意識の高揚を目的とするものである、これがためには廣く朝野有名無名の

人材を登用して運動の中核体を組織し、そこに強かなる政治力と実践力を結集せしむることがこの運動に不可欠の要件となるのである。

かくの如くこの運動は高度の政治性を有するものではあるが、それは漸じて所謂政黨運動では無い、政黨はそも／＼個別的分化的なる部分の利益、立場を代表することをその本質の中に藏してゐる、勿論部分なき全体はないのであるから政黨がその中に部分的要素を持つといふことのみを以てこれを非難するは必ずしも当らぬ、殊に経済活動の基礎が自由主義の原理にあつた時代においては、かゝる政黨の存立もその意味があつたのであつて、我が国においても政黨が藩閥官僚勢力に対し民意を伸張したことはこれを認めねばならぬ。しかしながら同時に政黨の過去における行動がやゝもすれば、我が議會協賛の本然の姿から遠脱する熾みの少くなかつたことも亦これを否定すべくもない。

國民組織の運動はかゝる自由主義を前提とする分立的政黨政治を超越せんとする運動であつて、その本質はあくまで挙國的、全体的、公的なるものである、

それは國民總力の集結一元化を促進することを目的とするものであり、従つてその活動分野は國民の全生活領域に及ぶものである。國民組織運動はそのゆゑに、かりに民間運動として始められた場合においても、すでに本質上は従來の概念における政黨運動ではない、

むしろ政黨も政派も、經濟団体も文化団体も、凡てを包括して公益優先の精神に歸一せしめんとする趨政黨の國民運動たるべきものである。況やこの運動が政府の立場においてなされる、場合には、それは如何なる意味においても政黨運動ではあり得ない、いやしくも廟堂に立つて齟齬の重責に任ずる者は、あくまで全体の立場に立つものであつて、自ら部分的対立の抗争性をその本質の中に含む政黨運動に従事することは許されぬものと考ふるのである。

國民組織、特に政府によつてなされる、國民組織の運動が 政黨運動の形を取るべきものでないこと上述の如くであるが、さればといつて、いはゆる一國一黨の形をとることもまた到底許されぬ。何となれば一國一黨は一つの「部分」を以て直ちに「全体」となし、國家と黨を同一視し「黨」に反対するものをもつて國家に対する叛逆と断じ「黨」の権力的地位を恒久化し、黨首をもつて恒久的なる権力の把持者となすことを意味するからである。かゝる形態が他國において如何に優劣なる実績を示したりとはいへ、その形態を直ちに日本において認むることは、一君萬民のわが國體の本義を紊るものといふべきである。わが國においては万民齊しく翼賛の責に任ずるのであつて、一人もしくは一黨が権力によつて翼賛を独占することは絶対に許されぬ。萬一翼賛の意思において異なるものありとすれ

ば、それこそ聖断に仰ぐべきであり、一度び聖断の下されたるときは凡ての臣僚が「承諾必謹」の大義に歸一することが日本政治の眞の姿でなければならぬ。

學之新なる国民組織は、国民があらゆる部門において大政翼賛の誠を致さんとする国家的且つ恒常的なる組織である、素よりこれが完成は至難の事に属するとはいへ、しかも政府はこれを以て時難を克服すると最善の途なりと信ずる、本年二月十一日には畏くも大詔を渙発せられ非常の世局に際しわれ／＼臣民の処すべき道を明かにし給うたのであるが、政府はこれに聖旨を奉戴し、挺身してかゝる国民翼賛運動の先頭に立ち、現下わが国の直面する大試練を突破して、以て皇運扶翼の重責を完うせんとするものである。

新体制準備会は軍、官、民各方面の権威者に参集を請ひ、かくの如き国民組織の一般的構成、国民運動の中核体の組織、それと現存諸団体との調整、国家機構との連繫等につき協議協力を乞はんとするものである。

三 日滿支經濟建設計畫 Ⅱ 發表

産業分野

基礎産業振興經工業・大陸へ

農業・土地制度を改善

産業分野の決定に方つては日滿支三國の立地條件とそれらの經濟發展段階を考慮し、眞の有機的一體として綜合的にこれを決定することが所要である。

皇國は今度の精密工業、機械工業の劃期的振興を圖り重工業、化学工業及び鉍業等の基礎産業を大いに發展せしむることが必要である。

滿洲國においては鉍業及び電気事業の劃期的發展を期待すると共に重工業及び化学工業の發展に対してもわが國は必要なる援助を提供するものである。

支那においては今後鉍業及び製鹽業を發展し工業原料の大量生産を期待すると共に立地的條件から見て重工業及び化学工業の發展の余地あり今後に期待するものである。

輕工業の大陸における發展はこれを大いに助長する必要を認る。また將來皇國は輕工業兼中織維工業及び雜工業を逐次整理し、これに大陸移動を考慮するの要がある。

皇國の農業に關しては土地に關する諸制度を改善し經營を刷新し、農家の安定向上を図り國民主食を確保すると共に農村人口の定有を策せんとす。なほ水産業に關しては益々その發展を図りまた森林資源の合理的活用とその保護を図らんとす。

滿洲の農業に關しては日滿支の食糧飼料補給の基地たるに鑑及また世界に對する特殊農産物の供給源たるに鑑及徹底なる農産物増産を期待するものである。なほ農業の開發に當つては皇國農業尙拓民の入植を促進する、支那の農業についてはその國民主食の確保に努め棉花及び特産物の増産を必要と考へる。

勞務

勞務技術改訂

劃期的新体制

世界の經濟に對して優立を確保するためには國民の勞務及び技術の地位が劃期的に重要

性を増して来るのであるが、これらため皇國の勞務技術の体制に劃期的な改訂を加へる必要がありまた東亞共榮圈の世界經濟に對する優位性を維持するためにも各國及び各地域がこれの有する勤勞力を全体の向上のため貢獻せしむることを考へなければならぬ。

これがため皇國は勞務技術の新しい体制を整へ、勞務者自身の練成、科學教育の徹底、勞働生産性の高度化、技術者及び技能者の養成に努め滿支經濟建設に對して所望の援助育成の目的を達成せんとする。

即ち滿洲及び支那に對しては産業開發または經濟復興に必要な良き技術者及び技能者を提供するであらう、また兩國は勿論技術の重要性に鑑みて何れもこれを養成のため施策が必要なのである。

滿洲國は北支勞務者の計畫移入滿並に定着を図るとともに國內よりの充足方策を確立し特に鉱工業生産における勞務管理の刷新確立に努むべき要ありと考へらる。

融 金

資 金 配 分 計 畫

國 際 決 済 に 三 國 互 助

國防經濟の建設を促進するためには金融の職能も自ら國家目的々にならなければならぬ。それは國家の必要とする物資の質及数量の確保を可能ならしめることにあるのである。日滿支を通ずる産業計画の実施を可能ならしめるためには計画的に資金の配分を決定し、且これを実行し得る金融機構を有たねばならぬ。また今後技術の進歩産業分野の設定等に伴ひ企業施設の転換に亦じ、また重要物資の貯蔵をなし得べき金融上の仕組みを整備するの要ありと考へらる。

日滿支の資金は三國の蓄積によるべきは勿論であつて、これがため日滿支三國は蓄積の増加及びその活用を計らねばならぬ。

しかし滿洲、支那における重要産業の開發に所要の資金は皇國これを援助する力である。また日滿支三國の經濟關係の緊密化に伴ひ國際決済上の三國の互助的關係を確立して行くべきである。

交 易 特殊支拂協定へ

新しき世界經濟の秩序の中における交易に關しては従来の如き商業的貿易主義に相當の

訂正を加へる要がある、即ちこれに代つて生産主義的な貿易即ち各國各地域、各經濟圏より自らの計画的生産に必要な物資を獲得するために他の必要とする物資を供給し、日滿支三國は勿論、共榮圏の中の各地域は相互一体的な關係に貿易を規正して行くことが必要になるのであり、かくするとさ日滿支三國及び共榮圏内部における物資交流の緊密化を助成するため相互の間に特殊の支拂協定が必要となつて来るのである。

交通 綜合計畫 畫運 營

日滿支三國及び共榮圏内における物資交流の緊密化に伴ひまを共榮圏の安全を確保するために三國の交通關係は綜合計画的に整備運営せらるゝことを必要とし、これがため三國相互間の海陸運輸施設の連絡を促進し船舶の飛躍的增加、航空の統制連絡電気通信施設の整備拡充をはかりねばならぬ。

京成府南大田通二丁目二十一番地
騰寫印刷 第一プリント社
資本金 六九六五番